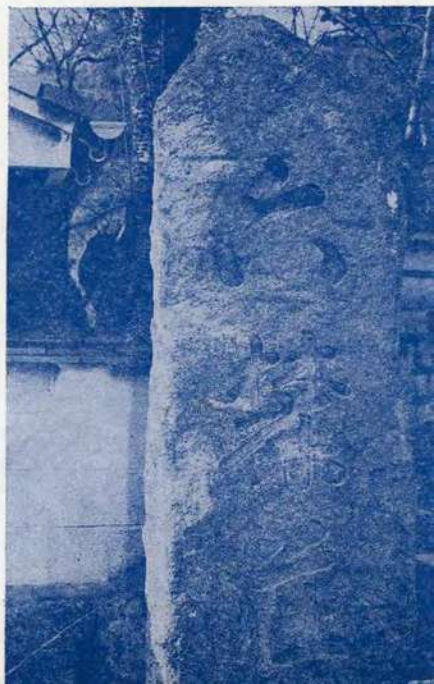


六麓莊四十年史



目次

はしがき

六麓荘町
町内会長 山田 六郎

われらの六麓荘

..... 1

地勢地質、気象及び気候、歴史と沿革、伝説、古墳、文学詩歌

その地名考

..... 14

六麓荘を開いた人々

..... 19

六麓荘を語る

..... 20

古老座談会

..... 27

歴代、町内会長が語る思い出話

..... 41

六麓荘ゆかりの人々

..... 58

六麓荘の現在

61

学校、保健・衛生、年中行事、交通機関、自治機関

あすの六麓荘への提言

71

特別地区を提唱する

大谷 哲平

72

町内会所有道路の問題

豊田善右衛門

73

理想境の保全と、その充実

山田 六郎

74

町内会規約・会員名簿

77

あとがき

80

はしがき

六麓莊町
町内会長

山田 六郎

売り家と唐ようで書く三代目



芦屋市章

芦屋、芦屋——人口約八万の国際文化都市芦屋、市域十六平方キロ。米国カリフォルニア州モンテペロ市との姉妹都市ASHIYA。旧精道村が山を背にして海に臨み、芦屋、打出、三条、津知の四部落から成り平和にして隆々として発展の勢あり、即ち山、海、四、円平、旭日——を市章としている芦屋。このようにして芦屋が全国有数の最高住宅地であることは、国内ばかりでなく、外国にも知られている。地理的条件の良さに加えて、永年の住民の努力があつて、こんなに良い市街地をつくりあげたものであるが、それも太平洋戦争によって一時、崩壊した時期もあつた。

終戦真際の昭和二十年八月ころには、全国の大中都市は殆んど焦土と化していたが、芦屋市も八月五日の大空襲で例外ではなかった。そして十五日戦局にピリオドが打たれた。

戦後の廃墟の中から立ち上ったわが国民は、その偉大なる英知と勤勉で、営々として国力を充実して行つた。重化学工業を中心とするその産業構造は、驚異的な高度成長経済をもたらした、GNP世界第二位、外貨蓄積（債権を入れて）約三百億ドルという世界の経済大国に伸び

て行った。

この間、わが芦屋市も着々と戦後の復興が成り、昭和二十六年には特別法によって「国際文化住宅都市」に指定され、同年三月三日「芦屋国際文化住宅都市建設法」が公布、即日施行となり、東京の首都建設法、奈良と京都の国際文化観光都市建設法、横浜と神戸の国際港都建設法、広島平和記念都市建設法など一連の特別都市法施行の中に第十六番目の都市として加入したが、この法案要求の前段における住民投票で示した市民の総意は、芦屋を国際的なハイ・クラスの住宅都市にしようという市民の宣言であり、意思の表明でもあった。

そして三十九年五月には市民憲章が制定、「わたしたち芦屋市民は、自然の風物を愛し、町を緑と花でつつみましよう」を第一項目とした五つの項目が誓われているが、その前文には「国際文化住宅都市の市民たる誇り」を謳っている。

万丈の気を吐く六麓荘の存在

言うまでもなく、われわれは芦屋市民であることに大きな誇りを持っている。前時代的にも知れぬが、大正から昭和にかけては「芦屋に住んでいる」ということは「富裕と知性」の代名詞であり「東の鎌倉、西の芦屋」と対比され、芦屋マダム、鎌倉夫人という対句がジャーナリズムを賑わしたし、文豪谷崎潤一郎も「細雪」で芦屋女性の優雅さを思う存分に描いている。

しかし現在では、芦屋に住んでいる——芦屋市民であることの持つ意味とニュアンスは、ブルジョアのな自慢でなくて、よい生活環境の中に、おっとりとした住民自治があり、合理的で

キメの細かい行政サービスがあるから、此処に住む喜びをもつ——というのが一般の意識であろうが、果して今日の市政において、これが実現されているであろうか。

しかして、高度成長経済の過程を通して、国内の各都市は数々の産業公害に蔽われ、スモッグは太陽を奪い、騒音は日常生活を悩まし、環境は緑を失い河川を汚濁し、青い海はヘドロに変色して極度な自然破壊を招来している現状に対して、自然の回復、環境の保全等エコロジーの問題が叫ばれ出したのが、今日の課題である。

このことは、わが芦屋市の一部でも既に自動車の排気ガス、騒音公害の現象が起っており、騒音は一時間値で八二ホン、硫酸酸化物〇・〇五三PPMという数字を示している。

芦屋市内は既に古く昭和十年に六麓荘においては日照権の問題を解決しているし、戦後逸早くパチンコ店、ボーリング場、映画館をもシャットアウトし、十三坪を越える町工場もその存在を許されていないのである。これは恐らく全国の都市中、比類のない芦屋自体の高度文化性であろうし、こういう町ぐるみの住民運動は永く、芦屋市の先見的栄光それ自身を物語るものでなくして何んであるうか。

しかし、過去の栄光にのみ耽っているのは危ない。既に芦屋にもその徴候が現われている。高層建築が競い立ち公害は瀾漫している。芦屋も既に所謂三代目の時期に入った。「売家と唐様に書く三代目」時代に現在の芦屋は入りつつある。売家と唐様に書かないよう、われわれは市当局はじめ住民諸氏の奮起を望むためにこの「六麓荘四十年史」を上梓した。

このとき、われわれはわが六麓荘町の誕生と、その現在に至る歴史、沿革を静かにふり返えり同時にその将来を展望する価値を認めるのである。

戸数百四十、人口約六百、その中にはスイス、オランダ、独逸、仏国、英国、米国、香港、台湾、韓国の人々も生活をたのしみ、町内会の規範のもと、整然たる生活をしている。

そこにはまだ、往年の青空がのぞき、緑が存在し、騒音も、排気ガスも絶無に近い。そして道路は見事に舗装されて、文字通り国際文化住宅都市の格調と雰囲気を持している現代日本の理想郷／＼ つのユートピア社会形成であるといっても決して過言でないわが六麓荘こそ、蓋し、今日の芦屋のために万丈の気を吐き、その象徴的地帯を形成しているものと声を大にしたいのである。（昭和四十八年六月記）

緑の中の六麓荘

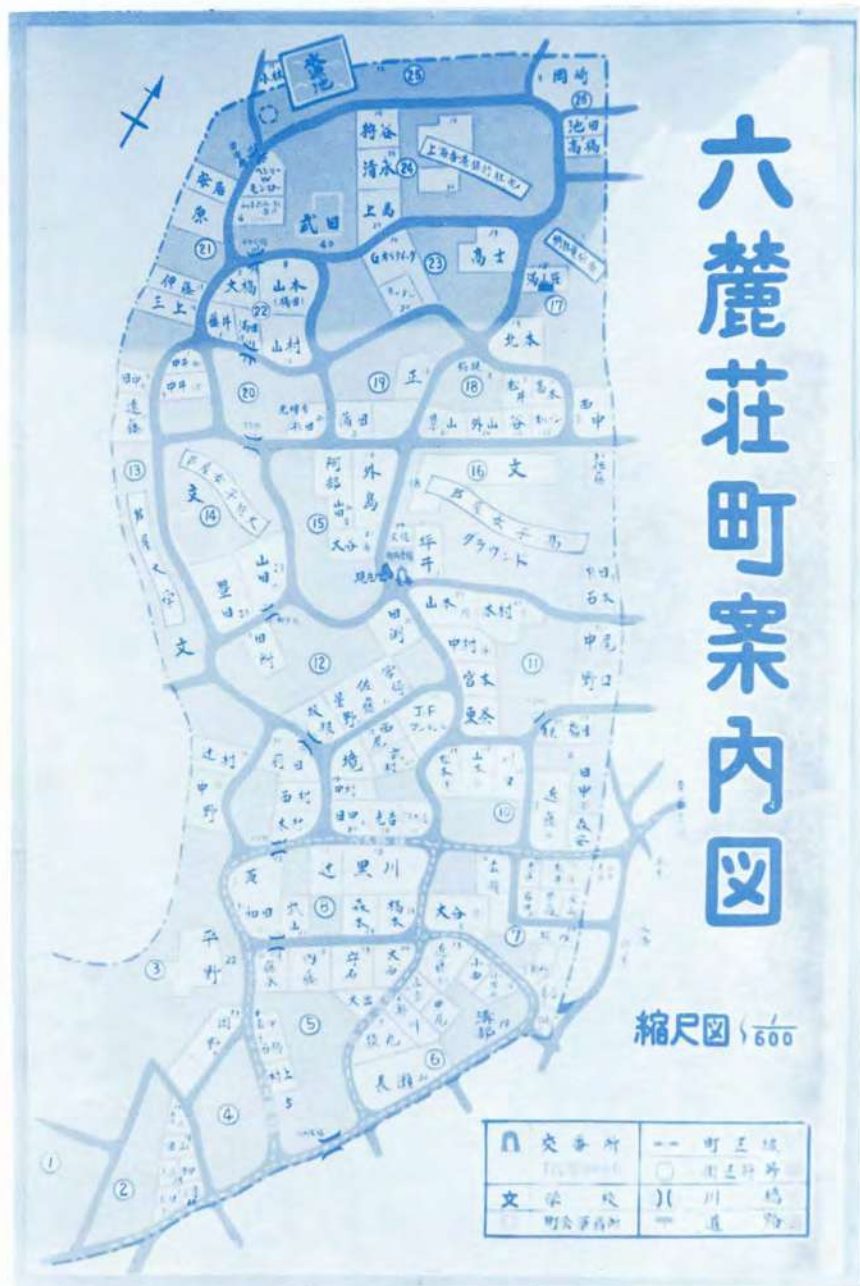




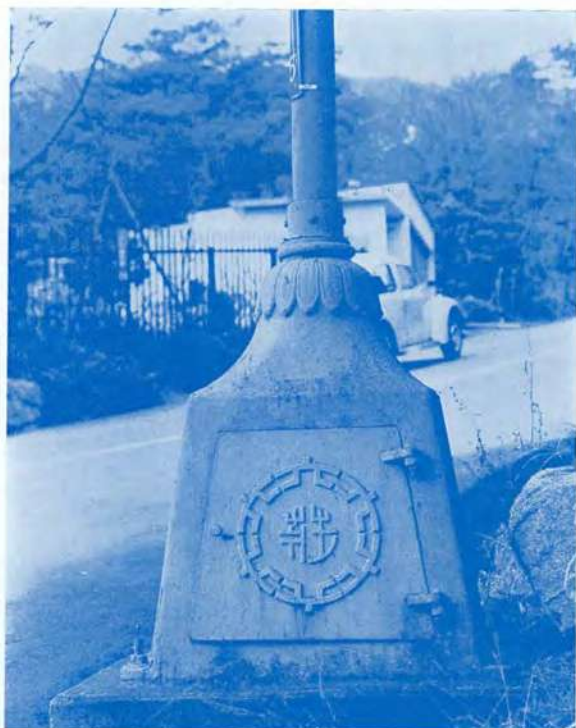
鳥瞰した六麓莊町の全景



六麓莊町案内図



現在の六麓莊 (48年6月)



街燈の基部

昔の面影を
現在に残している
六麓荘の一部

町創立当時に来た街燈の土台部で香港の街燈そっくり。いまも一部が役立っている。六つの「六」が円形を描いた中に「荘」のマークは造成した六麓荘土地開発会社の社章。

芦屋大学附近の街燈





六麓荘から見た芦屋市の夜景



六 麓 莊 I



昭和3年開発当時の六麓荘及隣地

荘内地相の一部を眺め接続の苦楽園並に羅寿夢山荘を望む
(散在せる建物は苦楽園・遠望は羅寿夢山荘)

開発当時の

電話地下配線工事実況



水道、瓦斯、電気地下埋設工事

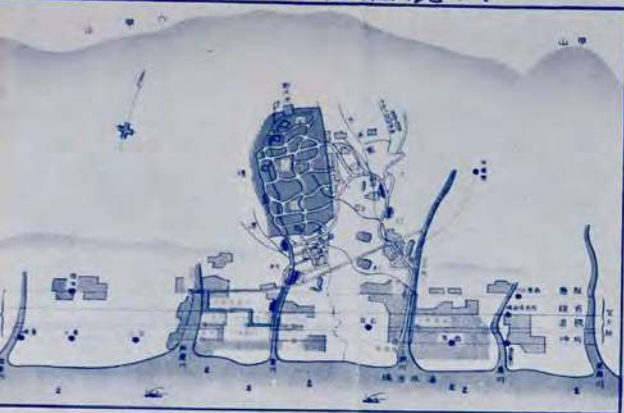


下水工事（ヒューム管埋設）



六 麓 莊 II

圖略近附及莊麓六



六麓莊經營地地價價格表

區段	地號	面積	地價	備註
第一區	1	1.2	1200	
第一區	2	1.5	1500	
第一區	3	1.8	1800	
第一區	4	2.1	2100	
第一區	5	2.4	2400	
第一區	6	2.7	2700	
第一區	7	3.0	3000	
第一區	8	3.3	3300	
第一區	9	3.6	3600	
第一區	10	3.9	3900	
第一區	11	4.2	4200	
第一區	12	4.5	4500	
第一區	13	4.8	4800	
第一區	14	5.1	5100	
第一區	15	5.4	5400	
第一區	16	5.7	5700	
第一區	17	6.0	6000	
第一區	18	6.3	6300	
第一區	19	6.6	6600	
第一區	20	6.9	6900	
第一區	21	7.2	7200	
第一區	22	7.5	7500	
第一區	23	7.8	7800	
第一區	24	8.1	8100	
第一區	25	8.4	8400	
第一區	26	8.7	8700	
第一區	27	9.0	9000	
第一區	28	9.3	9300	
第一區	29	9.6	9600	
第一區	30	9.9	9900	
第一區	31	10.2	10200	
第一區	32	10.5	10500	
第一區	33	10.8	10800	
第一區	34	11.1	11100	
第一區	35	11.4	11400	
第一區	36	11.7	11700	
第一區	37	12.0	12000	
第一區	38	12.3	12300	
第一區	39	12.6	12600	
第一區	40	12.9	12900	
第一區	41	13.2	13200	
第一區	42	13.5	13500	
第一區	43	13.8	13800	
第一區	44	14.1	14100	
第一區	45	14.4	14400	
第一區	46	14.7	14700	
第一區	47	15.0	15000	
第一區	48	15.3	15300	
第一區	49	15.6	15600	
第一區	50	15.9	15900	
第一區	51	16.2	16200	
第一區	52	16.5	16500	
第一區	53	16.8	16800	
第一區	54	17.1	17100	
第一區	55	17.4	17400	
第一區	56	17.7	17700	
第一區	57	18.0	18000	
第一區	58	18.3	18300	
第一區	59	18.6	18600	
第一區	60	18.9	18900	
第一區	61	19.2	19200	
第一區	62	19.5	19500	
第一區	63	19.8	19800	
第一區	64	20.1	20100	
第一區	65	20.4	20400	
第一區	66	20.7	20700	
第一區	67	21.0	21000	
第一區	68	21.3	21300	
第一區	69	21.6	21600	
第一區	70	21.9	21900	
第一區	71	22.2	22200	
第一區	72	22.5	22500	
第一區	73	22.8	22800	
第一區	74	23.1	23100	
第一區	75	23.4	23400	
第一區	76	23.7	23700	
第一區	77	24.0	24000	
第一區	78	24.3	24300	
第一區	79	24.6	24600	
第一區	80	24.9	24900	
第一區	81	25.2	25200	
第一區	82	25.5	25500	
第一區	83	25.8	25800	
第一區	84	26.1	26100	
第一區	85	26.4	26400	
第一區	86	26.7	26700	
第一區	87	27.0	27000	
第一區	88	27.3	27300	
第一區	89	27.6	27600	
第一區	90	27.9	27900	
第一區	91	28.2	28200	
第一區	92	28.5	28500	
第一區	93	28.8	28800	
第一區	94	29.1	29100	
第一區	95	29.4	29400	
第一區	96	29.7	29700	
第一區	97	30.0	30000	
第一區	98	30.3	30300	
第一區	99	30.6	30600	
第一區	100	30.9	30900	
第一區	101	31.2	31200	
第一區	102	31.5	31500	
第一區	103	31.8	31800	
第一區	104	32.1	32100	
第一區	105	32.4	32400	
第一區	106	32.7	32700	
第一區	107	33.0	33000	
第一區	108	33.3	33300	
第一區	109	33.6	33600	
第一區	110	33.9	33900	
第一區	111	34.2	34200	
第一區	112	34.5	34500	
第一區	113	34.8	34800	
第一區	114	35.1	35100	
第一區	115	35.4	35400	
第一區	116	35.7	35700	
第一區	117	36.0	36000	
第一區	118	36.3	36300	
第一區	119	36.6	36600	
第一區	120	36.9	36900	
第一區	121	37.2	37200	
第一區	122	37.5	37500	
第一區	123	37.8	37800	
第一區	124	38.1	38100	
第一區	125	38.4	38400	
第一區	126	38.7	38700	
第一區	127	39.0	39000	
第一區	128	39.3	39300	
第一區	129	39.6	39600	
第一區	130	39.9	39900	
第一區	131	40.2	40200	
第一區	132	40.5	40500	
第一區	133	40.8	40800	
第一區	134	41.1	41100	
第一區	135	41.4	41400	
第一區	136	41.7	41700	
第一區	137	42.0	42000	
第一區	138	42.3	42300	
第一區	139	42.6	42600	
第一區	140	42.9	42900	
第一區	141	43.2	43200	
第一區	142	43.5	43500	
第一區	143	43.8	43800	
第一區	144	44.1	44100	
第一區	145	44.4	44400	
第一區	146	44.7	44700	
第一區	147	45.0	45000	
第一區	148	45.3	45300	
第一區	149	45.6	45600	
第一區	150	45.9	45900	
第一區	151	46.2	46200	
第一區	152	46.5	46500	
第一區	153	46.8	46800	
第一區	154	47.1	47100	
第一區	155	47.4	47400	
第一區	156	47.7	47700	
第一區	157	48.0	48000	
第一區	158	48.3	48300	
第一區	159	48.6	48600	
第一區	160	48.9	48900	
第一區	161	49.2	49200	
第一區	162	49.5	49500	
第一區	163	49.8	49800	
第一區	164	50.1	50100	
第一區	165	50.4	50400	
第一區	166	50.7	50700	
第一區	167	51.0	51000	
第一區	168	51.3	51300	
第一區	169	51.6	51600	
第一區	170	51.9	51900	
第一區	171	52.2	52200	
第一區	172	52.5	52500	
第一區	173	52.8	52800	
第一區	174	53.1	53100	
第一區	175	53.4	53400	
第一區	176	53.7	53700	
第一區	177	54.0	54000	
第一區	178	54.3	54300	
第一區	179	54.6	54600	
第一區	180	54.9	54900	
第一區	181	55.2	55200	
第一區	182	55.5	55500	
第一區	183	55.8	55800	
第一區	184	56.1	56100	
第一區	185	56.4	56400	
第一區	186	56.7	56700	
第一區	187	57.0	57000	
第一區	188	57.3	57300	
第一區	189	57.6	57600	
第一區	190	57.9	57900	
第一區	191	58.2	58200	
第一區	192	58.5	58500	
第一區	193	58.8	58800	
第一區	194	59.1	59100	
第一區	195	59.4	59400	
第一區	196	59.7	59700	
第一區	197	60.0	60000	
第一區	198	60.3	60300	
第一區	199	60.6	60600	
第一區	200	60.9	60900	
第一區	201	61.2	61200	
第一區	202	61.5	61500	
第一區	203	61.8	61800	
第一區	204	62.1	62100	
第一區	205	62.4	62400	
第一區	206	62.7	62700	
第一區	207	63.0	63000	
第一區	208	63.3	63300	
第一區	209	63.6	63600	
第一區	210	63.9	63900	
第一區	211	64.2	64200	
第一區	212	64.5	64500	
第一區	213	64.8	64800	
第一區	214	65.1	65100	
第一區	215	65.4	65400	
第一區	216	65.7	65700	
第一區	217	66.0	66000	
第一區	218	66.3	66300	
第一區	219	66.6	66600	
第一區	220	66.9	66900	
第一區	221	67.2	67200	
第一區	222	67.5	67500	
第一區	223	67.8	67800	
第一區	224	68.1	68100	
第一區	225	68.4	68400	
第一區	226	68.7	68700	
第一區	227	69.0	69000	
第一區	228	69.3	69300	
第一區	229	69.6	69600	
第一區	230	69.9	69900	
第一區	231	70.2	70200	
第一區	232	70.5	70500	
第一區	233	70.8	70800	
第一區	234	71.1	71100	
第一區	235	71.4	71400	
第一區	236	71.7	71700	
第一區	237	72.0	72000	
第一區	238	72.3	72300	
第一區	239	72.6	72600	
第一區	240	72.9	72900	
第一區	241	73.2	73200	
第一區	242	73.5	73500	
第一區	243	73.8	73800	
第一區	244	74.1	74100	
第一區	245	74.4	74400	
第一區	246	74.7	74700	
第一區	247	75.0	75000	
第一區	248	75.3	75300	
第一區	249	75.6	75600	
第一區	250	75.9	75900	
第一區	251	76.2	76200	
第一區	252	76.5	76500	
第一區	253	76.8	76800	
第一區	254	77.1	77100	
第一區	255	77.4	77400	
第一區	256	77.7	77700	
第一區	257	78.0	78000	
第一區	258	78.3	78300	
第一區	259	78.6	78600	
第一區	260	78.9	78900	
第一區	261	79.2	79200	
第一區	262	79.5	79500	
第一區	263	79.8	79800	
第一區	264	80.1	80100	
第一區	265	80.4	80400	
第一區	266	80.7	80700	
第一區	267	81.0	81000	
第一區	268	81.3	81300	
第一區	269	81.6	81600	
第一區	270	81.9	81900	
第一區	271	82.2	82200	
第一區	272	82.5	82500	
第一區	273	82.8	82800	
第一區	274	83.1	83100	
第一區	275	83.4	83400	
第一區	276	83.7	83700	
第一區	277	84.0	84000	
第一區	278	84.3	84300	
第一區	279	84.6	84600	
第一區	280	84.9	84900	
第一區	281	85.2	85200	
第一區	282	85.5	85500	
第一區	283	85.8	85800	
第一區	284	86.1	86100	
第一區	285	86.4	86400	
第一區	286			

開発当時の

— 六麓荘を語る —

地に空に不安意々加はる近代都市生活より脱して、一家族を不衛生極まる煤煙と塵埃との中より救はんが爲、健康安住地を
 需めらる、購買は、是非理想の住宅地六麓荘を一度御米親臨はり、將來の御良計を策てられん事を切望する次第であります
 御用の節は本社へ御一報願へば社員御伺ひ致します。

ます。下水道は衛生的に絶対遺憾なきを期し、専賣特許「ヒュウム」管を使用し將來永く故障なきやう留意してあります。瓦斯は多額の特別工費を負担し神戸瓦斯会社より供給を受け、居住者の経済的至便を圖つて居る次第であります。電燈・電熱は電話と共に地下線とし、自然の風致を損せざるやう電柱の竝立を避け、且つ非常時に安全を期する爲、此亦多大の費用を掛けまして地下埋設としました。電話は六麓荘獨特の地下線で我國住宅經營地で初めての試みであります。風雪の際故障の惧なく又故意に切斷せらるゝの憂なく、並列の柱を見ざる快感は實に風光明朗と相俟つて他に其の類を見ざる場であり、尙電話は芦屋局に屬して普通區域となつて居ります。道路舗装 莊内道路の幹支線共全部を滑べらぬ粗面コンクリートにて舗装を施し、兩側に綠芝の歩道を設けて道路の完全と美觀とを併せて保有せしめた事は、六麓荘の誇りとする所であり、運動場は一時に多人数の集合に適する場所とし、テニスコート・ローラースケート場・小兒プール及小供用運動器具を備へ付け、運動・散歩に好適の場所としてあります。俱樂部 大阪廣海氏寄附の豊公ゆかりの茶席殘月亭を落合橋畔展望唯一の所に移築し、六麓荘俱樂部として各位の御使用に供して居ります。價格低廉 以上の如き風光明朗の健康安住地にして、然かも隠れたる處に巨資を投じ、文化的施設を完備したるものにして斯かる廉價（價格表参照）の土地は殆んど其例を見ないのであります。

交通 阪神兩市との連絡には、阪急・省線・國道・全バス・阪神五線の交通機關備はり、芦屋及打出方面よりタクシーを利用せらるれば數分にして達します。阪急芦屋川・省線芦屋驛・阪神國道より六麓荘間に乗り自動車運轉して居ります。此間所要時間は五分乃至八分間であり、大阪・神戸市より自動車ならば三十分以内にて達します。

土地分譲要項

一 區劃 二百坪内外より以上御希望に應ず

但一區劃必要な場合は殘地の利用に差支なき限り百坪以上致します

代金授受 契約の際手附金として代金總額の二割以上支拂を願ひ、殘金

記の際（一ヶ月以内）支拂のこと

土地と建物と同時に契約の場合は契約の際代金總額の二割以上拂ひ、殘金は登記の際授受、又は年月賦拂にても御相談に應建物に對する設計は無料とす

健康上に大なる關係を有する紫外線量の比較一例を示すと左の如くであります

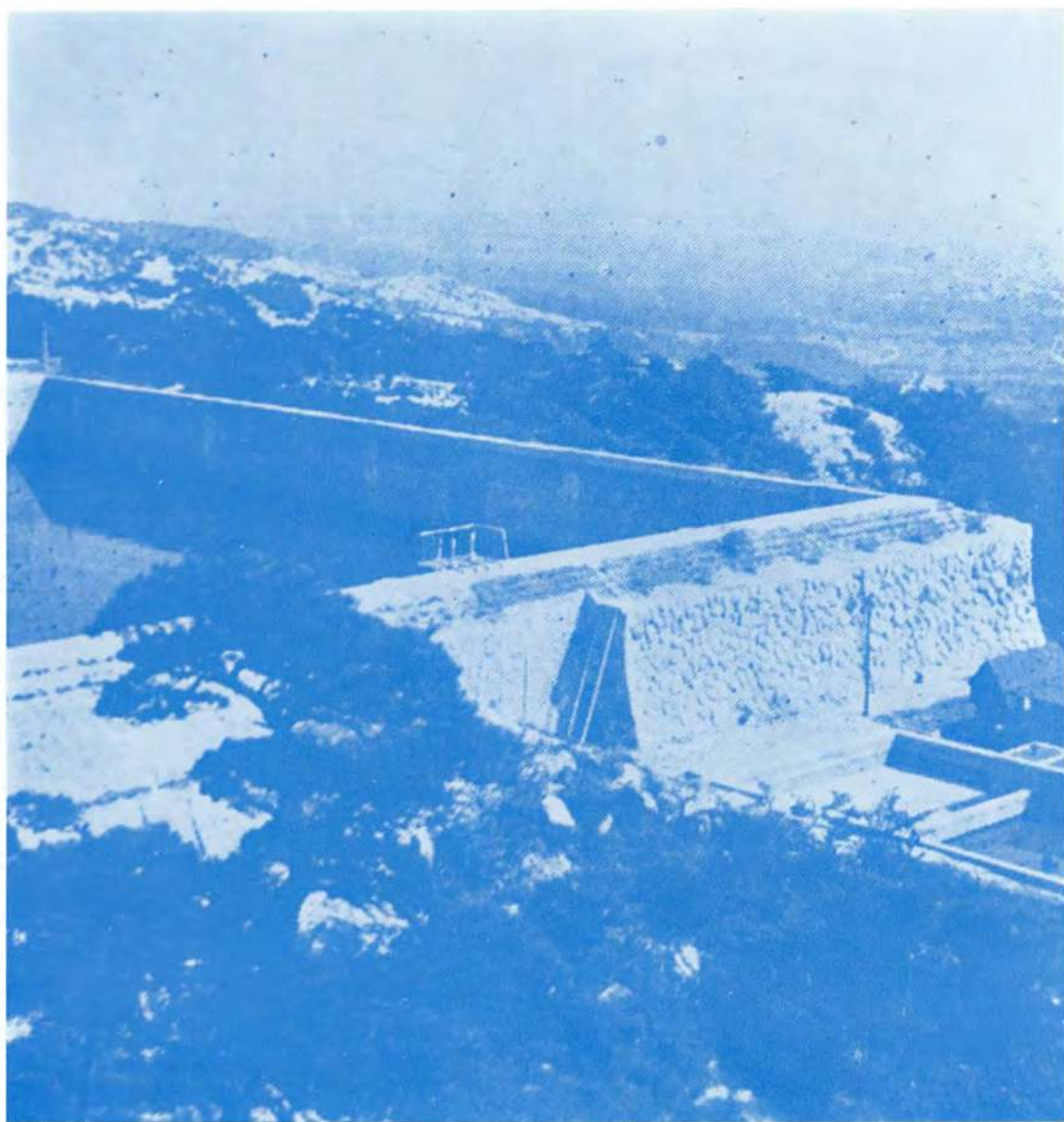
紫外線量比較		(大阪市内(關町)に於ける紫外線量)	
		(な一としたる六麓荘附近の紫外線量)	
昭和六年十一月	午前十時—十一時	午後二時—三時	平均
同 十二月	一・六	一・六	一・四
昭和七年一月	一・九	一・六	一・七五

尙平均温度及水質を掲げますと次の通りであります。

温度	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
平均	四・九	五・六	八・七	一二・二	一五・三	二一・三	二五・三	二六・八	二五・六	二一・四	一七・五	一四・五

六麓荘附近（昭和六年度調査）

六 麓 莊 III



水源池の一部

開発当時の



六麓荘に現在も残っている紅葉の滝

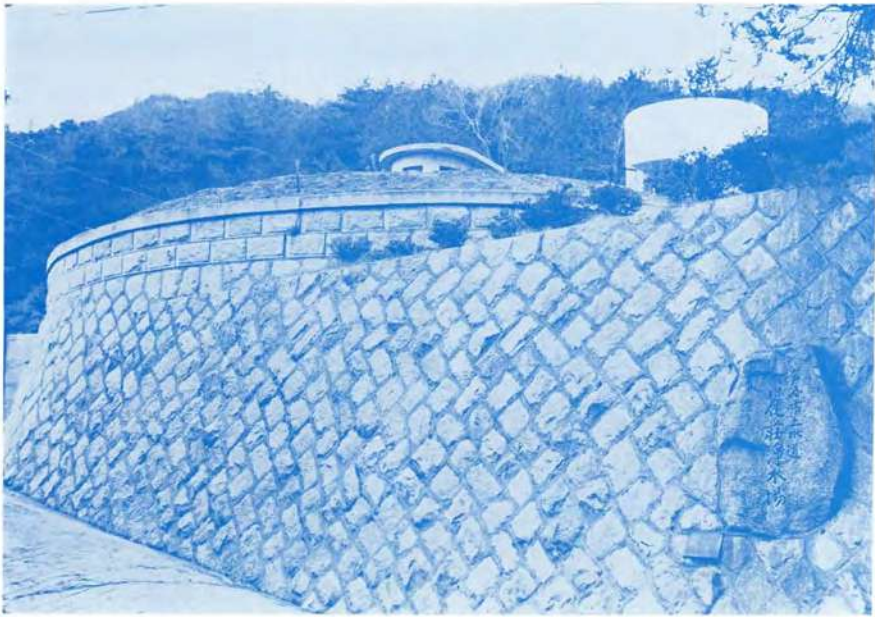


児童用プール（休憩所西側）

荘内運動場



テニスコート・ローラースケート
無料休憩所



現在の水源池



一部埋立てられた海岸地帯

われらの六麓荘

地 勢

改めて六麓荘の地勢といっても、要するに芦屋市の東北部山麓に位する、海拔二〇〇〜二五〇メートルの立地条件であるから、芦屋市の自然的環境の一部分を形成しているわけである。以下、その自然環境を略述しておこう。

東に商都大阪、西に国際港都神戸をひかえ、東は西宮市、西は神戸市の東灘区と隣接しており、市の北半は六甲山地であり、南半は大阪湾に臨み、風光明媚、気候温和である。

いま、大正十年十一月刊行の「兵庫県武庫郡誌」から精道村といった当時の芦屋市の古い記録から抄録すると、「本村は津知、三条、芦屋、打出の四大字に分かれ、村の北方には海拔九〇〇メートルの六甲山高く聳え、南に断層の如き地形を為して傾斜す。芦屋の北部に鷹尾山聳ゆ。海拔二七四・三メートルなり。南方、沿海の地は平野にして、北方に漸次隆

起し、海岸と距ること僅か二十余町なる平野と山地との境において、五〇メートルの高度となる。

芦屋川は村の西部を流る。河床平地より高く、汽車は河床の下を通過す。

堤防には松樹茂りて景趣を添う。急勾配に傾斜せる丘陵性の土地と、この川とは本村をして郊外住宅地として発展せしめたる主因をなせり。

宮川は源を村の東部なる岩ヶ平付近に発し、南流して西打出の東部を過ぎて海に入る。下流の両岸、松樹茂りて風致佳なり。

本村に属する海岸は屈曲なく、全長約一里、一直線に延び、松樹並立し、風光頗る賞すべし」とある。

そして当時（大正八年）の人口は戸数一九三八戸、人口八六六七人、一戸平均四・五人という数字で、本籍者は四九五〇人、非本籍者三七一七人で、総人口に対する非本籍者の割合が四七％に当ることは、当時芦屋が漸く別荘地、高級住宅地としての流入人口を示しているものとして興味がある。こ

こで精道村という村名について付記すると、旧尼崎藩の儒者豊田政苗の撰による「養精修道」により校名となった精道小学校の校名より取ったものといわれる。

以上は、五十年昔の芦屋の姿であるが、それでは現在の芦屋市の象徴地帯であるわが六麓荘の姿はどうであるか——昭和十五年十一月、市制は実施されたが、昔から人々に膾炙された別荘地「芦屋」という気品の高い性格が損われることを配慮して市域の拡張に消極的であった珍しい都市——現在計画されている海岸埋立地Aブロックを含め、一七・三五平方キロ——であることは前述したが、その北部に存在する六麓荘が名実ともにその伝統と品位を維持継承している一区画となろうとしているのが、現状だといえるのではあるまいか。

地 質

市街地西北端の三条から、東北方を結ぶ芦屋衝上断層崖下の海を埋めた崩壊土砂が、その後の地盤の隆起で陸上に姿を現わしたのが山手住宅地として有名な山麓台地である。六甲山地と海岸の沖積低地の間に東西に広がる芦屋の山手台地は、西は神戸、東は西宮の山手につづく台地で、三条、山芦屋町付近では幅五〇〜六〇メートルに過ぎないが、東するにつれ、幅を増し、山手、東芦屋、東山町では一キロメートル、

六麓荘、朝日ヶ丘、岩園町では、南は海拔高度二五〇メートルの六麓荘、朝日ヶ丘の各町に至る幅二・五キロメートル以上の広い地域に及び、その西部は交通の便のよい芦屋川畔とともに、良好な住宅地として早くから知られて来た。

しかし東部になると交通が不便である上に、宮川の本支流の頭部浸蝕や、陸地化後、山地より新たに転落して来た崩積物で、かなり起伏が大きくなっている。特に芦屋駅——岩園——高塚山を結ぶ高塚山衝上断層の南北一帯は、その影響で元の台地面の高度はかなり乱れて了っている。そのため六麓荘町を除くと住宅地としての開発が遅れた。しかし、戦後、甲南土地区画整理など宅地開発が進められ現在は快適な住宅地となっている。

以上、略述した通り、市域の三分の二を占める山地は、主として花崗岩でおおわれ、残り三分の一の地域は山地からの崩積層および新生代の成層で占められている。しかし山地に花崗岩に交って更新層が散見し、市域の狭い割合に地形と同様、地質構造も可なり複雑である。

気象及び気候

芦屋市は瀬戸内海の東の端、大阪湾に臨んでいる。そのため、気温の温和な晴天の多い瀬戸内海気候に属している。北

に海拔九〇〇メートル前後の六甲山地を控え、南は茅渚の海といわれる大阪湾に臨んでいるので、冬の北方季節風も六甲連山にさえぎられて、厳冬一月の平均気温も四〇五度という暖かさである。

夏の暑さも、海上から吹いて来る海軟風に和らげられ、三七〇二八度に止まり、年平均気温一六〇一七度の快適な気温を示している。だから前出の「武庫郡誌」においても

「乾湿寒暖その和を得、雨量少く、夏季炎暑甚しからず、冬期積雪稀有にして住民は四時氣候に苦しめらるることなく、生を安んずることを得るなり。恐らく全国中、最も人類生活に適する氣候を有する地方なるべし」

と書いているが「人類生活に適する」という記述など、まことに前時代的の表現で、読んでいてお互い微笑を禁じ得ないものがある。

降雨量は年間一〇〇〇ミリ内外という少なさで季節風の交代時期に当る六月や九月でも、月間の降雨量は二〇〇ミリに達することは稀れで、冬期では五〇ミリにも達せず、月間の晴天日数は二十日を越えている——というのが統計に示された数字である。

それから風向は阪神間の他の都市と同様、夏は海上からの南西あるいは南風が吹くが、海陸の気圧差が大きくないので風速も目だったほどの強さではない。むしろ冬期、六甲山越しに吹く西あるいは西北の風が強く意識される。年間を通じて見ると西風が強い。また地形の関係から起こる夏の海陸軟

風のけじめが大きく、兩者の交代時期に当る朝夕の風に悩まされるのも、瀬戸内海地方に共通に見られる現象ということになっている。

こんなわけで芦屋市街地の氣候は、夏の朝夕風的な蒸し暑さは避けがたいとしても、気温の変化が少いし、乾燥度が高く、風も一般に弱いので、わが国でも珍しい快適な氣候に恵まれた都市ということが出来る。

と同時に、二五〇メートルの高台に位置するわが六麓莊町の場合は、気温変化は乾いた空氣で一〇〇メートルの昇降につき約一度、湿った空氣は上昇して冷える際に凝結が起り潜熱が出て冷えを緩和するため、一〇〇メートル昇っても気温は〇・五度しか下らない——という氣象学上の通説から、夏期、平地よりいつも二、三度低い涼しさを感じることは、既にわれわれお互いが体験している通りである。

歴史と沿革

——山論のいわれ——

芦屋の地は生活条件に恵まれ、日本最古の文化である旧石器時代から祖先が住み着いていた。市内の岩ヶ平や朝日ヶ丘で発見された石器は、芦有道路工事で発見されたナウマン象

(学名ナマジクスゾウ、体高三・七メートル。洪積世前期の生存とされている)化石とともに、はるか洪積世以来、芦屋の地域には人類も動物も生活していたことが推測される。

これ以後の時代を代表するものとして、縄文時代には朝日ヶ丘遺跡が、弥生時代には会下山遺跡が、古墳時代には阿保親王塚や金津山の古式古墳をはじめ、山麓地帯に展開する三条、八十塚古墳群など後期横穴石室墳があげられ、古代人の生活文化の面影を偲ばせている。

大化改革後は菟原郡に属し、葦屋郷、賀美郷があり葦屋駅もおかれた。また仏教文化の興隆とともに奈良時代の初期、芦屋地方にも大伽藍を持った寺院が存在したことが法隆寺の古文書などから窺われ、今日それは芦屋庵寺と呼ばれ、西山町西ノ坊一帯に実在したことが昭和三十年の発掘調査で遺構の一部が確認された。

また、芦屋の里は殿上人の感傷の地であり「伊勢物語」や「後拾遺和歌集」など、しばしば文字に取り上げられ、阿保親王や在原業平とゆかりの深いのも当然といえよう。

いま、在原業平の名が出て来たので、ここにその伝を小記しておく、ご承知の通り、阪神国道が芦屋に跨がる地点に業平橋がかかっているが、その史実は芦屋とは切っても切れぬ物語がある。

伝によれば業平は天長二年(八二五)に平城天皇の皇子阿保親王の第五子として生まれた。明らかに皇孫で、しかもその母なる人は桓武天皇の皇女伊登内親王である。ずば抜けた

美男で、身分もまたずば抜けて高いとあるから貴族中の貴族として当時の女性のアイドルであるとともに、更に天下一といわれるほどの歌才があった。

だから六歌仙の一人であり、また三十六歌仙の一人にも数えられたので、恋の花咲く平安時代の貴族社会で、この業平がどんな生活をしていたかは想像も出来るわけで、中世の芦屋を舞台にいろいろの物語りも残したわけで、これらの話は「伊勢物語」に詳しいが、業平は元慶四年(八八〇)五月二十八日にこの世を辞している。

中世になると芦屋はしばしば戦場となったため大いに混乱した。海と山が接近する地形に加えて京と九州を結ぶ西国街道が走っている点からも要衝の地となった。

鎌倉から室町時代にかけて芦屋を舞台に大きい戦さが七回も行われている。特に南北朝内乱期には打出浜で大合戦があった。即ち建武三年の役、足利勢の一部、兵庫の沖を過ぎ、西宮に船して義貞の退路を遮らんとしたとき。また一方、その地形上鎌倉時代には打出を中心に交通輸送業も大いに発展した。

戦国時代、永正のころ(一五〇四年)芦屋の北方、鷹尾山に豊嶋地方の土豪瓦林正頼が居館を構えて進出、越水、鷹尾の二城に拠ったが、時の管領細川両家の内紛に巻き込まれ、芦屋河原では壮烈な戦いがくり返されており、芦屋庄農民ことごとくが逃散した例もあるが、特に天文二四年(一五五五)芦屋庄百姓、山論により悉く逃散した事件は大きかった。芦

屋村、打出村の百姓たちは、その持山東西十八町のうち東十二町を西宮の社家郷に、西六町を本庄に横領されたと芥川の三好長慶（頼山陽の「外史足利正記」に、長慶老いて病み、恍惚として人を知らず。これをヒントに有吉佐和子の「恍惚の人」が著述された）に訴え、長慶はこれに対して裁許状を与えたが、それを不満とした芦屋庄の百姓たちは全員逃散しこの争いは天正十年、慶長十六年、元和はじめにも起っており、これらを山論といわれている。

近世に入り徳川氏が政治の実権を握り、近世封建制度の確立に伴い、芦屋、打出、津知の各村は尼崎藩領となり城主戸田氏の下に米を中心とした農村自給自足経済の生活が展開した。以後、芦屋の領主は青山氏、松平氏に移ったが、明和六年（一七六九）には芦屋、打出の二カ村は尼崎藩領から徳川氏の直轄領（天領）となり、そして明治を迎えたわけである。農民の生活は庄屋、年寄、百姓代と呼ばれる地方三役を中心とした村役人が代官や郡奉行の指示をうけ、村政の管理に当った。村の内部では共同林野、水利耕作等、生活全般にわたって自然共同生活が仕易いように細かい取決めがあった。また新田開発が江戸時代初期には大いに進められた。

山林とか原野についても同様で、米づくりに大切な肥料や秣など村の生活を豊かにする山は、農民や村にとっては死活問題に直結するから、その利用開発をめぐる各村の争いが絶えなかった。

前述したように中世末に起った芦屋村、打出村と西宮社家

郷との所謂「山論」は寛保二年（一七四二）に再び蒸し返され、漸く寛延二年（一七四九）になって芦屋村、打出村の勝訴となって終ったが、それは農民生活を脅かすに十分な紛争であった。

また芦屋川の用水は、芦屋近隣の各村が田用水として利用していた。そのため各村間で水争いが起り、井組と称する用水を根幹にした共同体が生まれた。特に芦屋川から引いた車川用水は、現在の神戸市深江、森などの村々にまで利用された。その用水利用も各村々間で取り決めがなされ、厳守されたわけだが、砂地の多い芦屋地方は水持が悪く、干ばつになると忽ち水飢饉となったため用水は極めて重要であった。

更に、芦屋川の水を利用して油絞り、精粉、精米が水車を使用して行われていた。幕末には芦屋の名門、猿丸安時が地方灌漑用水の欠乏を憂い、山を堰いて池としようと奥山の池の開発に乗り出し、二十年の歳月を費して完成した。

江戸中期ごろから農民間の貧富の差が現出し、小農民の男は油屋、日雇い、酒造などに、女は木綿織などの拵（かたず）を行い、遠いところでは千葉県あたりまで日雇いとして出稼ぎをしている記録が残っている。更に西宮に駅所が設けられ、そのための出人足、出銀（助郷）により村は大いに疲弊した。そういうことは幕末に至っては更に激しくなり、加えて、いよいよ開国前夜となり、大阪湾にロシア船が来航したため打出に陣屋がおかれ、異国船警備の場所とされた。また長州はじめ各国兵が頻繁に芦屋地方を通過した。

精道村の誕生

王政復古による幕末維新期の政局不安は芦屋地方にも多大の動揺を与えたが、やがて新しい明治新政の開幕とともに、藩籍奉還、廃藩置県や地租改正など新政の推進によって地方制度の整備が図られた。

明治四年には、嘗って旧幕府の直轄領であった芦屋村、打出村と、旧尼崎藩領であった三条村、津知村に属している四カ村が、初めて兵庫県下に属した。

また学制発布によって早くも明治五年、芦屋小学校、打出小学校が開設され、近代芦屋の教育もスタートしている。

時代の進展に伴い、政府は明治二十一年、市制、町村制を公布、明治二十二年（一八八九）には芦屋村、三条村、津知村が合併して精道村が誕生した。この年は、わが国の憲法が発布された歴史的な年であったがまた精道村が誕生した記念すべき年でもあった。（精道村の名称については二頁に既述参照）。

以来、日本の近代経済機構が新しく形成されるにつれて大阪、神戸の二大都市が発達し、ことに日清、日露戦争を経てその繁栄は目覚ましいものとなった。

これらにしたがって、ここ芦屋の地は都市近郊の環境に恵まれた最適の住宅地として着目され、それまで精道村の中心的産業であった農業は著しい変貌を遂げ、大正から昭和にか

けて交通機関の発達とともに、芦屋川を中心とした広大な住宅街が形成され、戸数の急激な増加とともに生活環境の改善、整備が相次いで行なわれ、今日の国際文化住宅都市たる礎石が着々築かれていった。

ここで、この時期の交通機関の発達史を略述しておく、先ず明治七年に大阪神戸間の鉄道が開通し、同三十八年に至って、はじめて阪神電鉄が開通、芦屋、打出に停留場を設置したことが当時の精道村（芦屋）を開発した。ついで大正二年には国鉄東海道線が芦屋駅を開設、同九年に阪急電鉄の神戸線が開通、芦屋川停留所を設置したことが別荘地芦屋、高級住宅地芦屋の開発に一層の拍車をかけ、芦屋の基礎が造られて行った。また昭和九年には阪神国道、国道電車の開通があったが、このころには、既にわが六麓荘の開発もその緒についていたが同時に地元の人たちが耕地整理の実施や宅地造成などに払った積極的な努力も見逃せない点がある。

即ち、各種都市施設の整備が併行しており、大正八年から十一年の間に十二回に及ぶ耕地整理があり、打出丘陵や宮川上流の開発、六麓荘の開発（昭和四年）上水道、電話の敷設郵便局、警察署、消防署などの設置、衛生施設の優先また村内の教育熱の高まりによる公私立学校設立が相次ぎ、教育文化都市としての性格が強められた。

市制施行は昭和十五年

——シンボルは松と、つつじ——

この間、昭和九年九月（室戸台風）、十三年七月の阪神大風水害による甚大な被害を一つの契機として、新たな都市的施設の充実が図られ、そして一層の自治精神の刷新を図るべく市制施行への準備が進められ、昭和十五年十一月十日、精道村から芦屋市（全国で一七三番目）への市制が実施された。

昭和十六年十二月八日、太平洋戦争が始まるや、それまで順調に発展して来た市勢は全国の各都市もそうであったが、全く自治的活動が失われていった。そして昭和二十年八月五日の阪神間、とくに海岸地帯沿いの大空襲は、被災者一六、三七九人、総戸数の約四〇％が罹災、市の施設にも大きな打撃を与え、更に敗戦の翌年二十一年六月には駐留軍の市内主要家屋の接収に始まる住宅難、食糧難、交通難、旧体制の解体などにより市民生活は極度に混乱した。

戦後、直ちに着手したのは公共施設の破損修理、罹災者や引揚者の応急住宅の供給などで、同時に戦災都市の指定をうけて復興土地区画整理事業も始まった。一方、市消防署、自治体、警察などの実現を見たが地方自治制度の改革や物価変動、それに二十五年九月のシエン台風による被害などで市

財政は窮迫の度を加えた。

しかし、住宅都市再建への自覚は高まり二十六年二月「芦屋国際文化住宅都市建設法」が公布されたのである。

このようにして、昭和二十五年の芦屋市教育委員会設置以後十年間は、学校施設、さまざまな文化活動など文教面の成果をはじめとして、芦屋病院開設、霊園の建設、清掃中継所の完備、市庁舎建設、浜手土地区画整理事業などが苦難の連続の中で進み、市民生活も安定していった。

三十六年以後は米国カリフォルニア州モンテベロ市との国際姉妹都市提携、安全都市宣言、市民憲章や市民文化賞の制定のほか市民会館施設、住宅、道路などを整備、拡充した。更に四十年から社会福祉、教育、文化施設の増設、高度地区の指定、奥山貯水池の建設が順次進み、また四十四年末以来、県の手で芦屋浜の埋立工事が行なわれ四十八年には百二十八万平方メートルが完了を見ている。

都市化時代にふさわしい市民生活の向上のためには、将来の道路整備、特に幹線道路の建設や埋立地を結ぶ南北道路の改造計画、交通量増加による公共施設の整備、そのほか消費者対策、保健衛生対策など、阪神広域圏を考慮に入れた総合計画を樹立し、その実施に当たっている。

昭和四十五年十一月十日、芦屋市は市制施行三十周年記念式を挙行した。この日、市の木に「松」を、市の花に「つつじ」を選定しているが、わが「六麓荘」は、この松、つつじに囲繞されたまさに芦屋市のイメージそのものを象徴した地

域を形成しつづけているのである。

伝説

六麓荘の鏡岩と剣岩

わが六麓荘には古くから「第十一代垂仁天皇の長女倭姫が三種の神器を祀って大和民族に粍を渡し、米を作ることを教えその地名を粍谷と名付けた」という伝説と巨石文化が残存するという言い伝えが残っているが、それらについて市教育委員会からの資料をいただいたので先ずそれを摘記しておく。

「三種の神器について」

昭和三十六年一月、六麓荘に巨石文化が存在する——と六麓荘町大谷哲平氏からの連絡により、現場調査の結果下記の通りでした。

巨石群は六麓荘町八六番地、吉川氏邸の裏山国有林内で、所謂六麓荘古墳群（古墳時代後期横穴）の北方にあって大阪湾を一望に見渡される景勝の地にある。

巨石は通称「八咫の鏡」「八坂の勾珠」「叢雲の剣」と呼ばれ



巨石群の一つ

ており、尾根筋約一〇〇メートルにわたって点在する。

「八咫の鏡」長径四メートル二〇、短径三メートル三〇、周囲一二メートル、石質は花崗岩の風化が著しい。特異な点は上部の縁に凹凸があり、背部は垂直な面となっている。巨石の下部及び周囲は古生層風化土層の地山が露出し何ら土器片などの遺物の包含層も認められない。

「勾珠」

約二メートル四方で陰石様の形をとり、やはり風化が著しい。周囲には普通の石が散乱し、若干尾根が平坦となっている。

「叢雲の剣」

巨石群の最上地点にあって角錐状である。谷を隔てて通称ゴロゴロ山を負う。

そして、これら三点の巨石は全てが風化の著るしい花崗岩で人工的な加工痕は不明である。

祭祀址としての条件は先述の古墳群の北方に立地することから可能性は考えられるが、確証としての祭祀遺物（土器、玉、石器）も現状では全く認められていない。

以上のことから現在の資料では上古における祭祀址と結論づけることは困難である。というのがその返答の要旨である。右については細川道草氏編の「芦屋郷土誌」において六麓荘町在「鏡岩と剣谷」の項に詳細な記述があるので、以下、それを転録させていただこう。

西宮の荒深道齊氏は明治二十五年東京に出て、神宮教の付属教校に入学し、故本居豊顕博士に古事記を、故飯田武郷博士に日本書紀を学ぶこと三年、帰郷して実業界に入ったが、大正十四年ごろ、同志とともに「純正真道研究会」を組織し、機関誌「真人界」を発行して古事記の新研究をはじめた。

そして太古文字が現存するものと考え、昭和六年七月大和の吉野山に入り、大台が原山の牛石原において数基の神代文字と思われる石碑を発見した。また宇陀郡鳥見山頂においても神武天皇を祀った霊所磐座の跡を見えますます太古蹟の残存することをたしかめ、以来各地の高山荒野を探った。

そのころ旧打出村剣谷で、ヤタの御鏡、雷丘（ゴロゴロ山）Ⅱ東六甲の前山で剣谷山の高所、五六五・六メートルあると

ころからその語呂によってゴロゴロ山というⅡ西方の高所で、ムラクモノツルギに模した巨石建造物と思われるものを発見して、同志に紹介しともにこれを信仰していた。

古来、わが国民信仰の中で石に神霊がこもっているという信念は相当強く、氏神の中にも石を神体とするものが至るところに見うけられ、石神または石神社として信仰せられているものも多い。

延喜式その他の古記録にも石神は、イシガミまたはイワガミとして出ている。今日では石神をイシガミと呼ぶほかに、これを呉音で読んでシャクジンといっているものもある。

石神の信仰内容は色々であるが、イボをとるとか、耳だれを治すとか、百日咳の快癒を祈願するとか、民間療法の意味での信仰が大部分を占めている。石を神の依座として考えるに至った動機は幽遠な問題であるが、神の降臨をねがうべき聖地を石をもって築き、石によって場所を標示したことは明かである。

打出の剣岩、鏡岩は、その形状や場所から一部の信者によって人工が加えられている岩で三種の神器に擬せられた霊場と信仰されている。

昭和三十六年十二月、海拔二〇〇メートルのこの地に六麓荘の氏神を祀ることになり、鏡岩にメ縄を張りめぐらし、神主を呼んで祝詞をあげてミタマウツシの式を行なった。

六麓荘町には現在、氏神さまがなく、「地元の神さまを祀りたい」という声が高まっていたが、同年秋に開かれた町内

会の総会で三種の神器につくられた三つの石の伝が出され、これを神体として祀ってはどうか——という意見が支持され、そのため神社委員会が設けられ、これを神体とすることにしたのである。

なお、津知町の宮川晴好氏は神戸史談会において右の三種の神器に関する研究発表を行なって注目をひいている。(この項『芦屋郷土史』による)

古墳

八十塚

古墳群は芦屋の近郷においても沢山存在している。即ち本山、岡本、西宮市上ヶ原、苦楽園地区、宝塚市の長尾山——雲雀丘古墳群、豊中の宮山地区、太古塚地区など有名であるが、最も典型的な後期群集墳を遺存しているのは芦屋市内では、八十塚、三条、朝日ヶ丘、剣谷、城山古墳群などがそれぞれである。

特に六麓荘町と岩園町における八十塚古墳群は有名で摂津名所図会に「八十塚、打手村の西、岩ヶ平の山中にあり数の多きより名とす……」とあるところから八十塚と呼ばれるようになった。

芦屋地方の山麓に群集し、古墳時代後期約一三〇〇年前の横穴式石室で古くから知られている。現在でも岩園町(旧岩ヶ平)一帯に約二十数基が残っており、その生活の中において使用していた壺甕^{つぼがめ}、鉄製品などが出土している。とくにスエ質の陶棺は阪神間でもその例を見ない貴重な遺物で、発掘品は芦屋市民会館の郷土史料室に保管展示されている。

ここでちょっと書いておきたいのは、そもそもこのように多数の古墳が限られた一地域に存在している所以は何かということである。古墳というものが古代この地方を占居した氏族の墳墓であることは学問的な定説であるがこの地方に栄えたという氏族のものであるか——という点はまだ明らかでない。

なお、これらの窟塚を土蜘蛛の遺跡ではないか——という一説(以下『武庫郡誌』による)があるので付記しておく。「続日本紀卷之九に摂津国風土記を載せたり。今これを考



八十塚古墳群の一つ

ふるに、神武天皇の御代より神功皇后の御時まで、土蜘蛛と称せる賤賊の諸方の国々に居住せしものの如し。その遺跡今尚存する地方あり。この土蜘蛛てふ種族は梟師の類にして、常に岩窟、土窟に住み、往々にして良民を悩まし皇命に従はず、残虐極まりなき徒なりしと伝ふ。

此輩をニシモノと云ふは偽者にて、善からざる者と云へる意なり、故に土蜘蛛と云へる賤号を賜ひし」とあり。即ち

摂津風土記曰、宇禰備能可志婆良宮御宇天皇世、偽者土蜘蛛、此人恒居穴中、故賜賤號曰土蜘蛛云々。

されば当国にては何れの地に住みしか其事定かならざれども、旧菟原郡芦屋より打出の山中に向つて踏査するに、先ず打出字岩ヶ平を中心として東は越木岩、西は三条に渉る間、現存する窟穴数百に上れり。俗に云ふ。この土窟は往古火の雨、火の風の荒びし時に住ひしものなりと。芦屋のコンコン塚、三条のシヅメ塚の古窟の如きは鷹尾城址の南麓に在るを以て城堡なりとの説もあるも、是は穴居時代の遺蹟に非ざるかと考ふ可き理由あり。蓋し芦屋付近は古より一大部落を形成し、山隈に穴居し傲然たる集団ありしことを推察するに難からず。当時、この芦屋は部会の地位たりしならん。降つて奈良朝時代より世に現われ、爾後事ある毎に戦争の舞台となれり」云々とある。

これらの他、報恩寺址、鳥塚（山芦屋）、それから前出の

コンコン塚（芦屋山手、鷹尾城址の南麓）、鶴塚（芦屋川、住吉川の間）にあり、源三位頼政の射落したる化鳥がこの浦に漂着したのを浦人ここに埋めたという伝説）、三条村の古墳、涼塚及石窟（城山の麓）金津丘（俗に黄金塚といわれる。）等幾多の古墳が伝説に彩られて存在した。

以上、塚と古墳の史実を一応、列記しておいたが、これらについては今後とも考古学者、専門家の研究と発表に待つことにして六麓荘に関連する所謂、八十塚について略述しておいたわけで、これらによって知られるように上代においては壮大な古墳が多くつくられた。弥生式末期から奈良初期に至る間、畿内を中心とした地方と、青銅器文化の行なわれなかつた東北地方、大陸と関係の深かつた九州地方など違つた時代差は、古墳の中に納めた種々の品物によってそれを示している。当時の地方有力者の墓は高く土盛りした高塚式の墳墓で、その形状により円墳、方墳、上円下方墳、前方後円墳などに分かれている。

現在、六麓荘町内に所在する古墳は十数個を数えるが此処では省略しておく。

文学・詩歌

新撰姓氏録摂津国の条に「芦屋漢人」という文字があり今

一つ漢人の浜を歌ったものがあるが、それが果して芦屋の浜であるかどうか諸説があつて明かでない。

古来詩歌に詠まれた芦屋の浜というのは多彩で「夫木集」には後鳥羽天皇のお歌があり、続古今集、新続古今集には順徳天皇のお歌が出てくる。

また新勅選集には藤原俊成の

はるかなる芦屋の沖のうきねにも

夢路は近き都なりけり

とか、新千載集、新後拾遺集などに沢山の和歌が詠まれている。

平安時代の歌物語りとされる男女の情事を叙した「伊勢物語」にある男性（在原業平）を書いて

「昔男津の国、むはらの郡芦屋の里にしるよしして生きて住みけり。ここをなん芦屋のなだとはいひけり。云々」

とあるように、天下の色男といわれた業平についての伝説、物語り（前出）は芦屋に深いかかわり合いのあることはご承知の通りで阪神国道のところに業平橋があり、芦屋の一名所でもあり、市内で売られている菓子や土産ものにもいろいろと取り入れられている。

右のほかにとくに芦屋についてのこれといった文学、詩歌というものはないが、近いところでは大正、昭和の文学作品として片岡鉄兵氏が芦屋界隈を書き谷崎潤一郎氏は、その在住中「現代訳源氏物語」と「細雪」を書いて、後者において優雅典雅な芦屋の女性を描いている。

谷崎氏は昭和十一年ごろ芦屋の宮川町に住んでいた。片岡氏は新感覚派の作家として川端康成氏らとともに「文芸時代」を創刊し、大正末、昭和の初期に活躍した。

だから、この項で「文学、詩歌」といっても特に六麓荘に関するものは比較的乏しく、編者としては一苦勞事であったが、測らずも前述した川口盛之助氏から開発当初の文献資料の提供をいただいたので、その当時の写真は口絵に収録したが、詩歌の中に松瀬青々氏の句と撫松氏の漢詩「六麓荘」を見出した。即ち

六麓荘にて

青々

十六夜の日暮の夢の浦けしき

霧いさゝかいさよふ月に和泉見る

十六夜のたそがれ月に小鷹かな

住むによき山はほがら女郎花

家一步出て女郎花吾亦紅

六麓荘 撫山

一望併得六国景

松籟爽颿海如鏡

天下無類安住地

風光自惠百年齡

右は何れも六麓莊を詠じて間然するところのないもので、
ほのぼのとした詩情を詠っているが、撫山氏の「風光自惠百年齡」は、特に前出「古老座談会」においても語りつくされた一境地を象徴したものと私は感得している。

それから近來の作品では昭和二十九年十月、芦屋観光協会主催の「芦屋十景」の一つとして選ばれた吉岡つた氏の「六麓莊のドライブウェイ」に

桜若葉バスの窓より散り来るを
ひざなる本の赤きしおりに

とあるのが、春四月、らんまんと桜咲く六麓莊の風景をよくとらえている一首のように思う。

こんなわけで特に六麓莊についての詩歌の乏しいことや、文学作品にまだ登場しないことは町の浅い歴史からいって、これは止むを得ないところであろう。

しかし見落してはいけなはなのは明治初年、芦屋の奥山に農民のための灌漑用水をつくった村政の功労者猿丸安時（猿丸大夫の後裔）は和歌をよくしたのでその孫、猿丸安明（当時、

精道村長）は安時歿後四十年に当る大正七年、安時の和歌をはじめ全国より数百の和歌を集め「寄水懷旧」と題して八池の玉藻なる歌集を出版している。安明、自身も宮中歌所寄人千葉胤明に師事して和歌を学んだ人である。

ほかに芦屋の人では富田碎花、丹後俊彦夫妻はじめ秀れた歌人も多く、芦屋を歌った有名人には与謝野鉄幹、晶子もある。在住の俳人としては山口誓子、高浜年尾氏が有名。他に詩人柳沢健（在住した）、徳田秋声、宇野浩二、小出櫨重の諸氏があるが福田月精氏の

「芦屋マダム鎌倉夫人浴衣対」

など、大正期の芦屋マダムを実に巧みに描写している。

ほかに芦屋市民歌（本間一咲作詞、大沢寿人作曲）、芦屋音頭（河野茂雄作詞、山内隆補訂）、新あしや音頭（佐々木英之助作詞、土田啓四郎作曲）、芦屋よいとこ、など数首の俚謡がある。

その地名考

附近の開発に刺激された

六麓荘の地名はざり言って六甲山麓に位する高級住宅別荘地ということである。

六麓荘が開発され、現在見るような立派な別荘地、高級住宅地を形成するようになってから、約四十年が経過している。昭和三年、株式会社六麓荘という会社が創立され、この会社に出資された人たちの資金によって開発が進み、投資した一部の人たちがここに住居を定められたのがその初期の時代の経過である。

それで、いま、この六麓荘のそもその命名者は誰れかということと、地名の由来を考えると誰れでもが思いつかれるように「風光明媚な六甲山の麓の林の中につくった別荘地」というので六麓荘と名付けたのであろう」といわれるが、その通りである。

そのことは芦屋市史並に芦屋郷土誌にも

「六麓荘町は剣谷全部、長尾、長鞍、岩宮の一部にして、新

しい別荘地の名による」と書かれている通りである。

六麓荘は、もと国有林であったが、阪神地方の中央に位し、環境の良い風光明媚な場所であり、大阪湾を眼下一望のもとに、赤松の茂った花崗岩の丘であったのを、大阪の財界人内藤為三郎氏らが中心となり此処を東洋一の別荘地帯にしようと考えて、昭和三年ころから開発に着手したのである。その衝に当った人々の苦心談とか、種々のエピソードは後述「六麓荘を開いた人々」のところで記述するが、これらの人々は開発計画として「東洋一の別荘地たらしむる」というのが目的で、その中の一人は度々香港に旅行してイギリス人の計画した都市造成を見学して来たということである。

が、しかし、私は「六麓荘四十年史」編纂をお引受けしたとき最初に感じていたことは、筆者が少年時代、父に連れられて西本願寺の傑物、大谷光瑞氏が六甲山麓本山村の山林に建てた「二楽荘」のことであった。

それは明治末葉か大正の初めて西本願寺の法統であった大谷光瑞師が、その地に「二楽荘」という豪荘な別荘をつくり、



二 楽 莊 本 館

そこには博物館のような建ものがあり師が中央アジアや中国奥地の探険旅行で蒐集した貴重な発掘品や美術品を陳列して一般に展観していた。

もともと西本願寺大谷家の別荘は須磨、月見山にあったのを宮中で須磨離宮として買上げられたので、光瑞師はこの本山村の奥に別荘をつくった由であるが、この別荘からの展望が海を楽しみ山を楽しみ得るので「二楽荘」と命名したというが、この陳列品の中に私が今でもはつきり記憶して

いるのは「ミイラ」で七、八才の少年であった筆者にはガラスのケースに横たわっていたこの真っ黒なミイラという人体像には何んともいえず怪奇さを覚え、今日でもそれが脳に浮かび上って来る。

それで、当時のことを西本願寺に照会したところ絵表所に知られる吉川小一郎氏（光瑞師の中央アジア地方の旅行に随行）から、いろいろご教示をいただき、「後年の苦楽園はこの二楽荘に何らかヒントを得たのではないか。そして二楽荘は大正八年、久原房之助氏にこれを譲渡した」というお話であった。

香櫨園、苦楽園が先鞭

これが私が「六麓荘四十年史」に取り組んで見ようと思った第一のインティメートで、その次は「香櫨園」「苦楽園」「甲陽園」開発の歴史である。少年時代から鳴尾村（現西宮市）に居住している筆者は、六麓荘の開発も必ずやこれらの延長線上にある——という考え方から筆をとったがこれは誤っていないと思う。即ち、六麓荘が開発され別荘地が造成されたことは、これらの開発が前提となっており、とくに隣接の苦楽園が阪神間における見事な住宅地を形成して行った事実、六麓荘開発者の眼が注がれこれに刺激されたことは事実であろう。

香櫨園、苦楽園、そして甲陽園の一带は明治末期から大正

にかけて開けた場所で、これらの地名もそのころ初めて名づけられた。しかし、この土地が僅かの年月の間に花やかな観光遊園地としての歴史を持っていたことは、現在ではもう知る人も少なく、昔ばなしになってしまったようだが、筆者などその少年時代、香櫨園の海水浴によく泳ぎに出かけたものだ。

さて、先ず出来た順序からいえば香櫨園であるが、この地名は、この辺の山林原野を買って開発した大阪の人、香野蔵治氏とその協力者櫨山喜一氏の頭文字をつなぎ合わせたものといわれる。

日露戦争も終って漸く好景気になろうとする明治三十九年から現在の阪急夙川駅付近を中心に土地買収にかかった二人は「この景勝の地を狐や狸のちようりようにまかすべきでない」と、付近約三十三万平方メートル（十万坪）に道路を作り、橋をかけ、ホテルを設け、さらに動物園や野球場を作り、観賞植物を植えるなどして同四十一年に早くも遊園地として開園した。

中でも庄巻は現在の夙川カトリック教会のあたりから国鉄線路北側の夙川沿いにある片鉾池（かたほこ）にかけて設けたウォータースhootで、世人はその新奇さに目を丸くしたという。当時、阪神電車は「香櫨園駅」を新設、電車から降りた客は夙川の松並木を馬車にゆられて遊園地に向った。

芸者の検番まで出来るほど賑わったこの遊園地も、現在のようにレジャーと観光ブームに沸く時代とは違っていたから

開園二年後に寂れはじめ外人経営の土地会社に渡っていった。同開発会社ではこれを神戸に近いこともあって外人住宅地にするねらいだったようで、動物園を撤去していい、残留業者に立ち退きを要求したりしたが、これが裁判沙汰になるような一幕もあったが米騒動があった大正七年の前年に日本人の土地会社に転売した。その後、九年に阪急電車の神戸線が開通、夙川駅が出来たことも手伝って現在のような高級住宅地へと変容して行き、遊園地時代の名残りを留める唯一の建物としては夙川尻の香櫨園海水浴場に音楽堂が移設され、旧砲台とともに同浜の名物として戦前まで残っていた。

さて六麓荘開発発想への一つの導線であると私が主張する音楽園であるが、ここはいま記述した香櫨園の開発について、明治四十四年からその胎動をはじめていた。

まず最初はここで石材を切出していた芦屋の名門猿丸又左衛門氏が、昔から湧いていた緑鑿（りよくばん）泉を利用して、明鑿（みようばん）谷保勝会を作り、明鑿温泉浴場を開業したのがそもそものきっかけ。当時は自動車は勿論、山道のことから人力車もなくカゴがただ一つの交通機関という時代、とてもソロバンに合うように沢山の浴客が来るわけでないから、この温泉浴場も流行には至らなかったが、そのころ、この地の景勝に目をつけた大阪の中村伊三郎氏（略歴後出）が約百六十五万平方メートル（五十万坪）の広大な土地を買取り、宅地として造成、道路や電燈、電話も架設して知名人の別邸をこの地に誘致したので土方伯爵、黒田子爵、

股野藍田、吉嗣拝山なども此処に別荘をつくった。

苦楽園主、中村伊三郎氏

このように苦楽園は中村伊三郎氏によって開発されたが地名の由来を武庫郡誌『大社村誌』は

「その山開きの当日に際し、園主である中村はその愛蔵する三条実美卿（注、七卿落ちの一人）愛玩の瓢を出して装飾したのでこの歴史的珍瓢は故東久世伯、故土方伯等によって懐旧談の好資料となり遂に「苦楽瓢」と命名せられ、これが因縁となって、その後この地一帯が苦楽園と称せられるに至った」

越えて大正二年、通称天狗嶽にラジュウムの湧出を発見し、国内にラジュウム温泉を開設したので、大正三年十一月二十六日、盛大に開業式を行なったが、当日臨場した大隈重信伯は、これを「東瀛第一泉」と命名している。

このラジュウム鉱泉発見の由来というのは、六甲山脈の何処かにラジュウム泉脈があるらしいとの関心を持った時の兵庫県知事服部一三氏が大正二年、伊庭野技師に命じて泉脈をさぐらせ、ついに通称天狗谷でラジュウム鉱泉を発見したというもので、阪神間からの浴客がワンサと詰めかけ、山道を行く馬車の笛の音が絶えないほどの賑いを呈したという。

したがって旅館、ホテルもふえ、鉱泉も現在の三笑橋バス停留所を中心に十四ヶ所で湧出していたというが、昭和十三

年七月の大豪雨による六甲山大水害で全部埋まってしまい、現在のように住宅地としての姿だけが残った。

またこのほかに関連地帯として甲陽園の開発があるが、甲陽園については割愛しておこう。

最後にここで付記しておきたいのはこの中村伊三郎氏の略歴で「大阪府の人、元治元年四月生れ。六甲苦楽園主」と当時の人事興信録には簡単に載録されているが、その長男喜一郎氏は神戸高商の出身、石井光次郎氏（後年、国務大臣、衆議院議長、日本体育協会会長）とは同窓の関係あり後年、朝日新聞社に入社、計画部長や朝日会館長として令名があった。そして苦楽園を語るについてはその開創者中村伊三郎氏とともに海南、下村宏氏の名を逸することは出来ない。彼はここ五番町に千五百坪に及ぶ宏大な邸宅を構え、そして雅号と故郷紀州の見えるところからその邸を海南荘と命名した。朝日新聞副社長、のち国務大臣終戦時の情報局総裁として邦家の命運を双肩に担って活躍した。

同氏は「新聞に入りて」の著書の中に

「大正十一年十一月二十一日六甲苦楽園内、望が丘のほとりに海南荘を相して移る。

まむかいに生駒、金剛、葛城の連峰、海を越えて淡路に走り、眼の下に西宮、尼崎、大阪、堺、浜寺の市邑、茅渚の海を囲みて点綴せらる。

六甲の峰を背にして冬暖に夏涼しく、満山、松、つつじ、萩に彩られ、ラジュウムを含める清泉流れて点々紺碧の池を

満ゆ。

生来茲に四十有八年、初めて得たる我土にして正に我余生を終るべき地である」

と書いているが当時の苦楽園の風景を描写して余すところがないし、また、わが隣接している六麓荘の立地情景を描いているような文章である。

下村氏の幅広い文化人との交流がここ「海南荘」で行なわれた。隣接して九条武子の南枝庵があり当時、著名なる文人墨客は足繁く海南荘に集って、数々の詩歌風詠を残していることでも有名である。そしてその後「海南荘」が堀抜製帽社長堀抜義太郎氏（「六麓荘ゆかりの人々」の項参照）の所有となり堀抜氏がここに居住したが現在は大阪市交通局保健組合の寮となり「苦楽山荘」となっている。

以上、筆者は二楽荘を語り、苦楽園を叙して聊か回り道をした感があるが、凡そ一つの事物の成るにはその因があり果があるということを指摘しておきたかったのである。

つまり、恐らくは六麓荘開発の発想にはこれに従事した人たちの頭の中に、十余年前の大谷光瑞の二楽荘の事蹟、香櫨園、苦楽園、甲陽園の開発を、その隣接の地において目近かに見ていたから、それらに刺激され、触発されて行ったエレメントのあることは当然のことで、即ち事物の成るには前提があり因子があるという点を書いておきたかったのである。

香港島の白人街を真似る

さてわが六麓荘は昭和三年、大阪の人森本喜太郎氏が發起人となり、先ず「株式会社六麓荘」なる名称のもとに土地開発、住宅造成の会社を創設、阪神間の紳士、素封家連の協賛出資を得、のち社長に内藤為三郎氏、専務に森本喜太郎氏を選任、両氏は専ら資金調達のを担当し、専務瀬尾喜次郎氏は永く法律事務に携っていた経験があるので専ら官有林払下げ運動の部門を担当して事務掌理に当り、それが成功して国有林の払下げを得たので、いよいよその開発に着手したのである。

そしてこれらの発起人は今日見るような金儲け第一主義の単なる宅地造成、住宅分譲というのではなく、この地を東洋一の別荘地たらしめようという大理想のもと、今日から考えても驚くような遠大高邁の青写真を描いていた。

即ち、香港のカルオン（九龍）半島とその対岸のホンコン島における白人専用の（イギリス租借地）街区を一つのモデルとして、道路幅も小さな山道に過ぎなかったものを最初から現在のように六メートル以上とし、電気、ガス、水道、電話線を当時、日本の何処にもなかった方法で地下に埋設し、街灯も香港シティと同じ型をとり入れるという、日本人としては想像もつかない大構想のもとに造成を進めて行った。

六麓莊を開いた人々

開発当初の貴重な写真帖

いま筆者の机上に一冊の「六麓莊写真帖」がある。「昭和三年九月」の発行とあるだけで、刊行者の会社名、氏名もないが、当時株式会社六麓莊が刊行して京阪神の富裕階級に送ったものであることは間違いない。十枚の写真原画が貼布されている豪華なものだから、とても一般に頒布出来るものではなく、所謂限定版のものである。

開巻、最初に

「六麓莊ノ位置ハ阪神沿線芦屋川ト夙川ノ中間山麓ニ在リテ、経営地ノ東端ハ苦楽園ト境ヲ接ス。

北、六甲ノ秀嶺ヲ負ヒ、南、眼界広ク阪神沿線ヲ俯瞰、山海郡邑ヲ一眸ニ蒐メ、茅海ヲ隔テ、生駒葛城ノ連峰ヲ望見シ紀淡ノ海洋ヲ眺メ遙ニ紀州、四国、淡路島ヲ遠見ス。

地相南面シ緩傾斜ニシテ緑樹青松多ク、池アリ、溪流アリ、又古色ニ錆ビタル風流岩石ニ富ミ、風光明媚、空氣清澄、水清冽、飲料水多量ニシテ最も理想的の住宅地ナリ。

交通ハ阪神電車香櫨園、阪急電車夙川及ビ苦楽園口各停留所方面ヨリ乗合自動車ノ便アリ、苦楽園口停留所ヨリ四、五分。夙川、香櫨園、阪神国道西宮西口各停留所ヨリ七、八分。目下計画中ノ自動車道路完成セバ阪神芦屋、阪急芦屋川兩停留所、省線芦屋駅方面ヨリモ又乗合自動車七、八分ニシテ達ス。」

とある。

十枚の写真は六麓莊及び隣地、上ノ池、下ノ池、莊内ノ一部、六麓莊休息所、空池、溪流(一) 遠望(二)であるが、爾來四十数年。今日の六麓莊の現状からは殆んど想像を絶する往古茫々の姿である。

全文を殆んど記述したあと同じく六麓莊町10—19に居住される川口盛之助氏から、本経営地開発当初の写真を主とする別の貴重な一冊子が届けられた。

拝見、一読するに及んで実に貴重な一文獻であるので、その部分々は口絵と、本文中に分散して収録させていた。

六麓莊を語る

以下、開発当時を最もよく知られる神井清太郎（現、芦屋市会議長）、及び地元選出の市会議員、極楽地勝彦両氏に、山田町内会長を交えて当時を語って貰ったのが左の記録である。（昭和四十七年十一月）



向って右から山田，神井，極楽地の三氏

細野氏が工事を請負う

山田 六麓荘には今までその歴史を書いたものが何にもないので、この機会にそういうものを残しておきたいと思えます。神井さんは六麓荘の開発当時から非常に縁の深い方ですから丁度、四十余年前の昭和五年ごろに六麓荘の道路工事を請負われたそうですから、その当時のお話を伺いたいと思います。

神井 昭和五年ごろからだったと思う。計画は昭和三年ぐらいからで、私は当時、細野組の一社員で、高級な話はないが、昭和三年大阪の財界人がここを見に来られ、住宅地として非常に場所もいいし、環境もいいし、見晴らしもいいし、何一ついいことがない。これを造成して東洋一の立派な別荘地にしたい——というのが始まりだと聞いている。

着工当時、岩ヶ平という村があり、その前に小山があったのでそれを切り開いて現在の岩園小学校の敷地にした。区画整理も同時にやった。

山田 山道は石がゴロゴロしておりましたか。



細野浜吉氏

神井 四尺から六尺ぐらいの車道しかなかった。くるま道は現在八十塚橋がありますが、あそこから今の太谷さんのお宅の南側で原型が残っているが、坂道を上ってそこから苦楽園に行っていた。

それから上の道は人が歩行するだけの山道で昔は農家の人は燃料に木を焚いていたから、その柴刈り道がありまして、今も原型が残っている。それから今の大学の前に少し池の跡のようなものが保存されているが、あそこも今は締め出しましたが水源地の真下に大きな池がありまして、その南側で今は誰方が入っておられるか知らぬが、その屋敷の中に昔のまの池が保存されている。岩ヶ平部落の方は、殆んど山の田に開拓されて田と畑ばかりだったので、そこに水を引く溜め池を国有林の中に三つ掘っていたわけです。

六麓荘一帯に松茸が生えていた

山田 神井さんの、幾才ぐらいの……

神井 今から四十年前で二十三、四才。一番はじめに細野社長などと山に行ったら松茸が全面にはえており、一時間か二時間もしない間に二貫目ぐらい採れた。見渡す限り山一面が松茸でしたな。ちょっと歩いたら松茸のかたまりがあった。(笑)

山田 極楽地さんはここでお生れになったのだから何もかもよくご存じですが……六麓荘の環境はいくつぐらいから御

存じですか。

極楽地 私は七、八才のときからだからよく地形も知っている。三つの池があったが私の家は代々その池の管理者で祖父、曾祖父の代からです。それで私はおやじについて五つか六つぐらいからその池の周辺を歩いたことを記憶している。

神井 その池はまだ、五、六年前まではあったがそれを万徳・K・Kが全部埋めた。そりや立派な池だった。はじめて行ったとき感じたことは松は沢山はえていたが、何というても石が多いので松は余り伸びぬ。それに所々に何の木か大木もあったが、投資して開発すれば此処は東洋一の住宅地になるところだと直感した。

山田 今からいうと五十年前ですが、その当時松は今のようにはやはり小さい松でしたか。

神井 あいさに大きな松があったが余り丈の高いのはなかった。それに野鳥や兎が非常に多かった。その当時私は細野社長や森本さん、内藤さんの主人とこの辺の測量を何べんもしたが、まんのええことにこの真下の岩ヶ平が耕地整理をやって入口のところにあった小山を削って了ったので、広い道が六麓荘に通じるようになった。

山田 当時誰が思いついてやったのか。

極楽地 森本さんと、内藤さんのおじいさんの為三郎さんがやられた。内藤さんが社長で、専務が森本喜太郎さん。この人は現在日の出橋のところの中村さんの住んでいた東側に亡くなるまで住んでおられ、その後、奥さんがそこに住んで

おられたが、のち西宮に移られた。それから当時、会社の事務を手伝われたのは西条俊一さんという退役の陸軍少佐だったと思うがその人が私どものところに來られて、最初の話は「実は六麓荘に理想的な住宅都市を開発したい」ということで、それにしても道路がないのでいま神井さんがいわれたように、牛車を通るくらい道では六麓荘が袋路になるから、どうしても南に出る幹線道路をつきたいから協力を要請したいという話もあった。

当時六麓荘の区域は平野一斉さんの門の南側に大きな石に「六麓荘」（口絵参照）と刻んであるが、あれより北が国有林であった。それを運動して、うまく払下げをうけたわけで、それから南の方にずっと道路をつけるのに殆んど松本イッオさんと私の父の二人が協力して道路をつけバスを運行するようになった。

山田 その当時、今は芦屋ですが打出村の山林だったということですね、私の聞いているのは政府から一坪三銭で払下げをうけたというが……

極楽地 当時はそのくらいだと思いますね。

神井 いま極楽地さんのいわれたように「六麓荘」と刻んである大きな石から上は国有林であとはみな私有地でした。そして当時はこの芦屋より苦楽園の方が発展してお茶屋もあり、旅館もあり、温泉もあり、苦楽園は阪神間の憩いの場所として発展していた。それで苦楽園の方に本拠をもって行こうといわれたが、いまいわれたように区画整理も進んで

いるし、各地主の方がやはり芦屋の駅があるので本道を芦屋の方に持って行った。

芦屋女学校の庭に万朶のサクラ

というのはね、苦楽園の方が道がひろかった。それに、温泉地帯で阪神間の人々が遊びに来る場所でもあったのでそっちへ道をつけるつもりだった。ところが地元の要請によって芦屋の方に持って行ったわけで当時、どっちにするか関係者は大分迷ったのです。

苦楽園は昔は立派なものでした。宝塚の小さいようなところで、道が出来ており区画が出来ていた。その当時、森本さんが社長代行で、毎日、女学校の今の運動場の東詰に、東洋一の別荘地造成というのだから立派な事務所を建てた。それがのちになって不要となったので公園も運動場も事務所もみな芦屋市に売りまた芦屋市が芦屋女学校に払下げたのだが、その事務所は三、四年前は芦屋女学校が使っておりました。

山田 そのとき、細野さんという人物が出て来ますが……

神井 細野さんは昭和十一年ごろに女学校を建てに上って来たが、道路工事の請負いをしていた人です。学校は昭和十三年ごろで、それまでは当時は六麓荘のベープメントの両側には一メートル毎に桜の並木が植えられて、電気もガスも全部ケーブル線で埋設されていた。

それから、のち女学校の校庭となった事務所というのは、

約校庭が千坪、事務所は三十坪ぐらいありますが、そこにも桜が植えられ、土地に適するの立派な桜になった。そしてスケート場が二百坪ほどコンクリートで出来ており茶店があった。さくら満開のときは大阪のキャバレーのええ女を五十人ぐらい連れて来てサクラ祭りをやったり、そりや立派なものであった。

また夏にもそういう催しをやり、スケートの上でダンスをしたりしたが、私も参加したことがある。六麓荘が開発されるとともにお宅（山田氏）の真上に残月庵という立派な料理屋があり、大阪のお茶屋式料理を食べさせた。大阪の美人をよんで高級な人が「つる家」とか苦楽園の「はり半」に行くようなお客ばかりが来た。お宅の中を流れている小川の上に葭でふいた家と瓦ぶきの家を建てていたが、私も三、四度招待されたことがある。

山田 六麓荘には三種の神器の跡と八十塚といったものが沢山ありましたね。

神井 西側の山には幅六尺ぐらいで長さ二間ぐらい、三方石垣で入口はみな潰れておったが古墳が沢山ありました。

三種の神器と巨石群の伝説

山田 三種の神器というものが遠藤さんの上の方にあったといいますが……

神井 遠藤さんと芦屋大学の間に大きな岩が三つか四つあ

りますが、それをいうのじゃないか。あの岩は割らずに置いてくれというので、未だにあるはずです。

山田 三種の神器のいわれがどうも判らぬというのですが。
神井 開発するについて水源地も設けるというので細野組がやった。その東側に百坪ぐらいの神社があった。そのときに此処らのものはみな神社に入れている。ところが今は神社が何処に行ったかありませんね。一応、鳥居もあり立派な神社でした。前の水道の水源地の東側にありました。それは誰れにも売ってないから会社の土地じゃないかと思う。

山田 それは売って了っている。それから大阪城の石垣の石をあそこから持ち出したというのは事実ですね。岩の中に殿さまのマーク入りの石があって、太閤石といった。

神井 ②とか③と書いてあるのがあった。役人が見に来て「この石はいい、大阪に送れ」といっておいてあったのかも知れぬが、道路をつくるのに邪魔になるので発破で爆破して、石垣に積むものは積み、また碎石にしてあれだけの道路のコンクリートのバラスを何処からも買わずに碎石の機械を持って来て、今の六麓荘駐在所の周囲、大学の周囲、水源地の周囲十カ所ぐらいに大きな石材工場をつくりブラッシャーを持って来て、どんどん割ってそれを使った。

その時分は大きな機械はないからヤグラというので捲いて大きな石垣を積んだものです。

山田 あすこの大きな石は大概一〇センチぐらいの矢印が入っておりますね。



巨石の一つ、印がついている

神井 あれは大阪の築城時代に使ったものでしょうね。

山田 それとも石塔に売るためにやったのか……

神井 あんなものは石塔にはしません。

山田 それから今日は別室にお年寄りの方が多勢いらっしゃっているが、福田眉仙さんが昭和三年にここに宿替えをして来ておられ、西宮の戎さんまで毎日買ものに行ったという

お話。

神井 福田さんに、内藤さん、森本さんの順ですね。それから女学校の北側の景山さんが古いですね。

極楽地 福田さんは六麓荘の工事をされる以前からおられた。

兎と野鳥が多かった

山田 そうすると、あなた方の若いころには松の木も丈が低く非常に見晴らしがよく、それにつじが多くて……

神井 野鳥が多かった。それに兎が多く何処に行ってもガサガサという兎で……

極楽地 兎は何百匹とおりましたな。

山田 野鳥は今でもおりますよ。

神井 雉はおりませんやろ。

山田 いや、冬には出て来ます。極楽地さん、あなたのお父さんの代に、お宅の屋敷を分けて道をつけたお話など……

極楽地 私も記憶がありますね。

山田 その当時のお話に入りますと、どうして電気を埋設したり、ガスを埋設したり、水源地をつくったりしたのかという疑問が先ず出ますね。恐らく阪神間でも、こういうことはなかったでしょう。

極楽地 内藤さん、森本さんなどはその当時から町づくり非常に先見的な知識と英断のある方なので、同じやるから

には気候も温暖だし、風景もいいし阪神から至近距離にあるし、住宅地として、われわれの手で世の中の人を驚嘆させようという野心もあったのじゃないか。そして当時、いまの猿丸さんのお父さんの吉左衛門氏が村長をしておられてその方にお話をされた。猿丸さんは以前、県会に出ておられましたので、県会の友達である細野浜吉氏に相談されたところ、それじゃ私が工事を引受けようということになった。

山田 道なども全ての設計を香港島の白人居住地を真似て同じものをつくって見ようということだったと聞きます。それで電気を埋設したりガスをどの辺から引き込んだのですか。

極楽地 当時、ガス施設はずっと下の方には来ておりませんでした。水道みちあたりまで来ておったと思いますね。

山田 日本の何処にもないものをつくって見ようというので道幅なんか苦楽園より広い。それから感心するのは木の植え方、環境の選び方、見晴らしのとり方なんか、苦楽園より遥かによくしておられるが、これだけのものを考えてやったのに感心する。日本の何処にもないものをつくってみようというのが理想だったのですね。

極楽地 やはり東六甲を背景として瀬戸の海自体を泉水とというような形に見立てて、それと真正面に取り組んで行くような一つの構成をされておりますね。

神井 その通りですね。

極楽地 現在でもあれ以上のものは、ちょっと無理じゃないですか。

神井 その当時は「家を建てるのに松を切るな、建てるどころだけ切ってそれ以上は松を切るな」というて回っておった。

堀抜氏が建てた国際ホテル

山田 今でもそれを守っております。

極楽地 箱根の山のように松林の中に家があり、家のぐりに松があり、茅渚の海の大阪湾を見下ろし、芦屋駅から十三分ぐらいでこんな風光明媚なところに来られる。何から言っても条件がいい。それで昭和十三年ごろに、東洋一のホテルを此処に建てる——というので堀抜製帽が七階建ての立派なホテルを建てた。あの当時は六麓荘、最も花やかなりしころですね。

山田 堀抜の社長が建てたのですか、いまの短大のところに……

神井 戦時に入るとともに、松下電器産業KKがここを買い、松下電工がその研究室としていたが戦後はCIA（アメリカの中央情報局）が占拠、それをのちに芦屋女学校に売ったのだが、その当時、泊り客は西洋人ばかりだった。

極楽地 国際ホテルと命名して、来る人は大阪、神戸の一流財界人ばかりでしたね。戦中、戦前、私の記憶では寺内寿一元帥は、あそこを好まれ、何回来たか判らぬ。その手配をしていた人が私の家の真前の借家に住んでいた人が支配人で

……。

神井 当時、堀抜製帽は事業も盛大で、立派なものでした。

山田 私は県会に出た時分堀抜氏とは随分心易くしていましたが……。

神井 その時分で一晩一五円と三五円ぐらい、われわれが月給五十円、六十円のとときに一晩三百円の宿賃だからそりゃ立派なものでした。その時分が六麓荘の全盛時代でした。そんなことをいうたらいけません。が当時はハイ・クラスばかりがいっぱいしました。

山田 いまでも土地の持ち主は極楽地さんみたいに（笑）昔の人のばかりで、誰が持っておられるか判らぬ。

神井 風光明媚な立派な山を開発して、ちょこちょこ森の中に家を建てた。人影は少ない、道路は舗装されて電気、ガスを埋設して文明文化の粋を凝らした施設。自らの水源地を持ち、そして六麓荘お守りの神社を建てるなど余程の人でないと出来ない、そりゃ東洋一というのは当然だった。それから六麓荘専用のバスをつけたのだから大したものだ。

山田 なかなか構想が大きい、よくやったものだと思います。これだけのことをやったのに、何んの歴史も残っていないのは残念です。

神井 このごろの宅地造成屋と事が違う。

山田 いまは金儲けのためだから、木も何もかもみな切つて了って、風景も何もない。一坪でも売れたらいいというのですからね。

山田 芦屋もこの六麓荘が出来たために格が上ったと聞かされているが……

神井 その通りですわ。芦屋が別荘地というのはそれもありませんね。

山田 山手と、川から西は道が狭いが、六麓荘は理想境で山手の道とは全然形も違うし道もひろい。

それから、ここを開発するについては全て香港を真似してやったというが、設計を外国人にやらしたということは、どうなんですか。

神井 それは無い。高橋さんという体格の立派な紳士がおりまして、その人が設計部長で大阪からずっと御通勤でした。
山田 その方が香港に何んべんも見に行ったということですか。

極楽地 見に行っているかも知れませんね。

神井 その高橋さんが今おったら全部知っておられますがね……

山田 いや、どうも有難うございました。

この座談会後、半歳を出ずして神井清太郎氏の訃報に接した。謹んで哀悼の意を表する。氏は三月十五日肝臓がんのため芦屋市朝日ヶ丘の市立芦屋病院で死去、六十五歳。二十二年五月から連続七期芦屋市議。四十二年五月以降、延べ五年間市議会議長、四十六年五月から四十七年三月まで兵庫県市議会議長会長をつとめた。

古老座談会

(四十七年十一月
町内会事務所)



右の神井、極楽地、山田三氏の座談会に引きつづいて町内会事務所楼上において、旧くから六麓荘に在住される方々の参集を得て懇親会を開き、いろいろと懐談旧、思い出話を伺ったので茲に併せて収録し、六麓荘町の生い立ち当時のことを永く記録に止めておきたいと思う。

(四十七年十一月、町内会事務所において)

出席者(順不同、敬称略)

司会 山田 六郎

松井 芳子(四六)

福田 嘉代子(六七)

田 渕 小巻(八一)

岩井 コイ(八二)

川口 芳子(七七)

小西 末子(七六)

堀内 春枝(七〇)

内藤 愛子(七六)

中野 正平(七八)

日本一の「六麓荘」

山田 今日では東洋一環境のよい町で、皆さんは健康でお暮らして下さいまして有難うございます。

ここは日本中の人が羨む六麓荘でございます。こないない町会に住める人が日本中に何人あるか、しかもあなた方は永生きされて幸せの方ばかりでございます。私たちは皆さんにあやからせていただきたいわけでございます。(笑) 今日はこの町の、一番古い方々に来ていただいて今日までお過ごしされた歴史を聞かせていただきたいと思ひます。

ご承知の通り他所は煤煙と公害で新聞を見ても公害々と騒がれているが、公害の日本一少ないのは六麓荘です。こんなところは何処にもないのです。こないないところに住んでおられるので、空気といい緑といい何一ついうところはないが、ただ寂しいのがこの町会の欠点でございます。したがってこの町を、もっともっと綺麗にする、道路ももっと良くする。そしてこの上の方に大きな公園をつくって貰って、お年をとられた方に大きな公園に遊びに行って貰うようにしたい。また、今工事をやっておりますようにガス、水道も埋設が浅いから安心できるように深くし、水も綺麗にする。現在でも人が羨むけれども、将来尚一層羨むような町会をつくって見たい——これが念願であります。

それで、此処はいつごろ出来た町会か、またどういう人が

古くからおられるのか、誰れがつくったのか、八十塚というのはどれくらいあるのか、三種の神器の歴史というのはどうなのか——というようなことを書き入れたいと思っております。それでこれからおばあさん方に寄っていただいて昔物語りを順序よく書き上げたいと思ひます。ここが出来たのが昭和五、六年ごろですね。それでこの内で一番古いお方は福田さんが一番古い。

実は私が町会長をさせていただいております山田六郎です。こちらが副会長の遠藤さん、今日は昔物語りをさせていただき会で、お一人に一頁しか当ててございませんので出来るだけ簡単に、昔のことをお聞きして書き上げたいと思ひます。

一番古く、開発以前に見えたのが福田さん——その当時、おいくつでしたか。

福田 十二才で、小学校五年でした。祖母は八十七才でトヨです。

——あなたが十二才で小学校五年のときこっちにいらっしやった、古いことですね。この間、福田さんのおばあさんのところに行ったら非常に物語りを喜んで面白く話して下さって、ここに来たときは何んにも売っている店がないので毎日、西宮の戎さんの市場まで籠を下げて買ひものに行つたが、荘内では「あけぼの」という店が平野さん宅の前にあり、タバコや食料品を売っていた程度で、その時分にはまだ六麓荘が出来ておらず、それに御主人が福田眉仙さんという有名な日本画家であつたから非常に氣六かしく、不便でも何んでも

静かなところにおらぬと良い絵は描けぬ——と此処に住んだわけで、私のところが一番古い町会長であったといっておられた。

その次に古い方が内藤さんですが内藤さんのお父さんが六麓荘開発を計画され、そしてこの山が全部、岩だらけの赤松で、見晴しが素晴らしいところから、これなら東洋一のいい住宅地になるということを見込まれ、そしてこれを香港のようになしうと、日本人の考えないような設計を思いつかれて大きな道幅をとり、昔、まだ自動車もなかったときに、これだけ大きな計画で道をつくった。電気もガスも引っぱって来られて、本当に東洋一の環境の良いところをつくられたわけです。内藤さんは娘さんですか。

内藤 主人の父になります。

—— あなたは此処に來られて何年になります。

内藤 私は支那事變の丁度ではじまる十四年に此処に來ました。

開発当初は五軒の家しかなかった

—— その次に景山さんが古いわけですね。その次には田淵さん、それから平野さん、岩井さん、堀内さん、みな大体昭和十年ごろお越しになった。

此処に道路が出来たのは昭和三年ぐらいから工事にかかって約四年ぐらいいかかったのですから、道路が出来た時分にお

出で下さったわけです。

そこで今のお古い方、福田さん、田淵のおばあさんと、岩井さんと、堀内さん、中野さんでお話をねがいたいと思います。

その当時、どういう状態であったのか、何軒くらい家がありましたか。

福田 五、六軒です。

—— 田淵さんがお越しになったときは何軒くらいありましたか。

内藤 戦争時分、私の方、主人がおりましたとき調査をいたしました、転入、転出の判を貰ったり、名簿をつくるのに、そのとき八十三軒だったと思います。それから判りませんが、あのときお入りになった方は、皆、私の方に判をとりにお越しになられたが、その中に曾我廼家五郎さんなどもおられました。組長をいたしております間のことです。

—— その当時の模様を一口づつ簡単にお話し下さいませよう。

中野 私は平野君と友人でありまして大阪からここに残月庵というスッポン料理の料理屋がありまして、そこによく参りますと可なり満喫して参りまして大阪に帰ると非常にお腹が減っている。そして入浴しても水がネバネバしていて何んでもラジウムが含まれているとかいうことで、非常に胃の調子がいい。中野君、ここに家を建てようじゃないかというので、平野君があ土地を買求め、私は土地会社が開発し

たその家を買った。

最初、土地会社が二戸建ての家を建てた。お隣りには伊藤という方が療養していらっしやったが、その人が引越されるときに、私があるを頂戴した。

—— 田淵さん、一つその当時の思い出を……

田淵 学校が建つ前でした。その当時学校が建つというのでゴタゴタしましたが……

—— それではその次に堀内さん。

堀内 その時分はふんだんに水が無料で使えてね。よう水が出ましてね。少々不自由でも本当にいいところに来たと思いました。それだけは今、印象に残っております。

—— 小西さん、何か思い出を……

小西 私は大分、おそう来ました。

—— それじゃ、川口さん一つ……

川口 私は空気が悪いところから子供が弱いので、こっちに参じまして本当にいいところに来たと喜んでおりました。便利は悪うございましたが……

—— その当時の道はどうなっておりましたか。

田淵 ちゃんとコンクリートになっておりました。

—— それじゃ田淵さん。

田淵 さきほど堀内さんが仰言いましたように、お水が豊富だったというのでフト思いました。松茸がよく出るというので、あそこを買いましたが庭に松茸がボコボコといくらでも出ました。(笑)

—— 今日も神井議長が言っておられたが、工事をしているのに松茸が沢山とれた。それに兎が沢山住んでおったという。それじゃ福田さん、どうぞ……

福田 田淵さんの奥さんが仰言ったように松茸が沢山出ますので、とてもいいところなので此処を求めまして……それからが、ラジュームのけがありますのか、大変、水がよくて、皆、皆が健康でそのために父も母も長命をいたしました。父は画家でしたから絵を描くのに水墨を大変に六かしくいい絵具にいい色が出るといことをいっております。

—— その次に内藤さん。

内藤 私はそのころ、芦屋の松ノ内町にりましたが、父が大阪から時々此処に参りまして、ここを開くにつぎまして、ここに来ました。道も何もないからゴム長を穿いてここまで歩いて来たりしましたが休むところも何もないと申しておりました。私の下のところに、ちょっと家がありまして、そこに休むところをつくって通った。

それから、此処を良くするためにお茶の先生にいろいろ教えて貰って「日の出橋」などの名前は、みなこの方につけていただいたのです。それより前に森本さんが此処を開くというので、営林署から払下げをうけて会社にするということだが、森本さんが株主にいい方を集めたいというので内藤、一つ乗らんかというので、当時、父は年齢をとって遊んでおったから死に土産に最後の御奉公ということで大阪の財界のいい方ばかり集めて、その株によって地面を分けるということ

をはじめはやった。

——はじめはやはり森本さんがやられ、お宅は、そのあとを社長ということでおやりになった。

内藤 株を集めるのに父が相当、尽力をしたらしいです。

財界のいい方ばかり、森本さんは官庁関係などに手腕がおおりになつて、そういうことを全ておやりになったというように聞いております。

——細野さんは、どういう繋りがあるのですか。

六麓荘会があつた

中野 あの方は学校の建築とこの工事一般をお引受けになった。学歴はなかったが要するに立志伝中の方でした。なかなか愉快な方で、ここの道路開発などみなあの方がおやり

になったが、たしか県会議員でした。

——今日の

1. 組昭和十年度
2. 甲種會費
3. 組昭和十年度
乙種會費

4. 合計委員
5. 庶務委員

町のお世話をするということです。そういう組織になったのは戦後でそれまでは町会ということではなく、お世話になったということ。そして終戦後、大分経ってから大谷さんになられた。たしか二十七年以後です。それまで堀内さんなどのお世話になった。その時分は町内会というのはなく、六麓荘の組長として古いのは堀内さんや川口さん、田淵さん、福田さんなどが古い。

——記録に入れるために、組長というのは……

堀内 二十七年以後に六麓荘に進駐軍が来たとき昼夜線をこしらえて路上にも電柱を立てた。そのときは観念していたが、進駐軍のいたならそれを取って貰うためお世話する人がなく、見ながら放っておいたら、新しい家が、その電柱から動力線を入れたりしたので、昔の隣保の山本さん、久留さんの奥さんなどが憤慨されて、六麓荘がこんなことになって了っては私らの印象がまるで違つて来るから、何とかして取り払おうということで私の方の隣保だけで大谷さんの御主人——この方は西宮、尼崎の方で社長をされておった有力な人でしたから、関西電力に抗議して昔のようにみな動力線を取つてくれ——というので皆さんの御同意を得、堀内が古いから私の方の判をそれに押してくれといわれ判を押してそれを関西電力に送った。

——そうしたら六本ほど立っていたのを一時にみな取つてくれた。一本が二万五千円の費用だったが全部、取り払つてくれました。

中野 順番に

引継書

左記引継目録に依り事務引継、完了致候也

昭和貳拾壹年 冬月 参拾壹日

引継目録

前會長 川口平三郎
新會長 井原正吾

- 一 九様式會社六様式會社附物件目録書壹通
- 二 神戸信託株式會社金銭信託證書壹通
但し金額壹萬參百拾圓圓金也
- 三 住友銀行定期金證書壹通
但し金額貳千七百八圓八拾參圓也
- 四 神戸銀行芦屋山手支店普通貯金通帳壹冊
但し預金殘高壹萬四千貳拾貳圓九拾七圓也
- 五 六様式會社米倉庫附土地同、同
- 六 總會議事録壹冊
- 七 委員會議事録壹冊
- 八 照合用會長小印草壹同
- 九 経費確認帳壹冊
- 十 使用済領收證帳
- 十一 六様式會社規約書
- 十二 便覧
- 十三 委員會管理費帳
- 十四 領收証帳
- 十五 諸往復書類並に參照書類

本引継書、正副會長、副會長、委員、幹事、庶務、各一冊、備有之

— そうすると町会というものを組織されたのは大谷さんからですか。

堀内 その電柱のことがはじまりできつかけになりました……、それから景山さんのご主人が亡くなったというのをわれわれは知らずにいたものです。だいぶ経ってそれを知り、

引継目録

本日、左記引継目録に依り事務引継、完了致候也

目録

- 一 金銭信託簿 壹冊
- 二 右様式會社六様式會社附物件目録書壹通
- 三 昭和十七年度米倉庫附土地同、同
- 四 昭和十七年度收入雜收の書正金銀金、同、七版帳也
- 五 六様式會社規約書
- 六 委員會議事録壹冊
- 七 照合用會長小印草壹同
- 八 経費確認帳壹冊
- 九 使用済領收證帳
- 十 六様式會社規約書
- 十一 便覧
- 十二 委員會管理費帳
- 十三 領收証帳
- 十四 諸往復書類並に參照書類

六 義 莊 町 會

この点について、川口盛之助氏から貴重な資料をいただいた。

それによると、昭和十七年七月の文書であるが、当時既に「六義莊会」というものが存在しており、その会計事務の引継報告書などが出来ており、十七年七月の引継書には前会計委員川口小左次氏と後任の井原正吾氏がその衝に当たっているのです、ここに載録しておく。

戦争中のこととはいえ隣保の方が亡くなったことを知らずにいるのはこれは申訳ないというので、六義莊に町会をこしらえて連絡方法をとらなければならぬというので、そのときに大谷さんになって貰った。

中野 それまでは隣保の世話役みたいなもので、町会長という組織はなかった、校長さんの森田さんには随分世話にな

った。俳句の先生、体操の先生、そういう方にお世話になった。

—— お世話をねがったということは、どういう方法で：

中野 町会が組織立って出来るような状態ではなかった。戦争中は隣保で堀抜さんのホテルで皆が寄り多勢いらっしゃったが、その時分でもいろいろの御意見があった。私は国民服を着て戦闘帽をかぶるために山に來たんじゃないという御意見もあるし、いろいろまちまちであった。

田淵 配給のための、ただそれだけの隣り組であった。

—— 大谷さんから出來たのです。

中野 町内会長という名になったのは大谷さんからですね。豊田さんから中尾さん、それから私ということですね。それ以前は隣り組の世話役ということだったのですね。

中野 堀内の奥さんが仰言るように景山さんが亡くなったところがそのことを存じませんで、ようお見送りもしませんで、まことに残念でした。それで町内会のような組織があったらよいなあというので大谷さんにお話をして……

堀内 大谷さんに町会長という名前をはじめてつけてなっていた。

熱心だった初代町内会長

—— 規則を考えたのは大谷さんらしい。大谷さんは非常

に厳しく一生懸命、皆さんのお世話をして環境をよくしようとしたら皆さんから「そんなことをいわれるために此処に來たのじゃない」という人があるので、けったくそが悪いから、お世話はもうやめやという話を、私によく言われた。(笑)

内藤 御熱心であり過ぎた。

堀内 でもね、大谷さんがして下さったからこそ、戦後のあの経済のややこしいときに、大谷さんは此処はそんなところではないと反対していただいた。私どももずっと判を貰いに行ったことがある。

—— 大体、以前は隣り組程度の組織であって、町会という組織はなかった。配給ものを貰わんならからというその程度のものであった。

そこでお尋ねいたしますが現在百四十軒ですが終戦当時は八十軒で、大谷さんの時の記録をずっと見ると役員会でも出席をとってとても厳しい。(笑)

ところがいま一番、悩んでいることはこの町会はどうにしたらいいのか、お世話を精々したらいのか、放っておいたらいいのかに迷っている。

たまに皆さんのお宅をお訪ねすると奥さんが出て来られずに犬が挨拶する。(笑) そこでもっと親しい町会にしなければ東洋一の幸せなところに住んでおられる人が—— 空気が良く永生きをして貰わなければならぬが、年齢をとって身体が不自由になればお隣りの奥さんとお喋りしたり、話をする以外に楽しみはなくなるもので、お隣りに仏事があれば



(向って右より) 遠藤副会長，山田会長，渡辺芦屋市長

寄り合いなどをしたい。そうでなければ寂しくて仕様が
ないと思う。

それでそういう町会にしたいというのが私の希望で、もう
一つは此処のガスパイプの埋設が非常に浅いのです。ガスとい
うものは一・二〇メートル、水道も一・二〇メートル掘り下げ
てないと危いということが法律で決っている。それを昔の人

力車が通った時分のことだから四〇センチぐらいしか掘って
ない。深く入っていない。大谷さんに言わせると、道路は町
ののだから掘り直すときに、また深く掘らなければならぬ
場合、手間賃が余計かかる(笑)。ということですが、その
時分はそういう必要がなかった。

今は大型のバスや大型の自動車を通るから、ガスが漏れ、
水道が濁りますので、こりゃ大変だということで私は皆さんに
お手紙を差上げ、そして今、町内全部を掘り返している。道
路がガタガタだからあれを直すために掘り返してやっている。
ガスは今一・二〇メートルの深さでやっている。それから水
道もそうしようということです。

それから此処から小学校に通っているのは現在、大体の数
字では二十九人しかない。この町会は朝日ヶ丘に鉄筋の大
きないい学校が出来、市の方では学区を考えているがどうも
便利が悪い。それで私は学校の区域を決めるまでに市に交渉
して、私は渡辺市長とは県会時代からの友達で、渡辺さんよ
り私の方が古く、私は三、四年早く副議長をし、渡辺さんは
その後に副議長をした——という古い友達であったので、渡
辺さんが此処に来い、来いというので六麓荘に来たのですが
——それで校区を決める時でも、町内会の皆さんはなかなか
寄ってくれないが、問題が差迫って皆がガアガア言い出すと
町会の人たちもガッツと来てくれる(笑)。

それで父兄の人たちはかりに寄っていただいて、こういう
ようにしました。朝日ヶ丘にやるということはやはり随分不

便だからこのままにします——というふうに食い止めました。

剣谷は将来、公園にする

それから上の方の剣谷が四万坪あります。あれは農林大臣が中国山脈の一坪一〇円の山と、こっちの一坪十萬円の山と取りかえて、金儲けを企て内海前市長が百万円貰って汚職がばれて汚職問題となり内海さんがやめ農林大臣も亦汚職にかゝったのですが、この剣谷の土地四万坪を渡辺市長に話をし、今度これを芦屋市の公園にします。旧水源池から全部公園にし、剣谷の山の水は短大と大学の間に流すようにし六麓荘をこれ以上に住みよいようにする。

それから皆さんご存知のように新幹線が山の上の地下深く通っている。そのために上から流れていた水が全部、新幹線に下りて了って、川の水はこちに流れ無くなった。それで今の水道の水は新幹線の下から水源池にあげている。大阪の淀川の水と一しょに合せてあげて、そして下ろしている。(笑)だから水が悪くなっている。新幹線に落ち込む水がなんと一日に三千トンある。それを市役所が汲み上げるのですが、そういうことであの水源池も空っぽになっている。それで市役所は国鉄から二億円という金をもらい下からポンプで水源池に上げている。

—— 多数の人 私も山の水だというて喜んでおりましたが(笑)
それから水道は地下一・二メートル以上なければな

らぬのに四〇センチぐらいしかないので、水道の水がよく濁る。それにバスが通るものだから錆が落ちて濁るので、それをやり直して深く仕直して貰うというのが一つ、それから今の公園にすることです。

緑を今のように残しておく。そして蚊がわかぬように、松食虫がふえぬように市から補助を貰って葉をブウブウと撒いているのは町がやっている。但し各家に葉を入れると金魚が死んだとか、家がどうかいわれるから各家には葉は撒きません。大阪湾が一目で見える此処は、東洋一なんですから幸せに暮らして貰うようにしなければならぬ。これが目的です。のであなた方で昔、楽しかった思い出を一つ言うていただきたいのです。

堀内 バスに乗り降りするのがとても楽しかったです。朝の初発も昔は随分早く出ましてね、そして帰りは十一時でしたが、山廻りというのがありましたし、何処でも止めて乗れました。

昔は専用バスが運転

堀内 バスは六麓荘土地会社のものでしたから朝は「今日は……」というて帰りは「お帰りなさい」というて何か家族的でしたね。本当に親戚の人みたいに……

—— そのバスがこの六麓荘のバスだったから自分の自家用車に皆が乗ったわけですね(笑)。今は阪急バスです

から……

内藤 一時、戦争時分になくなって、歩きました。

—— 何年ぐらい歩かれましたか。

内藤 四、五年ぐらいになりますね。バスが止ってから九年間歩きました。行きしなはよかったが、帰りしなは疲れて帰って芦屋の駅から見上げて、あすこまで、また歩かんならんなどと思いました。

それでも帰りましたら、やはり此処はいいなあと思いました。日の出橋まで帰りますと、ああ、やはりいいな、良かったなと思いました。

—— 九年間バスなしに駅からここまで歩いて、やはり此処はいいなあ——と思いましたか。(笑)

堀内 その時分、私もまだ若こうございましたが両手に一ぱい買いものを下げて帰るわけで、テクテク歩いて帰って来て日の出橋まで来まして、ひょっと見下ろすと陽が海の方に一ぱい輝いて岩園の学校のあたりまで来たら空気の味が違いましたね。

—— この八十塚から上は、農作のところはなかったと思いますが……今でもありませんが極楽寺という屋敷から上は

堀内 もう、あの村より他にありませんでした。岩園小学校の辺も畑でした。

中野 いま時分は、目白や鷺で二月になったら鷺が啼いていました。

—— こんないいところで松茸がじゃんじゃんはえて小鳥

がようけおって、兎が跳んでいた場所が今だに残っているから、私は率先して鷺を飼うて見ようと思って、いま二羽飼うておりますが、皆さんも犬より鷺をお飼いになったらどうかと思っております(笑)。

鷺が鳴き、狐や兎も出た

堀内 二月になったら鷺が啼きます。はじめのうちは谷渡りの下手な啼きようですが、七月ごろまで啼いております。

それからホトトギスが啼きましたし、兎や狐がいまして、兎などは前栽まで入って来ましたね。

—— いつごろまでいましたか。

堀内 向いの方に丘がございましたね。

中野 戦争中に焼夷弾が落ちて松が焼けましてね。それから松茸が生えないようになりました。

堀内 私も庭でスキ焼をしたことを覚えております。向いに翠丘団地が出来まして、池を埋めて了って丘がなくなっている。狐が来なくなりました。丁度南の方が翠が丘団地になっている。ひょうたん池というのがあり、こっちから見ても山で景色が良かったのに、いつの間になくなって翠が丘団地になって了った。芦屋と西宮と両方が所有している山だそうですがあれを削りまして翠が丘団地が出来てから狐が来ないようになつた。

私が県会に出ていたときに、あすこにオートバイを

走らせる競走場を造ろうというので随分もめたのです。いい、悪いといって……。あちら（西宮）は競馬場をつくる、こちら（芦屋）は競輪場をつくる、オートレース場を造るというので、やっさもっさしている。いろいろ県会で話が出たけれどもやはり住宅がいいだろうというのであの当時の金で五億なんぼをかけてやり、そして売ったが坪が七千円ぐらいです。今は三十万円も三十五万円もしているでしょう。

県ではあの工事でうんと損をした。あんなに金がかかるとは思わなかった、池も埋めました。あれを埋め込むのにごつごつ金がかかった。あれが山を切り込んで屋敷にする工事としては兵庫県で戦後はじめてのことで、オートレースの場所にして県が儲けようというのでした（笑）。

それからあなた方にお尋ねすることは曾我廼家五郎はいつごろまで六麓荘に住んでおりましたか。

田淵 戦争がはじまるころで、五郎さんの長男に第一回の応召が来たのです。二回目にうちの主人に来たのです。

十六年か七年ころですか。

田淵 主人が召集されたのが十三年でしたから、その前の十二年ころですかね。

曾我廼家さんのおった家は何処ですか。

中野 星野さんのおられる家で、昭和十年頃たしか四万円で売りに出ていた。

それから一つ堀抜さんがホテルを建てたのはいつ

ごろですか。

田淵 戦前に東京オリンピックを目指して建てたのです。

内藤 客室が少いのです。そこへ戦争が来ましたので許可が下りなかったのです。そこであすこが空屋になっていたので六麓荘の人のために夕食を食べさす場所にしてそして残月庵があつて和食のときは残月庵で、あれは六麓荘の会員だけが行きました。

中野 料亭で一般にやっていたが大体会員制度で、いま内藤さんが仰言つたように料理屋というものは許されなかったの、会員だけということをやっていた。堀抜さんがあのホテルで洋食をやったのはずっと後です。

残月庵ではスッポンの料理をやっていたのですね。いまの芦大の隣ですね。私の家の上の……

内藤 あれは広海さんのお持ちものだったのです。

堀抜帽子がホテルをつくつたのですね。今日、神井議長が話をしていました、普通の人が五十円ぐらいの月給のときに一晚泊したら三百円ついた。三百円というと半歳働かねばならぬ。（笑）そうするとあなた方は三百円のホテルにお泊りになった。（笑）

内藤 泊りはしませんが食事はよくしました。お客があたりしますと……。

田淵 高い料理でしたね。

そのコック長が私のところの大阪の「くだおれ」の店で働いており七十八才になっております。

多数 まあ、そうですか。

堀抜のホテルの洋食のコックをしておりました。神戸のオリエンタルホテルに永くおったいいのを堀抜が引き抜いたのでしょう。

快男子、堀抜義太郎氏

中野 堀抜という人は愉快な面白い人でした。

—— あの人は大ホラ吹きやでね。(笑)

中野 本当に愉快な人でしたが、あの人は苦楽山荘を残しておられます。伊丹の帽子屋であの苦楽山荘のところ、下村海南先生の邸で「海南荘」といっておりました。それを堀抜さんが買い、そしてここにホテルをやりました。

戦争中だったが、いつでも若い芸者五、六人を連れて愉快な人で「中野さんマージャンをしようか」と仰言っていました。

—— 日本にまだ何も無い時分に、弁当箱型のテーブルコーナーダーを進駐軍から貰って、私たちの喋ったのをテープに入れて聞かしてくれて吃驚したことがある。あの人はあれだけやっておったのだが、最後はペチャンコになって、ひどいことになった。

内藤 息子さんがいけませんのと違いますか。

—— いや、おやじも晩年ダメでした。派手過ぎました。

戦争中に帽子で儲けたが戦争が終ると売れんようになったか

ら、アンゴラ兎を飼うたり、いろいろのことをやりました。

堀抜がホテルをやったのは戦争以前で、女学校とどっちが古いですか。

田淵・内藤 女学校の方が古いですね。

—— 学校は何で焼けたのですか。戦争で焼けたのですか。

内藤 漏電で夜の七時ごろに焼けました。

—— 最後に伺いますが図面で見ますと大國主西神社のお宮がありました……竹田さんの屋敷の突き当りの山本さんの家のあったところに……

田淵・内藤 坂を上って行きますと鳥居が立っておりますね。

—— そうすると上の道路より上でしたか。ドイツ人が入っていた家の上。

中野 あのお宮さんを私ら目標で上って行きました。現在の水源池のある東隣り竹田さんの裏がいま売りに出ています。

(おわり)

水源池の主 富田伝一氏



前項、「古老座談会」

は女性ばかりのお話であつたが、他に男性の古老がおられるはずと調べて行くうちに、昭和二十二年三月の間

に富田伝一（水源池管理人）西川繁治（町内会事務員）森田英一（芦屋学園第四代校長）井原正吾（元住友信託監査役）諸氏等々のお名前が出て来た。既に故人になられた方もあるが、右のうち富田伝一氏（伊丹市在住）から、左記のお話があつたので、記録しておく次第である。

私は昭和六年、六麓荘土地会社に入社、その水源池建設当初より四十一年五月まで約三十四年間、水源池の水栓番としてこの土地に居住した。この会社に入るまでは大阪に居住していたが、森本喜太郎氏とお知り合いになり、ここに移り住んだのである。そして水源池が精道村に移管されるとともに、私は一吏員として、ずっとここに勤務、その間、昭和二十一年十一月には時の市長、長岡喜十郎氏から勤続十五年の表彰をうけ、六麓荘水源池の守護神としてまでの過褒を頂いたことは生涯の光栄であつた。古いことで記憶も定かでないが思い

出すままを述べることにする。

六麓荘土地会社は資本金は十万円であつたが、株主の所有株に依じて土地を売却して昭和十三年に解散した。そのときに阪急電鉄が不動産事業に進出して、OS劇場の名義で、残地を買った。だが、その折りに六麓荘に住んでいる人たちは水源池と神社の二つは自らが管理経営しなければならぬことになったので、水源池は当時の精道村に移譲した。

当時はまだ町内会といわず六麓荘荘内会と称しており、初代会長は景山さんだったと記憶する。そして不動産（神社）は荘内会で預っておこうというので、それが終戦後の二十五年ごろまでつづいたが、神社の跡はいつの間にか売られて現在は住宅になっているし、神社の鳥居は上宮川町の神社に寄進して了っている。

六麓荘が開荘された当時の地価は安いところで坪当り二十五円、高いところで四十五―五十円であつたが、現在の大原市場辺りの田圃の地価が当時一反（三〇〇坪）七百円であつたことと比較すると如何に高価であつたかが判らう。

先般亡くなった芦屋市議会議長神井清太郎氏は当時二十四、五才の青年で工事請負人の一人として六麓荘開荘に当つた――という述懐が座談会のお話の中にあるが、元々、この人は農家の出身であつた。

水量約一万石の水源池をお預りしていて苦労したことは、彼処は他所から水を貰わぬ水源池なので、夏期晴天が続くと渇水の惧れがある。

それで貯水が少くなると町内の一軒々々に節水をおねがいして廻ったことがある。水質については六麓荘は小規模で検査場がなかったので、西宮の越水水源池に持参して検査をして貰ったり、阪神水道が出来てからは塚口の浄水場に持参して検査して貰っていた。

終戦後、進駐軍が来て、塩素を入れなければならぬことになり、私が毎日検査結果の報告を出していたが、週に一回、抜打的に進駐軍の衛生班が来て塩素の量を調べたりしたが、塩素の入っていない水源池の水はベリー・ナイスだ。と咽喉を鳴らして飲んでいながら、帰り際にはハ塩素を入れよ、塩素を入れよVと命令して帰って行った——おかしさを今でも覚えてい

歴代町内会長が語る思い出話

六麓荘の環境保全に

全力を尽した



初代町内会長

大谷 哲平

遠大な町づくり計画

六麓荘の土地は昔は全体が国有林であったのを払い下げをうけたのです。そして株式会社六麓荘というのが出来まして、先ず土地を確保して土地の切り売り——今という宅地造成がはじまったのです。それが昭和の初めで、坪いくらで売られ

たかという、私の聞いた話では三坪で一元とかで、あるいはもっと安かったかも知れぬ。延べ坪数が三倍ぐらいあるから十坪で一元ぐらいだったかね。

それが十三円から十五円ぐらいまでの予算にして道路や下水などに金をかけた。そのころは芦屋駅前で十円か十二、三円出せば手に入る時代で、そのころはまだ芦屋の道路といってもコンクリートとかアスファルトで舗装されたところは殆んどなかったのに、ここは全面的に舗装道路にして、完全なものにしようじゃないかというので、申込んだ人の金を預かって——預ったといってもいつ宅地造成が出来上がるか判らず心配だからまあ一つ会社を皆で持つことにしようじゃないかというところで株式会社六麓荘に金を払い込み、その払い込んだ金で造成を進め、また売り出すということをやった。

それでここを開発するに当って先ず第一に考えたことは住吉側に寄ると夏は非常に暑い。西宮側の方に寄ると冬が寒い。それで冬が温く夏が涼しいところという、六甲山から甲山に風が逃げるところの角が一番良かろうというので、この六麓荘の地が風の流通の関係で一番良いだろうというのでここ

を選んだわけで、ここは以前は劍谷^{けんこ}といのですが、「劍谷を開発しますので、今年はそちらに移ります」という年賀状を私が出したのを今でも持っておられる人がある。当時、私も申込んで此処を譲って貰ったわけです。

ここの開発造成に当って香港を真似たというのは、ご承知のように香港にイギリスの租借地であり、カルオン半島（九龍）とホンコン島の二つをいうので、香港島の南側、今はイギリスがトンネルを掘ったから自動車で下を通っているが三年ぐらい前までは船で通っていた。その南側が非常にいいところで其処へ行って見たら白人専用の租界だから非常にいいところなのです。アメリカやヨーロッパのあっちこっちに行ってみたらアメリカなどはだだっ広くてダメだし、スイスなども凸凹な急斜面でダメで、結局香港島のここが一番良いといっているのでその真似をしたわけだが、当時香港視察に行った人はみな亡くなって、今その話を詳しく聞けないのは残念だ。

そこでこの白人専用の租界地で一番困ったのは水がないことだといので、此処では水を確保するために、劍谷の山の水利権を全部買った。そのとき金額は大したことがないのだから山を全部買っておけば良かったんですが、水利権で下の方の米をつくる農家の人が何んか、かんかと文句を言うので、その方の水利権も買いました。当時の金で三千円を払った。

こんなわけで水源池を先ずつくること、それから交通網をつくること、それで阪急、国鉄、阪神に話をして苦楽園までバスを通す権利をとり、六麓荘、バス会社も出来、水道、水源

池（貯水池）も出来、道路も町会でやる。それから先ず第一に道路の区画を角々を一軒の家の前を基準に行き、香港と同じように全部、角々にその家の門が出来るようにした。

それから先ず電気を一カ所に集め、個人の家に送る地下ケーブルをつくりガス、水道、電話一切を地下に埋めた。このような理想的なものをつくったのは恐らく日本中何処を捜しても他にはないのじゃないか。わたしは当時、いろいろの会社に関係していて、社長とか役員という責任の地位にあったが、そういう目標で理想境をつくろうと自分たちの金をまとめて開発したものだからそのころの芦屋の町役場には全然お世話になっておらぬわけです。

それから当時、治安が悪いといので苦楽園、親王塚、朝日ヶ丘の三カ所に交番所を建てたものです。何故建てたかという六麓荘は警官の配置の出来ない区域になっている。それで金はこちらで払うから請願巡査をおいて貰おうということになり交番所を建てた。

株式会社六麓荘は初め細野浜吉氏が社長で森本喜太郎さんが専務で宅地開発をやり、われわれから金を集めたのだが、宅地がまだ出来ないからその金はどうなるか判らぬと困るというので、申込んだものの皆の代表として内藤為三郎さんが社長になった。そして戦争やなんかで施設が維持出来ず、処分して残っていた神社と道路敷地を終戦後阪急が土地開発をやるといので不動産会社をつくり、それがOS劇場に変わり合併したので私が後に談判をして、その返還を迫った。

それから以前、この上に剣谷神社というのがありお正月には名刺交換会をやったりした。仲哀天皇時代の創建といわれ、大きな岩に神代文字というのが彫り込まれ三種の神器のいわれが書いてあった。

進駐軍と折衝

私は戦後、町内会長をしたが、当時進駐軍が来て方々に電柱を立てたりした。あのころ進駐軍はとに角、怖いものだったからこれに逆らったらすぐ処刑されると思っていた。進駐軍が堀抜の国際ホテルの跡を接収して特別に電気を引くわけだが、われわれの方は時間給とか、いろいろ制限されていた時であったから、その電柱からあっちこっちの家が電気を引き入れることが流行って来た。進駐軍なんて応接なものだから、皆がサインを貰って進駐軍の電柱から電気を引いたので、そこで電柱撤廃という問題が起り、撤廃すれば元の制限電気に代ってしまうが、このままおけばいくらでも使えるという

——二派が当時出来たわけです。

町内会長とかいう制度が出来たのは、これらの問題が起ったずっと後で、最初は誰れということなしに私が市役所に交渉したり、森本さんに交渉させて、水道のこととかバスのこととかを交渉してほじくるものだから「あんなのは困る。われわれが六麓荘に来たのは少しのんびりしたいためなので隣り近所、余り煩わしいのは困る」という声が出て来た。それ

で私は「いや、それは違う。ここは最初、香港まで見て来て何処にもない立派な理想的な高級住宅地にしようというのが、その理念なんです」と皆さんに訴えたところ、これを理解下さって「われわれは大谷さんを再確認して町内会長だということにしないと問題が起こるのだ」というので、それから町内会長になりましたが、それは戦後しばらく経った昭和二十八、九年のことじゃないかと思う。

それから思い出の一つとしては、そのころの六麓荘は泥棒が入って仕様がなような治安状況であった。六麓荘というと立派な高級住宅地だから、泥棒側としては一つの宝庫だったらしい。入られて警察に電話しても来てくれない。当時は自治体警察で警察官も食うや食わずだし、給料も貰っていないから、お互いが自治体で守るより他に仕方がない。

私は初代の公安委員長だったから市役所に話をして隣り近所が呼鈴で呼び合うとか、ガンガン石油罐を叩いて音をさせる。女は家の中で小さくなっていよう——というように訓練して貰ったが、泥棒の中には物を盗って、なおその上に、家に火をつけて逃げるというコワイ奴も出たりした。

こういう世相の中で一方には新しい人が金が出来たから此処に住むのだ——という人がふえて来た。そういう人たちはやかましいことを言われなために此処に来たのに——という。そのうちに森本さんも他に引越して行き、他に引越して行く人が相当出て来た。

現在、ここに残っている人々はそのことを言わないが、

自分の家を売って他所に行こうという人は、売るには町会の承認を得なければならないし、相談をしなければいけないことになっていたのだが、——その内規が終戦後は一時無茶苦茶で相談も何もしない。誰れに売ろうと、どう処分しようとする自分の勝手だ——という新しい議論が出て、統制も何もなくなっていました。

町内会というものは法律じゃなく、お互いの申合せ、ゴルフクラブの会員規則みたいなもので先についた人が先にプレ—をやるようなものです。

さて、こんな状態になったから当時、六麓荘を逃げ出した人も事情が良くなったので戻って来たという方々も多いのです。

初代公安委員長をつとめる

それから私は当時、初代公安委員長だったから泥棒退治の模擬テストをやったこともある。署長と私だけが知っていて「いま、強盗が入った」という電話をかけると刑事が公安委員長の家泥棒が入った……というので大騒ぎをしてかけつけてくれるということをやったが、後で講評されるので皆真剣にやってくれこの訓練が六麓荘を護るようになったが、あるときはこの模擬テストが測らずも本当の兇悪犯人を捕まえるという一幕もあり、それ以来「六麓荘に行ったら捕まるぞ」と、泥棒仲間では評判になったという笑い話もあるくらいだ。それから、当時現在の芦屋女学校の場合は、六麓荘造成工

事のときの、いろいろの材料をおいていた倉庫のあったところで、その広場にはのちにはブルも出来お茶屋や倶楽部が出来たが、みな町会のものでその中に子供の遊び場もあり（口絵、参照）今でいうと託児所だがそれが幼稚園と化したわけで、それを市に寄付したのを学校に払下げをした。もともと女学校のあすこは町有地で土地会社それ自体が六麓荘のものだったのだから今、残った土地とか道路敷地など、こちらに移譲されているわけです。

学校から何千万円、阪急から何百万円とったという。市役所に寄付したものは、金は返えしませんが、平野さんの門の中の七百坪あるあれは、バスの溜り場で休むところになっていた、あれも市に寄付したのだが市が売って了った。

それから芦屋女学校の校庭には桜の木が一ぱいあって陽春、サクラ満開のころには赤毛氈を敷き、花見の行事がずつとづいておった。その時は学校を使ったら不可ないなどいかなかったが、それが近年になっては、入って来てはいけなさと柵をしてしまった、それで私が怒ったのです。

大体、ここは住宅地区であって学校の敷地なんていうのもともとこれは町内会のものであったのを、市で管理をしてくれという条件で寄付したもので、物品売買とは違うのだ。市役所の教育地区でなく住宅地区として、そういう環境をつくるために市役所に管理方を依頼して寄付したものでそういう書類が全部あったのだ。六麓荘の水道を五万円で買ったとか、バス会社に権利を売ったとか、電話を売ったとか、そういう

書類が全部あり、当時森本さんが金を受取ったのだが、こういう町会の書類を全部括って市役所に移管してあったので、私がそれを持ち出して来ていろいろ調べ、学校や阪急を相手に六麓荘町有の道路なんかを取り戻した。

盆踊りや、ダンスパーティーの催し

年中行事は盆踊りとか、ダンスパーティーとか、いろいろのことをやった。今はやらないようだが、私が町内会長当時は、皆さん喜んで集って下さった。私と知り合いになった人は心丈夫だったのですね。大谷は公安委員長だから警察に言うより大谷に電話をかけた方が早く巡査が飛んで来て下さる——というわけですね。

その時分町会費は一年間に一元とり、私のところで年間八十二円払った。そして道路の周りの芝を刈ったりした。というのはルンペンが火をつけたり、泥棒の隠れ場所になってはいかんで見通しをよくするためでした。

バスは苦楽園と六麓荘が一緒にやり、両者で懇親会を開いたこともある。昔のバスは料金を払わず毎日パンチを入れる定期券制度で町費で賄っていたのですから、バスの運転手に頼んで牛肉や野菜を買って来て貰っていた。

電気なんかも街燈は全部無料で八十何燈あった。それに燭光が書いてないから千燭光つけても五ワットつけてもかまわぬことになっていた。その代りつまり電燈料金の代りに道路

の敷地は使わせる。交番所など公の電気は差引くという一札をとっておいたのに大谷会長は電気を盗電して何年間も電燈料を払わぬのは違法だ——などという問題が飛び出し、新しい契約を結んだというようなこともあった。

それで、下の町会の方では六麓荘に倣^{なま}って市役所が年間二百万円ですが電燈会社に道路の使用料をとり、そして電燈料金としてまた二百万円払っている。電燈料金が何百万円になれば道路代もこれに見合って上げる——ということを僕がやったもんだから、両方とも値上げしないで今でも全部やっているのですが、私がやめてからは、六麓荘だけが料金を払っている——という現在は変なことになっている。

お互いの町内会を守ろう

それから内海市長のときに六麓荘の上の土地を宅地造成に払下げるといふ問題が起った。私は六麓荘は水利権をもっているのだから絶対に開発はさせないと主張した。大体、水を飲んでいゝものは六麓荘とその下の芦屋市民じゃないか。

少くとも私は代表として六麓荘の上に宅地をつくっていいか、山林を払下げていいか——という公聴会を開いてその資料に基いてやるべきで市長は市の全体を代表しているのだから公聴会を開いてやるべきじゃないかと私は主張した。六麓荘をこういうように育て芦屋市のために一生懸命やって来た。私は、前から芦屋ではパチンコ、マージャン屋をつくっては

いかん、射倖心をそるものは一切いかぬ。料理屋も六麓荘に三軒あった、山芦屋、岩園にもあったがそれをみな潰してやった。それからもう一つは山を切り開いたらいかん。緑の町をつくろう、工場を誘致してはいかん。というたときに当時の市長だった猿丸吉左衛門氏は「たい何んといって僕に反対したと思うか。『大谷みたいなことをいうたら町の財源がなくなる。パチンコ屋もキャバレーも出来なくなれば市の財源がなくなる』

といった。そのとき私の発表した文書を見てご覧なさい。

「芦屋というところは天下に名高い住宅地だから、六麓荘をはじめとして全市がこれに賛同しているのだ。ここでそういうものをとり入れなければ成るほどそういう財源は入らなくなるだろう。しかし、それをやらないから、他所から芦屋に憧れて裕福な人が入って来ているのだ。だからその富裕税でこれ以上の市税が入って来るじゃないか」と反駁した。

それから日本で一番最初に公安条例をつくったのは私だ。

「五人以上集まるときは公安委員会に届け出る」というのだ。そのころ、芦屋の共産党、社会党といってもまだ微々たるもので市政についても何にも判らないしその存在すら市民は殆んど知らない。だから僕が市会に行つてこれを提案したら満場一致可決で拍手された。つまり五人以上集会したら私のところに届けて来なければいかぬ。——という条例なのだが、

その本質的なものを皆は知らないから満場一致で決めて了つた。つまり芦屋におれば会社や工場のストライキで五人以上、

デモ隊が来たらお巡りさんに引っぱられるということです。

それで芦屋に、金持ちが全部集まるようになり、その富裕税でもつて今日のように非常に裕かな町になったのだ。だから私は前市長の内海さんに三割自治体というが芦屋は七割以上入っているじゃないか。こんなところは日本中何処にもない——といったことがある。そのあと、例の剣谷に宅地開発問題が起り内海市長の汚職事件があったので私は渡辺さんを応援し、内海さんは落選した。それで私は渡辺さんに宅地開発問題を撤回しろ、撤回しろといったが実現出来ない。結局、一億七千万円の金を出して買戻しをしたわけだが、あの払い下げはたしか六百万円だったから、一億七千万円というのは市民の金を使ったわけです。そうすると水源池は濁つて来るだろうし、水源池をも一つ上に持つて行かなければならず莫大な金がかかる。そこで市に買取らして開発を阻止して貰ったが、これは市会の方々のお蔭だ。亡くなられた中尾さんも一生懸命やられたけれども、払下げたものは仕様がわからぬようにもう一本通らせようとか下水をもっと完全なものをつくらせよう——というような微温的な抵抗をしたが、私はそういうのでなく、歴史的な保存法に基いて本当に真正面から戦つて、町づくりを基礎からつくり上げようという考え方で、この点がちょっと違うのです。

その点において、私は「隣り近所、余り煩わしくないとこそ思つてここ六麓荘に来たのだ」という人々には「お気の

毒だけれども、そういう考えを捨てて、合流してやって下さい」といつもおねがいました。

私は改めてここで、新しく来られた人々におねがいたい。昔の金で五万円、十万円とっている。そんなところは日本中、何処に行ってもない。今の金で十万円か十五万円とっているが、昔の金のことを思えば百五十万円ぐらい取っても構わぬ。町会には拘束力は何にもなく、皆さんの自由だが私は一つの地縁と申しますか、縁あって、ここに家を建てられる方々に基礎的なことを言うのです。するとこの人たちは、現在の町内会を運営するために金をくれ——というのでなく、六麓荘を護って行こうという遠大な気持ちでこの人物は言っている。それなれば一つ出そうということになるのです。

そういうふうにお互いに金を出すと、自分の町内会だ——という愛郷心が出るのです。一斉電話とかテレビ電話をお願いして道路で何んだか音がしたら、一般に判るような施設をとみながやろうと言って下さる。つまり基礎的のことが軌道に乗るわけである。

大谷哲平氏略歴

東京都出身、現住所、芦屋市六麓荘一五一

明治四十年八月生れ

日本大学中退

元満洲大谷重工業社長、初代芦屋市公安委員長、大

谷重工業副社長などを歴任して現在に至る。

趣味は柔道、相撲各六段

コミュニケーションの

不足を痛感



第二代町内会長

豊田 善右衛門

六麓荘開発当初から関係

私が六麓荘の住民になったのは、皆さんは古いように思っておられるようだが、実は此処に来て十二、三年にしかありませんので古いことは何も知らない。真ん中の孫が生まれた時分に来たのですから十三年ほど前ですね。此処に生まれて二、三年経ったときに大谷さんの後を引継ぎました。まだこれらの事情も何も存ぜぬ間に町会長になったわけで知っているものは誰も引受けませんので、結局、知らぬものが引受けるようなことになった。

大谷さんとは此処に来る前から昵懇で私は以前は山芦屋におり、今の滴翠美術館（元三和銀行頭取、山口吉郎兵衛氏邸

跡、号を滴翠といった）の前におりました。中山製鋼の中山悦治さんがご存命時代で、私の方の下におられた。戦争中の所謂隣り組で一緒だったわけで、あすこにかれこれ二十年もおりましたでしょう。

戦後、まもないころですが大谷さんのお嬢さんと私の娘とが甲南女学校で一緒に、PTAの関係で大谷さんと私とは同じ時代に女学校のお世話をした時から心易かったわけです。

そしてこっちに参りましてから二、三年目に町内会をお引受けした。私は六麓荘が開発されました折りに株主として出資いたしました、その株に対して土地の申込みをしたものには一定のお金と株券を引きかえに土地を分けて貰った——そういう開発方式であったように思う。

そういう意味ではこの地所は創立当時から私は持つておったわけで、そういう意味では古いが、こっちに住みましたのは、この辺もどうやらこうやら住めそうじゃ——それまでは住めそうなどころではなかった——そして大変便利になったらしいというので決心してやって来たわけです。

その当時の話としては、電線とか下水道とか全部を地下に埋め、道路もまだ舗装のない時代に全部舗装されているとか、あっちこっちに街燈、保安灯があると、いろいろのことを当時、開発会社から聞かされておったわけで、将来、良くなるだろうというので分けて貰った。資本金なども僅かな金額であったらと思うが私の親戚になる広海三郎氏（広海汽船社長）からその話を聞き、勧められてこの土地を買った

わけです。土地会社の社長であった内藤さんは存じませんが内藤さんが主な発起人でいらっしゃったようです。広海は永らくこの私の家の裏側におりましたが、戦争中に山火事がありまして売って了って今は御影の方におります。

私は大阪で昔から繊維をやっており、戦後は毛織物に変わり豊田産業という会社をやっている。そんなことで実は古いことは知りません。開発当時、ここは優れた住宅地になりそうだと勧められて買ったわけですが、買っただけで放ったらかしてあり、此処に来ました時はまだ淋しいところでした。

六麓荘に新しいバイタリティを

この間も最近、来られた方とバスの中で話合っていたのだが、私が町内会長になったころは、ここから岩園小学校にバスに乗って通学する児童は五、六人だったが、このころでは三十人近い。それだけ世帯数がふえたばかりでなく、年令層が若くなったという事で、登校時間になるとバスには溢れるように三十人近くの児童が乗る。私が引受けたころは九十世帯だったが今は百四、五十と世帯数も増加しており住んでいる人にそういう若返りが行われているということですね。昔はどっちかというと第一線で活躍されておった方がちょっと一歩退いた隠居という方が比較的多かったが、現在は現役が多く、したがって小さいお子さんが多い。そのこと、此処は昔の経営地だから、一区劃が大き過ぎる。今はそんな

のは実情に合わないから一つの区劃を割っている。したがって世帯数は非常にふえ、毎年相当数が入居して来られる。新築なり今までの所有者が変わっておられる方もあるが大部分は新築して来られる。

私、町会長になったとき、来て間もないから事情を知らなかった——その訳は、ここは非常にコミュニケーションがないうけです。バラバラに住んでいるわけですね。東の端と西の端と北の端と南の端、これを一括して隣組として運営するには連絡が容易じゃないのです。極端に言えば大谷さんがおやりになっていた当時は一部、大谷さんとお心易いものは大谷さんにお任せするし、したがって多少町会の運営の実情も知っておったが知らんものは何にも判らぬ、何をしておられるものやら何も判らぬ。総会を開いても出席されるわけじゃないし、年一回の総会ぐらいは聞くが、途中で問題がないと聞かぬ。しかしお越しにならぬ方は、あくまでもお見えにならないさんから結局、何をしているのか皆は壁紙敷のままでたいうのが実情だった。

それで私は、これじゃいかん。町会の皆は、やはりそれぞれ注文なり意見もあるはずだから、一方的のコミュニケーションではいかぬと思っていた。例えば九十世帯にしても九十世帯の方に連絡をするということは、紙に印刷して、手紙をガリ版につくって配るにしても、百枚印刷するということも大変ですし、ここは坂があるし普通の近所隣りと違う。御主人がお留守で見たのか見られぬのか判らぬというのが実情だ

った。そういうコミュニケーションの点において欠けている現在の町内会の在り方というものについて理解しなければいけないのじゃないかと思った。

例えば、此処に来ますことによって特別の寄付金を必要とする、吃驚しますね。理屈はいろいろ付きますがびっくりすることはびっくりする。納得するかしないかは別としてまあ大抵の場合新築して来るわけですが、いろいろの経費が要っているところですから余分にそれだけの経費がかかっているのだから、払いよいといえはいるが、びっくりすることは吃驚する。

私が引き受けまして、経費の内容を見ますとお金の要る理由が決して無駄に使っているわけじゃない。経常収入だけでは経常支出が賄えない。何故かといえは空地が多いのです。例えば電燈が沢山ある。それは空地があればあるほど防犯の上からも明るくしないと工合が悪い、そういう不在地主さんに対する施設を現在住んでいる皆さんが負担しなければならぬ。だから電灯料など馬鹿に高い。治安燈は全部が全部無償じゃない。街燈のうち、市が治安燈を認めて、それを関電が道路の使用料を免除されているから、市に対する電燈料を免除しているがそれ以外に、あちらこちらの暗いところには町会が立てているエキストラのものを持っているわけです。

そのエキストラを支払わなければならぬ、それがいわば不在地主さんの場所ほど暗いわけです。住んでおられるところなればそりゃ門燈の一つもあるし、家から光りが漏れること

もあるが、不在地主のところは真っ暗だから、そこは治安のために立てなければいかぬからこれが負担の中に入る。そういうものは不在地主から町会費でとればいいのだがそれがなかなか取れぬから、そのために新に入ってくる人の寄付金、臨時収入でバランスをとっておった。

六麓荘区画制の問題点

そういう運営を見ますと、入って来た時に高い入会金をとられる。何んでとられるのかと思っていましたが、自分がやっていると、これは頂戴せぬどうにもならぬなあと判る。

私は判るが、町内会の皆さんが私と同様にお判りになっているかどうかというと、それは判らない。それで皆さんに判るようにコミュニケーションを密にしなければならぬと思ったが何分にも町内は端から端まで広いのでどうにもならぬ。広さの数字は判らないが、開発当時から同じ広さです。

現在は所帯数がふえましたが同じ額の町会費でも軒数がふえ、したがって町会費でも軒数がふえ、したがって町会費もふえているから、段々運営もラクになっているはずといえるわけです。その代り、コミュニケーションで何事を決定するにも、印刷物も二百枚刷らなければ皆に配れないし、それを配るといっても大変ですね。

山田さんは気を使っているとお知らせを下さいますので、私も何んでもかんでも知っている方に属しますが、現在

判らぬことが沢山あるのは、止むを得ない。だから六麓荘を西町とか東町とかに区割せぬことには将来、運営に困るのじやないか。そして連合体という形にすることが当然考えられる。

それから六麓荘町内会への入会金は、その邸の坪数とかにもよるが基準というものはなく大体、大まかに、大体の標準というものが決っており、それによって皆が適当に、この方はこれくらいの格だ——といって一口とか、二口とか、あるいはそれ以上とかをいいただく。特別の方にはエキストラを持っていただくとかそれは特別にやっている次第です。

ご承知のように、六麓荘は既成概念としては特別な公共住宅地ということですが、それだけでは死んだ町というか活気がない。やはりビッドな町という意味からいいますと若い方がドンドンふえて来ないと発展しないのじやないか、其処のところが、六麓荘町内会に課せられたこれからの問題点でしょうね。専任の事務局員でもおいて、そればかりにかかって貰うということになれば一つ一つ事務の説明が出来ると思うが、そうでなければコミュニケーションがむづかしい。六麓荘の伝統的な良き、高級的な役割が崩れる。むづかしいことをいえばいろいろあるが環境を崩さないということは、緑が減らないようにしていただくとか、騒音を与えないとかいろいろあるが、しかし昔は、此処は学校があったわけじやないが、私が来たときは既にあった。町の発展のために学校を誘致したものだと思っているが、しかし学校が出来て、この

辺の良さというものがPRされ、ここに入って来る人がふえて来た。

環境保全と学園の存在

そうすると学校がだんだん発展してスクールバスが通る。

これがなかなか問題なんです、やかましいですね。それから排気ガスが出る。それ以外にこのごろは水の問題——つまり水の使用量の増加、それから渇水期には困る。学校があるために逆に発展の阻害要因になって来る。静かな環境が崩れ、困るわけです。

運動会などがあると、年に一回といえばそれだけだが、このごろは大学などはみな学生が自動車を持っている。それが気持ちよい、格好よいというので走り、わざと音を高くするとか、急停車さすとかするので、町中が騒がしくなった。静かな環境という点からいえば困る。プラス要因がマイナス要因になって来た。しかし、お互い同じ町におりまして現在だってマイナス面ばかりじゃないからそりや仲良くしなければならぬわけですが、しかし環境ということだけに限って考えると、例えば付属幼稚園がある。ここに小さい子供をやっておけば安全だという有難い面もある。女学校でも同じで遠方に行くことを思えば通学の便は大したものですから、デ・メリットばかりじゃない。一概に言えません。だから此処に住の方でお嬢さんを女学校にやっている人もそこそこある。

そういう意味では学校とわれわれとは一体で福祉を考えて行ける状態ですね。

それから水源池というものは、宅地を造成しました折りに私設水道をつくったわけですがそれが私設が法令によってダメになった。そのために市に寄付したわけですね。しかし六麓荘はその水を頂戴することになっていた、それがだんだん発展して水の使用量がふえて水が少なくなった、裏山を開発したので水脈が変わって、多少取水の面からも減っているのも事実、使用量がふえているのも事実。だからそういう意味で、あの水も今は下から調達しているのじゃないか。六麓荘本来の水源池の水は非常に良かった。しかし、私らが町内会長をしていた当時に、何とか開発というのが裏山を開発するというろいろええことを言いますけれども、実際は乱暴な開発をされることは事実で、あれは反対運動をやったので助かったがしかしあの当時、あの水源池が汚染される可能性は非常に多いというので非常に心配したわけです。

私の町内会長は一期二カ年であとを中尾さんに引継いだわけですが、私、なぜ短かく退いたかというと、今いうように非常にコミュニケーションが少なくて、私自身びつくりしたわけなんです。何も知らぬのに、お互いいろいろ議論もするわけですがこれじゃいかん。多勢の人が町の運営に参画して貰わなければいかんと思ひましてタライ廻わしというとおかしいが多くの人がどんどん町会の事務をやって貰わぬといかぬ、経験者がふえるほどいいんだと思った。

歴代会長の功績

幸いに中尾さんといういい方を見つけ押つけたのです。私はいろいろなことを、ようしませんでしたが、中尾さんを引きずり出したということは、私の功績にしておいて欲しいなと思っています。それまでは中尾さんという方が何処にいらっしやるということも何も知らなかったが、偶然の機会に中尾さんが出て来て引受けて貰った。そしていろいろやっていただいたわけだが、こういういい方を見つけたのは町会としては仕合わせだったなと思っていたが、三年ぐらいおやりになり現役で倒れたが残念なことで私はがっかりしました。

この方はご事業はいろいろのことをなさっていたが、晩年はレジャー産業ですが、城崎でホテルをなさっていました。このあとは、後任難で半歳くらい空白だったが、その間、遠藤さんに副会長のような形でなさっていた。非常にご熱心で責任感の強い方なので町会としては仕合わせでした。広くいりろの方と交流していると、いい方が見つかるもので、町会にもいい方が沢山いらっしやるはずで。

初代会長の大谷さんは永い間やって下さって、私のところに会長が来たのも突然のことで、準備も何もなかった。それまでに多少は個人的にもお知り合いでしたからお手伝いはしておったが町内会の創成期にいろいろ問題が山積していたのを全部やっていただいたのは大谷さんの功績です。

六麓荘土地が、皆さまにお売りして残っていたところがあった、全部売られていたわけじゃない。それを戦争前、六麓荘町会——戦争中の隣り組ですが——残っているところを引きついで六麓荘土地株式会社を解散したが、法人格が残っていたわけだ。

それを阪急が不動産事業をやるためには買売許可がいるために遊休株式会社というので六麓荘開発を買ったのです。そうすると、土地そのものの残っていたのが阪急不動産に行った、それは町会が譲りうけていたもので、町会の財産だったのが町会は法人格でないから登記が出来ない。そういうことのために阪急不動産に土地が行って行ったのを、大谷さんが気がついて、「これは俺らのもので、阪急不動産が懐ろに納めるべきものじゃない。阪急はタダでとっている」というので交渉をはじめた。なかなかうまく行きませんでした。大谷さんの努力もありまして、私たちの在任中に話がつきまして、返って来ることになった。たしか奥さんが参議院に出ておられる佐々木さんという弁護士——奥さんも弁護士——が芦屋におられ、その方におねがいしまして返って来た。それを何とか町会の名前で登記する方法はないかと研究して貰ったら出来るかと仰言った。それで佐々木先生におねがいして、研究して貰って、出来るというので登記に行ったところ市役所は通ったが法務局ではダメでした。それであわてて新に六麓荘開発株式会社をつくって、そこへ要するに町会のダミー会社をつくって、二重手間だったが、其処へ登記をした。これ

は中尾さんの時代のことです。

問題点は町会というものが財産を持っているというのはいいか、悪いのか——という問題です。大きくいって、いい面もあれば悪い面もある。まあ、皆さん、いい方ばかりですから間違いはありませんけれども、しかしいつまでも町会という性質のものがそういう資産を持っているということが果していいものかどうか、これが問題点に残っている。しかしそうしなければ仕様がなかったので、今でもダミー会社は存続している。ところがそれに派生して出て来たのが、芦屋女学校との紛争問題です。これは中尾さんの時代で遠藤さんがお書きになるが芦屋女学校の真ん中に私道があったんです。

私道というより市の道でもなく、村の道でもなく、此処の道は全部六麓荘町内の所有なんです。それが学校の真ん中に通っているんです。それが運動場をつくることによって、いつの間にか抹殺されているんです。

それでそれを返えしていただきたい、あるいは賃借料を払っていただきたい、あるいは買上げて貰いたいということを女学校に申出をしたわけです。小さい幅のものが、長いとそこそこの坪数になる。その当時としては女学校をお造りになって使われた値段というのでなく、現在の値段ということになるとこれはとくにむずかしい数字になります。

その当時からそういう黙ってでなく此処に誘致された女学校というのは、町の繁栄のためになるのだから、此処は運動場だから寄贈してくれ——と仰言ったと仮定すればあるいは

寄贈したかも知れぬ。その当時の方が。しかし何もいわずに勝手に寄贈してしまったということが後で判って来て、それは殺生だ。阪急不動産から返って来て今は町会のものだから黙って使用されているは困るというので、女学校と紛争となった。ところがとくに円満に話し合いが行かないものだから訴訟を起こし、和解になり無事にそれも解決したわけです。

これは中尾さんがいろいろお骨折り下さいましてそれが返って来ました。代金は、これは株式会社、いまお話ししたダミー会社の収入金になった。ですから町会は金持ちなんです

よ。簡単にい

えば現状は交番所の土地——あれも町内会のもんです。



現在の交番所と町会事務所

あばらやのような交番所を建てかえて立派なものを建て、その上を町会の事務所にして集会所にして、下を交番所にしたのがそれに

もそこその金を使って新築したわけです。一時は町会として借金もしたがしかし、もう借金の返済は済んでいるころです。あとは分割払いのお金が入って来るわけです。

だから町会は余裕金がないわけじゃない。あるんです。ダミー株式会社の運営も町会の運営もオープンでないといかぬ。報告もなにもせずに勝手にやっているわけではないが、町会の集まりといっても誰方もお越しにならぬ。報告書は来てもそれが紙屑籠に入っているかも知れませんね。ですから果して何処まで皆さんが注意してご覧下さっているのか判らぬ。

チープ・ガーバメントか、

高福祉、高負担か

登記が出来ないというのは、法人格でない出来ない。任意組合でも結成すればやれるが、しかし町会というのは構成員が原則的に固定したものでないから持ち分の問題が非常にむずかしい。町会を出られたら、その持ち分を誰れかが譲りうけなければならぬ。またその持ち分の譲渡について、またその資産の評価というものについてむずかしい問題が出ます。ですから町会のままで登記が出来ればそれに越したことはないと思う。佐々木先生に相談したのですが、出来そうだと仰言ったのでやれやれと思いました。というのはどっかにそういう種類の農協か何んかに例があって、任意団体であったがそれが出来たということを先生が仰言ったので喜んだのだが、結局あきませんでした。株式会社にしておいたらその点はい

いわけだが、そのために迂回すると税金を払わなければならぬ。町会だったら余分の金が出たといっても余分の金を払わなくてもいいが、株式会社だったらもしも金が残ったら税金をとられるわけで、実につまらぬ。町会でしたら収入として会費を調達して、これこれに金を使いました——というので決算報告をして皆の了解を得たらそれで終いですが。それから静かなところに来て……と思っているのに、やかしい町会、隣り組であるというので皆がうんざりした。此処にはまだ隣り組が残っているのかという気持ちですね。

運営が丁寧であればあるほど皆が逆に煩わしくなった。所謂チープ・ガーバメントとの考え方で行くか、高福祉、高負担で行くかという問題があるように、町会も同じで皆んながご満足の行くようにする、道も綺麗にする、蚊も蠅もわかない、治安状態も良い、静かな緑の保安林そのまま、鳥も毎日、囀ってくれるというようにしようとすると、金も要ります。と同時に、煩わしいということです。それと町会を運営して行く町会の役員さんは大変だということです。が、チープ・ガーバメントで何もせぬ人が町会長でおれば静かで金も要りませんわね。その代り水が汚染しても空気が汚染しても、環境がやかましくなっても成行き任せということになるだろう。

煩わしさの半面に優點がある

私は、六麓荘にお越しになった人は煩わしいことは煩わし

いと思われようと思うが、それは当り前のことでそのことは煩わしい半面が皆さまにお判りねがえる良さだと思う。

大分、以前のことであるが苦楽園の宅地開発でダンプが六麓荘に入ってくるがあった。それが当然騒音を出し道路を痛める。そこを開発している会社は加害者で、われわれは被害者ですね。これを大谷さんが取り上げられて、六麓荘と苦楽園の境にダンプの通れないよう門を造り、大きな自動車の通れないようにし、環境保全のため遠回りをしてくれという折衝したこともある。今でも苦楽園と六麓荘のところに、そのときのゲートがある。そのゲートをつくるのに十何万円かかっているが、はじめて此処に來られた方はそこにゲートがあることもご存知ないです。だからうるさい町会だということだが事實はそういう経緯なんです。そういういきさつを山田さんが年史をつくるということは、皆がどういうことでどうなった。昔はこうだった。今はこうだったということを皆が知って下さったら結構ですが、これは非常な経費がかかりますが、決して無駄じやないと思う。皆さんは大まかに考えておられるが私は非常に結構なことだと思っている。

私の町会長当時のことを思うと、思うようになりませんが六麓荘の道路を町が所有しているために、高い建物を建てる計画があっても、下水が利用出来ない。つまり町会長の許可なしには下水が出来ない。関西電力と町会との間に契約があり電気も埋設しないと引けない。そのために、仮りに工事中、電線を上に引くということも許可事項で、これも町会長の判

がないと市が許可しない。

そういう財産を持っているために、そういう問題をチェック出来る。そのために金がかかる。そうでなかったならば、例えば道が痛んだ場合、道路も街灯も市に寄贈してあったとすると、町会は一銭も金は要らず市が補修してくれるわけだが、その代りダンプが通って道が痛んでも、日照権の問題が起った場合も、皆が騒がなければならぬということになる。

しかしいつまでも道路を町が持っているのはおかしい。いつかは市に寄贈しなければならぬ時期が来ると思う。そうでないと道路の舗装は遅れるし、痛んだといっても修繕は後廻しに後廻しになっているのが現実なんです。つまり、道路は君のところのものじゃないか——といわれ、一部の市会議員は六麓荘の土地は私道だ、市の道と違うのだから、なぜ修繕しなければならぬ——という意地悪なところが出て来るわけです。このように法制的にも中途半端のものが残っている。

豊田善右衛門氏略歴

大阪府出身

明治三十七年三月生れ

大正十五年神戸高商卒、昭和七年、豊田産業社長

同三十七年七月相談役、日本繊維製品輸入協会理

事長、関西毛織物同業会副理事長

趣味 ゴルフ、音楽。

町内会運営に親切第一



第三代町内会長

中尾 信雄

豊田善右衛門氏の後をうけて三期町内会長をつとめた人。会員の意見を広くとり入れる民主的なやり方であったが、意思強固で実行力に富んでいた。四十五年四月、町内会長在任中に逝去されたので以下その事蹟などについて、当時から副会長としてこの人を補佐した遠藤順治氏がこの項を執筆した。

保安林再指定の問題

当町に隣接する北部から西北部にかけての山林地帯は所謂国有林であり当町の一部とも見做し得るものであり、その治山治水対策は直接当町の安全な生活に係り従来より最も高い関心事であった。

この山林は当初保安林の指定があったため保安が十分であったが、昭和三十九年三月、遂に民間に払下げられ翌年保安

林が解除される運命になった。

この間、当町としてはこの払下げに反対を続け、その後も保安林の再指定がなされるよう強烈に係争方面に嘆願して参りました。

この努力が実り最近芦屋市がこの土地を買受ける話が整い、この問題は漸く解決の運びに至りました。

水源池の増設

既設の水源池は当町の費用で設備し給水していたが戦後これを芦屋市に移管したものである。

その後人口の増加と水の需要量の増大により水源池の増設は重大課題であった。

芦屋市に対し、幾度となく交渉し、遂に昭和四十一年八月、水源池が増設される運びに至った。

貯水量次の通りである。

既設のもの	容量一〇〇〇トン
増設のもの	〃 七〇〇トン

土地の所有権確認の件

当町所有の土地が何時の頃か、これを囲繞する土地所有者の占有するところとなったことが判明しその返還を求めたが容れられず、訴訟問題となったが全勢力をこの訴訟に傾注し、

遂に勝訴し、当町の主張の通りこの土地の所有権が確認されるに至った。

町内会館設立の件

従来、町内会の会合は当時の町会長の自宅等で実施し、種々不便を感じ支障を来していたため、町内会館の建設は多年来の念願であった。

偶々前述の裁判の勝訴が、会館建設の原動力をなした。即ち勝訴により土地所有権が確認され先方に土地を売却することになり、当該土地の売却代金（賦払の条件であったが）を引当てに、銀行より融資を受け、早速会館の建築を計画し昭和四三年十月竣工を見た。

1、設計者

三田建築設計事務所（神戸市生田区）

2、施工者

株式会社藤工務店（神戸市東灘区）

3、構造床面積

鉄筋コンクリート造二階建

一階八六・九六^m 二階八六・九六^m

会館の一階を駐在所、二階を会館として利用し、町内の会合は勿論のこと町外の利用にも門戸を開いている。

街路灯の架空式配線への切替の件

当所の街路灯及び家庭への配電線は当町開設当時より地中埋設式で所謂電柱はなくこれは他地域には見られぬ、特異性

の oneであり、環境美化の面で他の羨望の的であった。

しかし乍ら最近に至り、生活の近代化特に家庭生活の電化は著しく進み冷暖房等に要する電力は莫大なものとなり、この傾向は将来益々大となって参りました。

従来、の埋設式設備は相当老朽化しており且つこの設備による送電量を以てしては遂にこの多大の電力需要に応じ切れな

い状態を呈して参りました。

茲において町会員に何回となく相談し協議した結果関西電力株式会社と話し合い、他地域のモデルケース等を見学して今日の街路灯を敷設するに至りました。

中尾 信雄氏 略歴

兵庫県出身

明治43年11月15日生

姫路市に於て、中尾工業株式会社創立経営（旧海軍御用工場）（戦前戦中）富士製缶株式会社創立経営（戦後）山陽座経営、ホテルブルーキのさき（城崎）創設経営し事業が軌道に乗った直後、四十五年四月逝去。

六麓莊ゆかりの人々

六麓莊ゆかりの人々——を書くとき、先ず書くべき人は、

ここを開発した森本喜太郎氏であり、株式会社六麓莊社長であつた内藤為三郎氏、専務瀬尾喜次郎氏のことであるが、内藤氏の令孫に当る内藤宗晴氏は現にここに居住しているが、森本氏、瀬尾氏（その令嬢が松井氏に嫁して六麓莊に在住）については余りその伝が残っていない。

内藤為三郎氏

大阪船場で三人兄弟の三男として生れ、内藤家の養子となる。河南鉄道株式会社（現在、近畿日本鉄道株式会社の藤井寺線）の社長を経て大阪電気軌道株式会社の重役、近畿日本鉄道株式会社の重役となり、あやめ池土地株式会社社長として、あやめ池の土地開発に貢献した。

還暦を期に近畿日本鉄道の取締役をはじめ、関係十数社の重役を退いたが、昭和三年勧められて老後の仕事として株式会社六麓莊の社長となり、近代的高級住宅地の開発を行ったが、昭和七年の完成を見ずして、昭和五年七月三十一日死去、

享年七十二。

株式会社六麓莊については主として森本喜太郎専務が官有林払下げの折衝に当り、内藤為三郎氏は大阪財界の有力者に語らつてその資金面に活躍した。

公江喜市郎氏

兵庫県氷上郡出身、明治三十年二月生れ。

大正七年御影師範卒、同校教諭、兵庫県首席視学官を経て、昭和六年私学振興研究のため欧米に出張。同七年より縣立尼崎中学校長、五年間在職。退任後、昭和十一年芦屋高女創設を發起、理事となった。

同十四年武庫川学院を創設、校長兼理事長、同二十一年女子専門学校設置、のち大学に昇格、二十五年短大を併設、学長となり今日に至る。

昭和四十二年四月、勲二等に叙せらる。

趣味は読書、謡曲、和歌、書道で、その名筆は有名である。

細野浜吉氏

兵庫県飾磨郡家島の出身。四人兄弟の末子として生る。家島で切り出す石材輸送の石船の請負業務を兄弟四人で行っていたが、のち土木建築業細野組を大阪に興し、芦屋の名門、猿丸吉左衛門氏に知られて六麓荘開発事業に関係、のち兵庫県会議員を七期つとめ、政友会兵庫県支部幹事長として県政にも羽振りを利かした。

大正の末、芦屋市西山町に邸宅を構え昭和十一年には公江喜市郎氏（現、武庫川女子大学、同女子短期大学学院院长）発起の芦屋高等女学校設立に協力し、その理事長（「学園の項」参照）となったが、同十六年十二月二十三日死去した。

堀抜義太郎氏

その次にはここに国際ホテルを建設した（このホテルは後年閉鎖され、松下電工の研究所を経て現在の芦屋大学に譲り渡された）堀抜製帽社長堀抜義太郎氏である。

この人は三重県出身・明治三十年生、堀抜帽子製作所、近江製帽、堀抜商事各社長を兼ね、上海堀抜製帽廠、同善製業会社の各理事長のほか、堀抜科学研究所長でもあり、戦前はわが国製帽界の覇者であった。

住所は隣接の西宮市苦楽園に在り下村海南氏の邸宅「海南

荘」を譲りうけた人でもある。この人の逸話とか奇行振りは、既に前項の「古老座談会」において断片的に語られているがとに角、六麓荘にとっては忘れられない一人である。

福田眉仙氏

日本画家として著名であった。

未亡人が現在居住され、ご健在であり座談会にその息女が当時の思い出、及び画人としての父を語っておられる。

眉仙氏は本名周太郎、はじめ麦仙と号した。明治八年九月、兵庫県赤穂郡に生れ、円山派の久保田米僊、狩野派の橋本雅邦の諸大家に学び、明治三十三年以来、絵画共進会、第五回内国勸業博覧会等で受賞、のち中国に遊んで蜀、西藏に入り研究するところがあった。

「支那大観」の著はその写生である。大正三年第一回院展に「群犂」を出して好評を博し、のち日本美術院々友であった。

森繁久弥氏

俳優として著名である同氏は、終戦のとき、加藤さんという家で今は坂根さんになっている家に二、三カ月寄寓したことがある。

もともと同氏は隣接西宮市鳴尾に永く居住した人で、少年

時代を鵜尾に過ごしている。

同氏の父君菅沼達吉氏は明治三十四年から八年まで四年間大阪市長をつとめ名市長と謳われた鶴原定吉氏の大阪市政時代、三年間その助役をつとめた人。森繁はその母方の姓である。

曾我廼家五郎氏

明治十年堺に生る、本名和田久。

明治二十五年、十六才のとき歌舞伎役者を志し中村珊瑚郎に弟子入り翌二十六年、中村珊瑚之助の芸名で初舞台。のち旅廻り役者数年、明治三十六年大阪千日前「改良座」で鶴家團十郎の大阪仁輪加を観て「新喜劇」を構想、中村時代（後の十郎）と語って伊丹に旗上げして失敗、間もなく中村福円に一座して働いた。

三十七年、初めて曾我廼家を名乗り、時代を十郎、自らを五郎と改めて浪花座に出演「喜劇、曾我廼家五郎十郎一座」として人気を沸かし折柄、日露開戦でその演しもの「無筆の号外」は大ヒットをした。三十九年東京初乗込みを新富座でやったが失敗。そのころから十郎と芸風での対抗上、意識的に声をつぶして奇声をつくったのが後年の病因となった。

大正二年外遊、帰朝後、新喜劇の称を「五郎劇」と改め、以後、順風満帆、遂に喜劇王の地位を占めた。一堺漁人のペンネームで脚本を書き自ら演出、四十六年間に二百数十の脚

本を書いたといわれるから大したものであるが早く死んだ十郎も和老亭当郎のペンネームで大いに競い合った。

昭和四年、国民芸術賞をうけ二十二年喉頭癌を患い翌二十三年三月声帯を切開、同年九月、無声俳優として舞台に立ったが、翌月一日遂に舞台の鬼と化して逝った、享年七十二。

ここでは、六麓莊ゆかりの人々——というような過去形を使ったが、現在、元三和銀行の頭取岡野清豪氏、神戸製鋼会長外島健吉氏、太陽・神戸銀行頭取石野信一氏、長瀬産業の長瀬誠造社長など会員名簿一つ一つを詳しく拝見すれば産業界に活躍される著名の方々が多いことは流石に六麓莊町それ自身を物語っているものであろう。

六麓莊町の現在

芦屋市を北から南へと縦貫して流れる宮川沿いを自動車で五、六分のぼると、わが六麓莊町に出る。

既述したように昭和三年に株式会社六麓莊がこの地を切り開き、同七年に三〇ヘクタール（約十万坪）を造成したのが町史の幕開けである。宅地は株主に分譲、香港の白人居住地をまねた町づくりはパイオニア精神でいろいろの計画が遂行され、完全舗装の道路の下に電気、電話、ガス、下水道を埋設する共同溝がつくられたし、芦屋市に初登場のバスも会社が行走させたというから、何から何まで先駆的であった。

現在の世帯数は百四十戸、大阪、神戸の財界人、知名の士が多く、何れも豪壮構えであるが、その中でも平野氏邸などは約二千坪の宏大さである。

「景勝芦屋」・「別荘地芦屋」。ハイクラスのブライドETC、そしてそこに住む人たちに送られた「芦屋族」、「芦屋夫人」等々のステータスのイメージは、自然破壊と環境汚染公害の現在、いろいろの点で蝕まれつつあるが、それでも山の手芦屋には、まだまだ往年の「芦屋」が健在である。

その尤なるものとしてわが六麓莊町もそれであるが、それ

だけに環境保全には細かい心遣いがなされており「町内在住希望者は町会に管理と環境を守るため十万元以上町会に納入すべし」という堅い申合せが実行されており、住宅建設時には町会長の承認が必要となっている。

学 校

本市はすぐれた教育環境をもつところから、市内には多くの私立学校が設立されひろく阪神地方を対象にそれぞれ独自の教育活動を行っているが、現在、六麓莊町内には学校法人芦屋学園である私立芦屋大学をはじめとして同女子短大、及び女子高校、同中学、同付属幼稚園が存在している。小学校は現在通学児童、男女合わせて三十二名で岩園小学校に通学している。

学年別内訳は

女	男	一年	二年	三年	四年	五年	六年	計
0	6							
7	1							
1	3							
2	3							
1	2							
3	3							
14	18							

芦屋学園

当学園のそもそもの最初は、現武庫川女子大学長公江喜市郎氏の発案に成り、これに六麓荘開発当時の工事担当者細野浜吉氏が協力して昭和十二年四月、私立芦屋高等学校として発足、十六年四月には五年制、生徒数一四五〇名に達した。同年十二月二十三日、細野浜吉氏死去、二十年十一月二十六日、校舎全焼の不幸があったが、直ちに同年十二月には西宮市苦楽園の学園で授業を行い、二十一年九月には木造平家建校舎が完成。二十二年四月、学制改革により芦屋学園女子高等学校、同中学校となり、二十六年三月には私立学校法施行により、従来の財団法人芦屋啓成会を学校法人芦屋学園に変更、二十八年には付属幼稚園も開設、三十五年四月には芦屋女子短期大学を開設、学長に福富正吉氏が就任、現在に至っている。

更に三十九年四月には「人間の再発見」「人間の再形成」を目標として「芦屋大学」(教育学部)を創設し、初代学長

に福山重一氏(四十四年五月、学園総長として教育全般を担当)が就任し、四十三年四月には大学院を開設、同五月には体育館も竣工、四十八年四月からは児童教育学科が開設された。

筆者は執筆に当り同学園沿革史を詳かに味読したところ、凡そその創設を發起され、あらゆる点においてその中核であり、且つまた教育者として当時既に経歴、声望とも著名であった公江喜市郎氏の事歴功績に一言も触れてない点に奇異の感じをもった一人である。それで「過去を語るを好まず」とされる、武庫川学院長公江喜市郎氏に特に乞い、その経緯を語っていただいたのが左の一文である。

芦屋学園創立当初の

思い出を語る



公江喜市郎先生

口述

私学経営に乗り出す

真実を伝えておく必要があるから敢えて私は言うが、芦屋

学園は公江喜市郎の主唱によって昭和十一年の夏ごろから創設の事業が緒にいたのである。

私は、かねて海外教育の視察をしたいという念願で、兵庫県首席視学として、昭和六年五月七日第一回の外遊を試みた。内務省の命令で一年有余外国の教育視察を命ぜられて、英米特にイギリスの教育制度を見て帰って来た。これはひとつ日本の教育を、やはり私学でやらなければならぬ、現在の公立偏重では真の教育はできない。私学の経営をやってみたい、と思って帰って来たのである。

帰国後、尼崎中学校長に任ぜられ、五年在任してやめることになり、そこで念願の私学経営に乗りだした。

場所として阪神間、しかも芦屋あたりが一番適当だと考え、昭和十一年の夏ごろから篤学、同志の方を物色した。教育の実際は私がやるから、学校法人の役員である理事長とか理事になって学校の創設に力を貸してくれる人物はないか、私は純粹の教育者として教育の實際に携って行く、それにはやはり経営面を担当する理事者が要だから私をバックアップしてくれる人はいないか、と考え十一年の七、八月ごろからその活動をはじめた。それで私の知人関係で当時の精道村長神谷文次氏をはじめ、いろいろな人と話をしたところ、大方のご意見は「芦屋は金持が多いが、学校経営に金を出す人は中々見当りませんよ。」と悲観的なものであった。

その時、同じく県庁におられ、後に芦屋の警察署長になられた小梶新治郎氏——この方とは長い交際で私の出身地氷上

郡の警察署長もしておられた——に相談したり、県会の有力者であって県会議長も勤められた同郷の先輩衣川退蔵氏にも相談したところ、たまたま「芦屋市在住の細野県会議員はどうだろうか、あの人なら土建業者だし、県会の関係で衣川氏とも非常に親しいし、小梶氏も細野氏と親しいから、君と細野、小梶の三氏で芦屋高等女学校を創始したらどうか。」という事になったのが、そもその始めである。

その話を細野氏にしたらいっぺんに飛びついてきて、「そりゃ結構なことですから、先生、計画を進めて下さい。」という事で、これが九月ごろになって具体化した。それで、まず岩園小学校の上に敷地があり、そこを候補地に考えたが、持主が五、六人に分れていて買収が困難であった。その時、猿丸吉左衛門氏が加わってこられて、芦屋の公会堂の西側に猿丸氏の所有地があったので、それも候補地としてみたが土地が狭い。

そのうちに六麓荘の経営者であった森本喜太郎氏に学校の敷地について話をし、現在の敷地二千三百坪を六麓荘が寄付する、そしてあの下の方の六麓荘の運動場も学校の運動場に貸してもらう。その代りにバスを通わせる（その当時でたしか片道五銭であった）ということになった。

芦屋高等女学校の門の入口のところに、大阪城築城のときに六麓荘の山から各藩が運んだのではないかと思われる大きな石が出てきた。○に十の字の島津藩のものもあった。それらを掘り起こす土木工事を監督していたのが、先般亡くなっ

た故芦屋市会議長神井清太郎氏で、当時はまだ三十才になっていなかった。亡くなる前、神井氏に会ったとき、同氏は私に同情していて、「先生、武庫川学院をつくられてよかったですね。」と述懐していた。

さて、芦屋高等女学校については、教諭の先生については全部私が選考選任した。教育勅語の啓成徳からとって「財団法人芦屋啓成会、芦屋高等女学校」ということにし、文部省に申請して認可を受けた。最初生徒の定員が一千名であったのを、志望者が多いので一千二百五十名に俄かに増員許可を得たという盛況であった。高等女学校としては一番大きなものにしたのであるが、初年度は志望者一千二、三百名位で、高等女学校の発足としては最高でよかったと思う。認可から一切の仕事を私がやり、法人の理事長は細野氏がやってくれたということであった。

初代校長に恩師を推挙

そこまで運んできて校長問題になった。実は私が非常にお世話になった恩師がある。御影師範学校の教頭をしておられた岡田五鬼先生で、その先生を校長として迎える、先生は私の恩師でありまことに高德の人だが校長になられたことがない。高德の先生だからこの方を校長に迎えて、私が主事として法人の役員を兼ねておったから、前述の通り教員組織はほとんど私が作った。その時に、今の中高校長の重村君が関西

学院を卒業して就任された。

第一回の入学試験がうまく行って、あの学生服などもみな私が決めるなど、昭和十二年は万事うまく行った。十三年の春になり入学試験のことで、細野氏と私とは根本的に認識の相違があった。私は、身体検査とか試験の成績とかを基本にしなければならぬ——という信念だから、意見の相違はそこから始まった。教育者である以上、入学試験はあくまで公明正大で私塾的のものであってはならないというのが私の信念であったのである。細野氏はこれらの点において私と根本的に意見を異にした。細野理事長と私とが、学校経営に関し根本において意見の相違点があることがはっきりした。そんなことでは、学校を建設して真の学園をつくることはできない。学校を創設して事業をここまで成功させたが、法人の理事長は細野氏である。私は彼に巧く創業時に利用されたのみで、男子として誠に残念であったが恨みを吞んで袂を分つ以外に途はなかった。こういう人物と知らずに学校経営をやったこと自体に私の誤まりがあったのだと思っている。

明鏡止水の心境

父兄会や衣川退蔵氏らが中に入ったりしたが、結局、こういう人物といっしょに教育事業に従事したということは自分に先見の明がなかったのだと思い、自分が全力をあげてあの学校の創設に従ったが自分の理想実現は前述の通り行なうこ

とができない、こういう理事者といっしょには絶対にやって行けない、ということを考え、私が退いて六麓荘を下ることになったのである。それは昭和十三年の夏頃であった。

細野氏は、ただ建築事業をやっただけの人だが理事長であった。猿丸氏が何を言っても聞かず、自分が理事長だということで結局横暴なことをやったのである。

私は、六麓荘を下ったが、丸裸になってしまつて残念でしかたがない。前述の通り昭和六年に外遊して、私学を作ろうという希望を持って帰ったのであるが、第一回はこのように遺憾ながら理想の合わない人物といっしょにやったために画餅に帰してしまった。男として恨みを呑んだのだが、この禍を転じこれを活教訓とした。それが、今日の武庫川学院を生んだのである。

武庫川学院の場合は、経営と教育の最高実務者が一体でなければ意見が違ふというので、芦屋の苦い経験を生かして、昭和十四年二月に創設に踏み切ったわけで、芦屋学園での苦い経験がひとつの生きた教訓となつて、今日も私の胸奥に秘められている次第である。

(昭和四八、五、七、文責在記者)

保健・衛生

「水良し、空気良し」の六麓荘町において、個人の場合、特に若干の疾病とか不慮の事故のあるのは止むを得ないが、特に保健衛生事項として記述すべきものはない。ただ日常生活上大切な役割りをしている水について見ておこう。

旧打出村は昔から良水に不足し、川や井戸水によって需要を満して来たが、人口が次第に増加し、高所である六麓荘、朝日ヶ丘町方面では文化住宅が次々に建設されるに及んで水道の必要がますます急となった。

もと、「株式会社六麓荘」経営の水道があつたが昭和十四年十月、精道村は会社からこれを買収、十五年十月、市制とともに上水道の完備に力を入れた。

しかしながら戦局の重大化に伴い、その施設改良も遅々であり、昭和二十年に入るや阪神地方は数次の空襲により芦屋市内でも多大の戦禍を蒙りつゝあつたが八月五日夜の上空襲によつて市の大半は焦土と化し、上水道の配水系統も甚大な損害をうけた。

二十五年九月には六麓荘貯水池の漏水防止工事を工費約三百萬円で実施している。

水質分析

(昭和四年十月九日 大阪市立衛生試験所試験報告)

一、反	酸	弱アルカリ性	一、臭	味	男飲なし
一、清	濁	殆ど無色透明	一、ク	ロ	五・〇〇
一、硬	酸	低	一、酸	度	検出せず
一、ア	ム	ニ	一、過	ベン	一・五八
一、前	酸	検出せず	一、カル	ウム	四・〇〇
一、酸	分	〇・〇六	一、固	形	〇・四〇
一、硬	度	〇・〇六	一、硬	度	〇・四〇

以上掲げる数値は検水一立中ノ硬度ハ獨逸法ニ依ル右試験成績ニ準レバ眞水質ハ理化學的検査上飲料ニ適スルモノト認めム。

年中行事

年中行事といっても、格別に六麓荘だけのものとはではない。何んといってもこの町が出来たのがまだ新しいのだし、神社、仏閣もない。しかし終戦後のある時期は、町内の人たちが春は女学校の校庭で花見の会をやったり、夏は盆踊りに興じたり、お正月には剣谷神社で名刺交換会などの行事があった。終戦後はいろいろな新しい祝祭日が創定され、行事も加えられているが、それらは省略して、ただ古くから芦屋に残っていたといわれるものを列記しておこう。

一月六日 伊勢講

この日、または十一日、組中の人々を招いて酒宴を張り、六日年越と称して塩鰯を食べる旧慣があった。

一月七日

山神種蒔日、この日に限り農民たちは山に行かなかった。

一月十六日

簀入り、新嫁、下女、下男等を実家に帰らせた。

一月二十五日

三条八幡神社例祭

二月十七日

山勝祭春祭

寛延三年（一七五〇）二月社家郷六カ村と本庄九カ村との間に百年越しの境界訴訟裁判あり、芦屋の庄の勝訴になったので、これ氏神の擁護によると例祭を行った。

七月二十五日

打出天神社夏祭

八月七日

打出親王寺施餓鬼

八月八日

芦屋安楽寺施餓鬼

九月十五日

三条八幡神社例祭

十月十六日

芦屋天神社例祭

十月十七日

打出天神社例祭

十一月六日（または十一日）

伊勢講

十二月二十日

「はての二十日」年内すべての事を整理す。各部落では来年諸入費の予算会を開いた。（武庫郡誌による）

交通機関

別項において書いたように明治四年、大阪、神戸間に鉄道開通、同三十八年阪神電車開通、芦屋、打出の二停留場が設置されたので、以後、阪神両市に達する交通が頗る便利になり、俄かに阪神人士の住宅地と化して行き、大正八年末調査によると年間の乗降客打出三万五千余、芦屋六万六千余という数字を示している。



そして大正九年九月には阪急電車が開通、芦屋川停留所が設置され、昭和二年には阪神国道道電車が開通して（昭和四十八年九月廃線となる）一層の便利さを加えたのだが現在ではこれら鉄道による乗降客数は合算して一日、十数万に達しているから年間にすると一億に垂（た）んとする実に莫大な数字に達している。

そして国電はじめ各私鉄駅からは阪神、阪急各私鉄バスが六麓荘町に運行しているが、六麓荘町居住者の殆んどが自家用自動車の社長クラスであることを付記しておこう。

それとともに、この地の交通史を書いておく場合、明治、大正期、私鉄開通時の面白いエピソードがあるので、これにもやはり触れておく必要がある。

それは明治四十一年の秋「汽笛一声、新橋を」の鉄道唱歌の作詞で知られる歌人、東京高師教授大和田建樹氏に歌詞を依頼、東京高師、東京音楽学校教授田村虎蔵氏が作曲した「阪神電車唱歌」というのがあるということである。

この大和田氏の有名な鉄道唱歌は実に六十六節という長いもので、もしや芦屋界限が歌われている個所がないかと調べたが見当らなかった。ただ六十一節のところに

神崎よりは乗りかえて

ゆあみにのぼる有馬山

池田、伊丹と名に聞きし

酒の産地も通るなり

とあるだけで打出、芦屋のあたりは見当らない。

六麓莊乗合自



線路轉場



この「阪神電車唱歌」は全篇二十二節に沿線各停留所の名を織り込んだもので史蹟、風物が巧みに詠まれており、温雅平調なこの歌曲は何人にも喜ばれて愛誦され、阪神地方の各学校から家庭へと広く口づさまれたという。

その十一節に往年の芦屋が

打出、芦屋の浜づたひ

みゆるは少女の松露採

浴むべき温泉山ぎはに

高座の滝は川上に

詠まれている。

面白いのは阪神電鉄五十年史ともいえる前記「運輸奉仕五

十年」の阪神電車唱歌の頁に出ている漫画で、当時、私鉄が如何に物珍らしく庶民の憧れの乗物の一つであったかを物語っている。

右とともに、市内運行のバスについて記述すると昭和七、八年ころ、阪神間各地のバス路線は阪神、阪急両私鉄の支配下にまとめられていた。そして芦屋市内においては、当時、両私鉄バス路線と並んで六麓莊地域交通のために、この六麓莊を造成した「株式会社六麓莊」の経営するバス路線があった。（「古老座談会」「大谷哲平氏談」等参照）

これは同社が最初、子会社である六麓莊苦楽園自動車株式会社に営業させたもので昭和七年（一九三二）三月より運行を開始、同年六月、親会社がその権利を引継ぎ、昭和十四年に阪神合同バスに営業権を譲渡するまでその経営に当った。

右のように株式会社六麓莊バスの路線が阪神合同バスに譲渡されることによつて、芦屋市内のバス路線は、昭和十四年全て私鉄支配下に統合されたのであるが戦局の重大化とともに輸送事業も厳しい統制経済のために経営が苦しくなり、十九年には六麓莊線も休止されたが、戦後二十一年六月ごろから各路線の逐次復活がはじまり二十四年七月には苦楽園線も漸く復活、三十年二月以来、市内巡環バスが全線運転を開始、即ち 六麓莊苦楽園行きバスは

阪急芦屋―大正橋―国鉄芦屋―上宮川橋―翠カ丘―水道橋―岩園町―岩ガ平―日出橋―五番町―苦楽園と巡回運転されている。

自治機関

自治機関としては六麓荘町内会が存在する。既にそれぞれの項目のところで記述している通り、わが六麓荘町会は、ある意味において治外法権的な存在価値を示し、特別地区条例を要求すると評される如く（例えばその環境保全についての諸制約事項とか新規町内加入者には十万円以上の町会費納付を求めるとか）厳しい慣例を形成している。

が、要するに目的とするところは相互の幸福増進と東洋一の理想境を誇る環境の保全と充実、整備ということであり、芦屋が誇る、より楽しい平安なる理想境にするという一語に尽きるわけである。

そして、昨年十一月には、町の現況及び将来を勘案して左記のような「六麓荘町会の事業計画」案を作成、市当局におねがいしてその実現を期しているが既にその一部は、着々実現の運びに至っている。

一、瓦斯・水道管の改修

全町内の瓦斯管、水道管の埋設が甚だ浅く老朽化しているので法規通りの地下一米二〇の深さに埋設せしめ瓦斯爆発の危険と水道水の濁りを無くさせる事

(4) 瓦斯管については猛運動の結果ガス会社が全町取替え

る事になり目下工事中であります。

(ロ) 水道管については市役所に予算が無いので市会と市役所に猛運動中であります。

二、道路舗装

前記工事に依り町内の道路全部を掘り返しますので、新に舗装の運動が必要であります。

三、河川改修

剣谷の河川が民有地を流れているので河川改修が必要であり一部分は着工して居ります。

四、公園

剣谷国有林の不正払下げで重政農林大臣、内海市長が国会に於て大問題を起した当町真上の山林約四万坪は、町会が猛反対をした結果、公園にする事に決定して居りますので一日も早く綺麗な公園にする様運動が必要であります。

五、公害

排気で町会員が甚だ迷惑を蒙って居る芦屋学園バスの運行路線の変更に対し猛運動中であります。

六、環境衛生

蚊のいない楽しい六麓荘にする為に環境衛生に力を入れ、市の補助と会員の努力で消毒を徹底しましょう。

七、緑化運動

六麓荘の特徴として特に緑を残して環境を良くし野鳥の天国にする為に樹木の伐採を禁じましょう。

八、桜と松の名所

六麓荘は桜と松が最も良く育ちますので桜を千本以上植
え、桜と松の名所に致しましょう。

九、学区決定

朝日が丘小学校が新設されたので学区変更があり、協議
中ですが通学の便宜上岩園小学校に学区を決定される様運
動中であります。

(四十七年十一月)

あすの六麓荘への提言

— 住みよい環境を守ろう —

わが六麓荘町は現在戸数約一四〇、人口約六〇〇で町内会を形成している。

そして既に述べたようにその母体である芦屋市が過去一貫して国際文化住宅都市として発展して来た珍しい都市であり、其処には一軒のパチンコ屋、ボーリング場、映画館の存在を許さず、十三坪以上の工場設置も許容しないという峻厳さを保持し来り、将来もこの基調の変化は考えられないし、また変化さすべくもないといわれているのであるから、その頂点をなす当町も勿論そういうことで、社会情勢の変化、即ち産業構造の変化、生活様式の変化、価値意識の変化とともに、若干の変化がここにも及ぶことは予想されるが、恵まれたこの自然美、建物、施設などの人工の美、さらに住民が協力して隣人を愛し、調和した高級住宅地を永久に保護して行くことがお互いの理想であり、また一つの義務であることを相互が確信している。

さて、續って、最近における世論調査から、本市の「住み心地」を見ると「大変良い」「よい」を合わせると四五・九％と約半数に近く「普通」四六・五％を加えると、九二・四％が一応満足していると芦屋市の資料は示している。

これは芦屋市全体からの統計数字であるが、特に阪急神戸線以北、芦屋川の自然堤防上を中心にした居住専用地区は良好な住宅地が立地し、高級住宅地といわれるのであるが、その中においてもわが六麓荘町は最も秀逸せる住宅ゾーンであることは、これは自他ともに評されているところである。

そして統計によると現在住んでいる場所に「是非住みつづきたい」が二一・〇％「出来れば住みつづきたい」三九・六％、両者合わせて六〇・六％となっているが、これをわが町に統計するとすれば、恐らくは一〇〇％という数字を示すことを私たちはお互い自負し、自信している。

が、しかし、ローマは「一日にして成らず」の歴史のように今日のわが六麓荘町も決して一日にして成ったものにあらず、既述の如く、先人、先見の士が営々としてその良き伝統を相次ぎ、相うけてこの理想境を形成されたのであるから、

われわれ現在の住民もこれを伝承し、より以上に文化的に豊かな町づくりに相協力して行くことがいけば芦屋市の一つの名誉であり、また後人への一つの遺産でもあると考えている。

幸いにも公害に遠ざかり、緑豊かな、美しい自然の風物に恵まれたわが六麓荘の特性を生かして、町の中に樹木、草花、野鳥などをふやして、豊かな生活と香り高い文化を楽しみ、ひとりひとりの住民がお互いに協力し、町を愛し、住みよい環境をつくり、維持してより一層清潔で、健康な町づくりに励もう——これこそが、私たちの理想であり、将来への青写真であることを念じている次第である。

ここに六麓荘町創立以来の功労者であり大先輩であり、且は町内会長として幾多の尽力をされている三氏の抱負なり展望を聞いて見よう。

特別地区を提唱する

初代
町内会長 大谷哲平

六麓荘が今まで築き上げて来た環境の保全、維持、拡充

——そういうものが、私は日本的というマクロの視点から見ても、本当に一番大切なモデルになるのじゃないかと思う。国民が裕福になればなるほど、これを求めるだろうと思う。

これから新しく造ろうとすると、国の制肘、自治体の制肘をうけるだろうし、あらゆる思想が入り込んで来るからとても出来まい。

私がやったときは六麓荘には四十軒しか家がなかった。これは将来二百軒から三百軒になる予定だからここに入ってくる人は、皆が率先してそのときになると基礎的のものが出来るから、私のような考えになっていただいて永久に道路も管理する——というような、こういう感覚を守ってお互いが一つの町として年齢をとっても楽しく住めるような立派なものにしようじゃないか。環境がよく、道がよく、地形がいい、そして住んでいる人々が皆立派だ——こういう町づくりの理想を守って私は一生を皆さまに尽して行きたいと思っている。それから、も一つ言いたいことは、これだけの山地に立派な道路をつけ、いろいろ開拓をして来たが本来、市がやらなければならぬのに市がやっていないから、町でやっていることに市は一つも金を出していないじゃないか。それを計算すると何億円です。しかもそれを町がやったがために土地が良くなり固定資産税は非常に上っているわけだ。市が金を出さなくて、そしてわれわれは固定資産税を払っているのだから、年間七、八千万円の固定資産税は山林並みに返えせ、返えせばそれだけの金で町会は自由にやって行ける。

それだけの税金を市役所に上げており、その他全て市に協力しているのだが、一方、私の方で建設した事業の金は市民の税金を一文も使っていない。そこでわれわれの特別的な構

想というものは、やはり筋を通してくれというのが、その主張である。

特別地区にして貰うために、私の理想としては学園を抜いて他所に移転させて貰いたい。六麓荘というものはあくまで学園都市じゃないからこれを移転させて貰いたい。更にその後は高級住宅の特別地区とさせてくれというのが私の今の私の心境で、それから市役所がいろいろの仕事や負担を六麓荘に課して来るのを止めて欲しい。その前にわれわれは非常な犠牲を払い、市に寄付したものを他に払い下げたことなどは問題だから、過去の歴史を認め、尊重して功労者を立てて欲しい。こうやってわれわれ六麓荘の人たちは全員が一致してこの地域を支えて来ているのだから、私は市に向って言いたい。この六麓荘の歴史を守れ、環境を壊わすな、芦屋の特長を伸ばせと。

そしてそれをするには六麓荘を特別地区に指定するのが芦屋の特長を伸ばす所以じゃないか。この環境をこわさないこと、歴史をこわさないこと、特長を伸ばすこと——これがわれわれ町内会長としても三大立願として、六麓荘は今日まで幾多の風雪に耐え忍んで来たのだ。緑を求めて、此処に來られた人は町内会とも永い縁を持っていたいてるが、その人たちは頭の中に以上のような理想をもっておられる人たちなのであるから、市当局もどうかこの夢を壊わさないでくれ——と私は言いたい。

そして私のようなものの後を継いで現在町内会について努

力して下さっている山田六郎氏は、正義感の強い人だから氏に接する人は、その正義感に押されて来る。

凡そ軍司令部というものは強くなければダメだ。それで私はよく山田さんに少し例えは悪いかも知れぬが「あなたも私も、六麓荘という墓がある。町全体がお墓だから、お墓だけは守ってくれよ」とよく冗談に言うのと、山田氏は「わたしは大谷と呼ばれて墓守りに選ばれてしまって、やめるわけには行かなくなった」と笑っておられたが、山田さんもやはり六麓荘のこの伝統を守ろうという気持ちになられて、そういう言葉になったと、私は男同士の非常に麗わしい言葉の一節だと思っている。

町内会所有道路の問題

第二一代 町内会長 豊田善右衛門

今後の展望というと、先ず現在、町が所有している土地道路をどうするかということです。道路、下水、地下埋設のガス管、一部の治安灯以外の治安灯、これらを市に寄贈するが、なぜわれわれが保安をはかっていかなければならぬかという、これは今後の問題点です。

特別地区という問題は市条例で指定して貰う。それはその土地が高さ九〇メートルですか、一〇〇メートルにはそうい

うものがあるが——保安林ですからそういう条例はあるが

市に任かしておけば市のチェックですから、年中市の監視ちゅうわけでないから現地のチェックほど行き届かない。

町のものであれば何んでもかでも町会長のところに言うて来る。治安灯がつかぬとか、電球が割れたとかいうようなことでも電話がかかって来ると、直ぐ修繕したり取り替えたりする。それが若し市であったとしたら、恐らく永い間放ったらかしであろうと思いますね。

だから将来の展望というか、六麓荘町の在り方の展望ということは、道路の問題をどう解決するか——ということだと私は信じている。

理想境の保全と、

その充実



町内会長

山田 一郎

私は昭和四十三年の春、この地を見つけて住居を建築し、

同年十二月移転してまいりました。私は兵庫県の但馬、日本

海国立公園の中心地、香住海岸に生れましたので、自然を愛し、自然の中で暮したいと絶えず念願しておりました。

学窓を巣立つと同時に実業社会に入り現在も大阪市内で事業を致しておりますが、晩年は空気の良い風光明媚な地で静かに楽しく余生を送りたいと思い三年の歳月を費して当地を見出しました。そこで町会長宅を訪問して住居を建築したいと申し出たところ、町会には樹木の伐採、下水の処理、建築規制等に関し厳しい規約が出来ており、実によく行届いた町会であると判断致しました。

町会長中尾氏は故斎藤隆夫先生が昭和二十二年国会議員に立候補された際、郷土の同志として私と応援をとみにした但馬出身の友達であった関係上、非常に親切にしてください建築についても色々指導を受けました。その際、中尾氏が

「是非あなたに頼みたい事がある」と言われました。六麓荘の裏山剣谷は国有林で緑に覆われているため六麓荘にとつては防災と水資源確保のため、現状を崩してはならぬ山であります。当時、前市長が有名な汚職事件を起し剣谷は民間の農林開発株式会社の手に渡って宅地造成されることになったので、当町会並びに芦屋市内の熱意ある人々の猛烈な反対運動が起り、台湾精糖事件が国会に取り上げられ、陰の不正が暴露し世上で騒がれていた時であったので、県会副議長の前歴を活かして是非あなたに尽力して貰いたいと中尾氏から頼まれました。

早速、私は県並びに市当局に対し運動を開始しました。芦

屋新市長渡辺氏は宅地開発を阻止するために保安林として願出を出し、この山林を宅地にしないよう計画したのであるが、保安林は所有者が申出なければならないというのでこの願出は不許可となり、市長も困り切っておられました。私は芦屋市が払下げを受けるより他に方法はないことを提案して国会農林委員二十余名に現地視察をしていただいて陳情し、芦屋市、芦屋市会、町会挙げて之に邁進した結果、遂に効を奏し農林開発(株)が払下げを受けた四万坪を芦屋市が買いとることに成功したのであります。

その後、中尾氏から再三町会長を引受けてくれと言われましたが今更会長でもないとして断り続けてきましたところ、中尾氏はホテル経営のため遂に辞表を出して城崎に移られましたので役員、会員の推せんにより私が町会長に推されて就任したのであります。

町会長に就いて先ず考えたことは世界各国から幸福な人々が集まっている当町内の親睦を計ることでありました。この良い環境に住むお互がより一層心の交流を蜜にすれば、この上ない理想境になると考え努力しております。

各方面の良識ある善処が必要

次に剣谷を公園にし六麓荘の水資源と防災を確保する事であり、剣谷は芦屋市が買取ったとはいえ、われわれの最終目的達成には未だ相当の日月と努力が必要であり、町内挙

げて御協力願はねばなりません。

第三に自慢の道路ではありますが、人力車時代の建設でありますため、諸施設の埋設がまことに浅く現在の法定基準に直さねばなりません。市当局に願出てはおりますが、これが実現に至るには剣谷と同様、各位の御協力を御願いしなければなりません。

第四に去る昭和四十六年四月より芦屋学園が大型通学バスを数十台、朝夕走らせ、排気ガスの公害で六麓荘名物の樹木や桜を枯れさせ、重量による振動で道路の下水道管、下水管、ガス管を破損させ、急坂を登るバスの騒音に住民は多大の迷惑を蒙っております。その上、道路上に多数のバスが長時間待機するため出入りに困る家々からも苦情が多く、住民各位より通学バス廃止の強力な要望が出て居り町会で廃止の決議をいたしました。学校当局に再三交渉致しますが聞き入れず、この道路敷地は当町会の所有であるが道路の管理を市に委託している関係上、市長並に市会議員に陳情し、あるいは道路規制の任に当る警察当局に交渉するなど手を尽しております。偏に芦屋学園当局の良識により営利学校のみ意識に走らず、真の教育者としての自覚により円満解決するよう希っております。芦屋学園は、元当町会員が団欒の場として造られた公園と運動場を個人に分配出来ないため、市に寄附したものを市当局がその趣旨を無視して芦屋学園に払下げたものであります。

人の生命を尊重し公害追放が強く叫ばれる時、当町会とし

ては、芦屋市木の松と、市花の山つゝじ、並びに名物の桜に覆はれたこの日本一の環境を保持し吾々の生活圏を守るため凡ゆる方法をもって守りぬく覚悟であります。これらの目的のために、わが六麓荘町内会は「剣谷国有林払下げ反対」と「芦屋学園専用貸切バスの交通禁止」の二件について、決議をなし昭和四十七年十一月二十七日、町内会長名をもって芦屋市議会並びに兵庫県知事、農林省大阪林野局長宛質問書、請願書を提出して強硬な抗議文を提出し、あくまでもその目的貫遂に努力していることを茲に付記しておく次第であります。

斯くの如くして、榮ある当町会の歴史を編集することを町会は決議し朝日新聞社客員、加藤龍一先生を煩わして昨年末来、努力いたして来ました。同先生の徹底した御調査と町内会役員並に有志の方々の御協力により充分なる資料が集まりここに発刊する運びに至りましたことは御同慶の至りであります。

この地の由来は遠く、理想は高く、数々の懐旧の情を養う事蹟が一冊の本に盛り切れないほどあり、ここ六麓荘の地に一層の愛着をわれわれは感じております。その上、加藤先生の麗筆により魅力溢れる文章となつて余す処なく記述されております。御一読下されば私と御同感下さる事と存じます。

尚一層この地を愛し、皆々様とともに喜び合つてゆきたいと存じます。

山田六郎氏略歴

兵庫県香住町出身。父、五郎兵衛氏は永く同町長を勤め歴代、香住町の名門として知らる。

育英商業卒。

終戦後、兵庫県会議員、同副議長を経て、二十四年、大阪道頓堀に食堂「くいだおれ」を創業、円山応挙のコレクションは有名。

六麓莊町内会規約

(総則)

第1条 本会は六麓莊町町内会と称する(以下町会と略称)

第2条 本会は芦屋市六麓莊町の住民、不在地主、ならびに、近接地区の住民を以て組織する。

第3条 本会の本部は、当町町内会館内におく。

(目的及び事業)

第4条 本会は会員の福祉の増進、治安の確立、環境衛生、ならびに、風致の保持、および、会員相互の親睦をはかり、町会の健全な発展に寄与することを目的とする。

第5条 本会は前条の目的を達成するために、次の事業を行なう。

1 会員の福祉厚生に必要な施設の整備と運営

2 治安確立のため諸施設の整備と運営

3 会員の親睦を図るための諸事業

4 その他本会の目的を達成するために必要な事業

(役員)

第6条 本会に次の役員をおく。

1 会長 一名(任期二年) 理事が兼務できる

2 副会長 一名(任期二年) 理事が兼務する

3 会計 一名(任期二年) 理事が兼務する

4 理事 若干名(任期二年)

5 会計監査 二名(任期二年) 理事が兼務する

6 班 長 若干名(任期一年)

7 各部委員 若干名

8 相談役は必要に応じて、おくことができる。

第7条 会長は本会を代表し、役員会を主宰して会務を統轄する。

会長事故あるときは、副会長が会長の職務を代行する。

理事、班長、および、各部委員はそれぞれ役員会に於て決議された任務を遂行する。

相談役は会議に出席し、会長の諮問に応じ町会の運営に協力する。

第8条 役員会は、毎年四月、および、十月の二回、定時に会長が招集するほか、会長が必要と認めた時は、臨時に召集することができる。

第9条 役員選出

班長は班内にて選出する。選挙または前班長の推挙

による。会長は役員会の推挙による。副会長は会長の推挙による。各部長も上に同じ。

第10条 班長をのぞく役員の任期は二年、班長は一年間とする。いずれも再選を妨げない。期間は、会計事業年度の総会日より二年後、もしくは一年後の総会日までとする。

(組織)

第11条 町会の地域を十班以上に区分する。各班に班長をおく。

第12条 町会の事業を運営するために、次の各部を設け、理事が各部長を兼務する。

総務部、河川部、会計部、道路部、衛生部、福祉部、治安灯部、広報部、交通部、防犯部

第13条 町会に婦人会を設け、運営費用は町内会より支出する。

第14条 総会は、毎年四月までに、会長の召集により開催する。その他、役員会が必要と認めたときは、臨時に開催することができる。

定期総会に於ては、事業報告、および、会計報告を承認し、予算の編成、および、事業計画、ならびに、町会全般に亘る重要事項を審議決定する。

(会計)

第15条 町会の経費は、会員の会費、および、交付金を以てこれを支弁する。

第16条 会員は、会費を三ヶ月づつ納める。各班長は、規定の会費を全額、月の二十八日に会計部委員に届け出るものとする。

会員の会費負担額については、役員会に於て決定する。

新入会員の寄附金、町会費については、役員の決裁を班長が伝達する。

第17条 町会の会計年度は、毎年四月一日に始まり、翌年三月末日に終る。

第18条 本規約に定めなき事項については、役員会において審議決定する。

本規約の変更は、総会の承認を要する。

この規約は、昭和四十七年六月一日より実施する。

(附則)

(一) 本町会に入会を希望する者は、本町会内規の金額を入会金として寄附しなければならない。

(二) 道路保全のため、水道、電話、電気、ガス、その他道路上の工事、および、道路の使用は町会の承認を受けるものとする。電話、電気の引込工事は地下ケーブルとする。工事による道路の損傷は自己負担に於て補修するものとする。ダンプカーの加き重量車は、交通安全のため通行禁止。

(三) 保健所の規定により、水洗便所の清掃は毎年一回行ない、市役所、および、町会の推薦する業者以外のもの

のが行なう場合は、最初の上水を道路わきの溝へ捨てさせぬよう厳重に監督し、近所の迷惑にならぬようにすること。

四 緑化のため、松毛虫、および、蚊、蠅の撲滅を期すための害虫駆除薬散布は夏期中に数回行ない、各戸協力のこと。

五 不在地主も、B会員として過半数入会している以上、空地といえども塵埃、および、伐採枯枝を捨てぬこと。近隣の空地はお互いに協力して清潔にするよう心がけること。

六 町会に無断で、案内図に記入、目印、貼付などを行なわないこと。空地へ案内杭を打ちこむ場合は、必ず町会へ申し出ること。

七 風致地区保存のため、建築を行なう場合、高層建築へい、または危険のある石垣や、その他、近隣に迷惑を及ぼすような建築をしないよう設計の当初に於て、予め町会の承認を得ておくこと。

八 新設便所は、絶対に汲みとりをやめて、水洗とし、直接マンホールにつなぎ、わきの溝に流さぬこと。

九 塵埃、灰の処理は、ペール缶を使用し、定められた日に市より差し回しの回収車に托すこと。道路上の塵埃箱は、いっさい認めぬこととする。

一〇 会員に対する弔慰金は、別にこれを定める。不幸の場合は、その家族より班長に連絡し、班長はこれを会

長に伝達し、会長は直ちに会員に伝達する。
一〇 転居のため、会員が退会するときは、餞別を贈呈することができる。
以上

あとがき



編集者

加藤 龍一

凡そ地誌とか年史というものは無味乾燥というか、面白味が少く、読み辛いものである。

だから筆者はこの点に留意して、例えば座談会などの中見出し一つをつけるにも、六麓荘の昔をにじみ出させるようにと留意したし、マンガの一つも挿入して見た。

も一つ申上げておきたいのは、筆者が山田六郎会長に御昵懇をいただいた経緯である。

去る四十五年、大阪で開かれたEXPO'70の期間中、私は経済雑誌の編集長として、わが国からユニークなパビリオン及び事業を万博内においてなされた諸名士を順次に訪問対談して、これを雑誌に連載した。

その中に大阪の名物「くだおれ」の山田社長もあった。これが機縁で爾来、御高誼をいただき、昨夏、はからずも本書の執筆、編集の御委嘱をうけ、筆者が愚図々々している間に、ぐいぐいとプランを遂行されて行った。

私も職掌柄、幾多の社長クラスにお目にかかっているが、凡そ社長とは決断と即行——というのが定石らしく、山田社長も、そのお一人と尊敬しているが、当初は山田さんの人を引っ張る力に微笑したものだ。

閑話休題。執筆のインテリメートについては別項「その地名考」のところで述べたように、私は隣接の西宮市（鳴尾村当時から小学校時代を其処に過ごした）に住んでいるから、ハイ・ステータスを誇る芦屋については昔から若干は知っている。が、しかし、約そ半歳、二足の草鞋を穿いてのこの執筆は、まことに難行苦行の連続であっただけに、叙述内容において缺如したことは御寛恕をお願いしておく。

終りに編纂委員諸氏の御尽力と、多大の御協力をいただいた芦屋市当局の御好意に厚く御礼申上げ、併せて参考書目に謝意を表する次第である。

筆者略歴 大正十二年、中央大学専門部政経科二年、昭和五年朝日新聞社入社、編集局、出版局編集部勤務。伊勢新聞文化課長（戦時出向）、全朝日労組大阪委員長等を経て現在、同社客員。「時局講演」「まごころ」「産業新潮」編集長など歴任。

著書に「民間飛行最初の人、武石浩波」「真珠王御木本幸吉伝」「大関酒造社長 長部文治郎伝」著述に「昭和軍閥史」「安川第五郎伝」。編著に「大阪市商連二十年史」などがある。

参考書目

武庫郡誌

武庫郡教育会

芦屋市史

芦屋市史編集専門委員会

芦屋郷土誌

編著者 細川道草

芦屋市総合計画(資料編)

芦屋市総務部

「八十塚14号墳」測量概要報告

六甲南麓群集墳測量調査団

昭和三年九月刊

六麓荘写真帳

阪神電鉄社史

輸送奉仕の五十年

新聞に入りて

著者 下村海南

摂津名所図絵

明治四十四年十一月

西摂大観

編著者

仲彦三郎

芦屋市

六麓荘四十年史

昭和四十八年八月廿五日 印刷
昭和四十八年八月卅一日 発行

編集者 加藤 龍一

発行者 山田 六郎

発行所 芦屋市六麓荘町内会

印刷所 日本印刷出版株式会社

小林 積造